

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 8 6 1 2 3 4 5

387
253

始



387-253



覺
めよ
日
本
人

陸軍中將
堀内文次郎著

大正
10 8 17
内交

覺
め
よ
日
本
人

陸軍中將 堀内文次郎 著

例

与尚子也

力物行



覺めよ日本人目次

(1) 次 目

一、亞細亞の權利……………一
予盾極る正義人道——基督教を棄切る基督教國——不公平なる地域の分配率——亞細亞の權利と叫ぶ——許されし公理に従ふ也。

二、英の三C政策と米の三A政策……………一
資本經濟戰爭來る——英の宿望の三C政策——米も亦た三A政策。

三、ワシントン系米人の爲に謀る……………一七
雜駁なる米國の民族——頭隠して尻隠さず——神と基督に背いて走る——大和民族の遺傳性を知れ。

四、ポリシエビズムを防ぐの道……………二七
信流の城郭の固め——レーニン主義の大謬——過激思想はスペイン風の如し。

五、秩序破壊の因……………三六

現代文明は進歩か退歩か——國初よりの社會本位主義——板狭みに苦む中流階級——資本階級自衛の唯一良策。

六、クロバトキン並に此の種の思想……………四四

山川風土が人を生む——議論の出發點を誤る——空想に描かれた世界——露國の土壤の所産のみ——舶來思想に惑ふ勿れ——我より世界に教へよ。

七、新マルサス主義に就て……………六〇

咀ふべき新マルサス主義——徳川期の新マルサス主義——物の起るは偶然ならず。

八、質問辯を歐米に學べ……………七〇

東西兩洋人の特種性——何故に？の有無に存す——大に質問辯を養へ。

九、三十年後の食料問題……………七八

最近五ヶ年の米の産額——三十年後を豫想して——世界的米騒動の勃發も——經濟的競争の悲惨——魚目燕石も甚しい哉——皮相なる平和思想——誰か無關心なるを得ん。

一〇、八方塞りの日本……………九一

日本の全盛期去るか——世界の氣勢に覺めよ——上下共に眞面目なれ。

一一、日本に青年なし……………九九

撥亂反正の大活動は——青年と老人と壯老者——墮落せる青年と現代——漫然たる國家否定の妄説。

一二、山野の跋涉を國技となせ……………一四

宇宙間の大活動の根本——青年はエネルギーの根本——國家の眞の確實な統一は

一三、一滴の血も値あらしめよ……………一九

後手を打つ日本の外交——ト巧なるかな英の外交——米國の外交も亦然り——我が外交は機略を缺く。

一四、盛に經綸を行ふべし……………二六

此の心的準備を以て——英明の先帝と輔佐の功臣——偉大なる福澤翁の力——瀛乎たる翁の氣節——彼も人なり我も人なり。

一五、物質を超越せよ……………四二

日本の國體と歐米の國體——西比利亞出征軍の効力——世界は益々弱肉強食——遠大なる精神的慰安を。

一六、大正十年は總勘定期……………一五六

三十年一世と十年一期——明治維新より現在まで——一時を糊塗する勿れ。

一七、尼港殉難者を紀念せよ……………一六六

政争を超越せる大問題——無氣力の國民に友邦なし——ダモンチオ氏の志を知れ——五月二十五日を紀念せよ——復讐よりも英靈吊慰の道——我が七百名殉難者の志。

一八、貧者の一燈……………一七四

民族其者のエネルギー——國辱紀念は何故に非か——日露親善の妨害とや。

一九、迂愚なる日本の學者……………一八〇

學者は机上の空論に——活學者たる本分を——學者は國民腦力の代表。

二〇、日本人の自覺の差……………一八九

勝て驕らざる米國人——宗教的自覺と婦人の勢力——日米人は露と墨の差——政治に

裏面目なる國民。

二一、ハリス監督の大人格に學べ……………一九四

日本で殺さるゝは本望——特筆す可き功績——此のプリンシブルが。

二二、人類の滅兆……………一九八

斯る温情に立脚して——華盛頓の精神を没却す——春秋の筆法を用ひば。

矛盾

覺めよ日本人

堀内文次郎著

一、亞細亞の權利

矛盾極まる正義人道

有史以來、今日に至るまで、個人間の道徳は發達したけれども、國際間の道徳は左までに發達せぬ。それ故、古來、戦争の絶えたことなく、遂ひに此の度びの如き未曾有の大戦禍をも勃發するに至つたもので、之れを救うて、將來、再び此の戦禍を見ざらんと欲せば、是非、國際間の道徳を發達せしめ、之れを個人間の道徳と一致せしめなくてはならぬ。是れ米大統領ウイルソン氏の此度び國際聯盟を提唱し、其の國勢の強弱大小、人種の如何、宗教の如何を問はず、宇内の萬邦をして、悉く、之れに加入せしめて、一々正義人道に照して結合し、是れによつて國際間の争議

亞細亞の權利

個人間の道徳は發達したけれども、國際間の道徳は左までに發達せぬ。それ故、古來、戦争の絶えたことなく、遂ひに此の度びの如き未曾有の大戦禍をも勃發するに至つたもので、之れを救うて、將來、再び此の戦禍を見ざらんと欲せば、是非、國際間の道徳を發達せしめ、之れを個人間の道徳と一致せしめなくてはならぬ。是れ米大統領ウイルソン氏の此度び國際聯盟を提唱し、其の國勢の強弱大小、人種の如何、宗教の如何を問はず、宇内の萬邦をして、悉く、之れに加入せしめて、一々正義人道に照して結合し、是れによつて國際間の争議

をも解決して、地上に永遠の平和を齎さんとした所以、我輩は、初めて此の提唱に接した時、流星は米人なる哉、又た米國大統領なる哉と、其の崇高なる道義的精神の光輝に打たれて感嘆己む能はざるものがあつたが、併し乍ら、己に、斯かる道徳に立脚する世界國家的一大機關を創設し、國際間の主要なる諸問題を一切之れに附議するを以て本旨とする以上は、米國たるものは、此際、凡て過去の歴史的政策を一擲して、飽くまで公平に、苟くも國際的關係を有する重要なことならば、自國内の問題をも商議するの權能を、進んで此の國際聯盟に附與せなければならぬ。是れが、其の有らゆる問題に於ける、提案者の最高の道徳であらねばならぬ。自分は進んで、世界の如何なる問題にも此の國際聯盟なる機關を通じて容喙する。けれども、自國の勢圈内の問題は、自國で處理する。又た必ずしも國際聯盟の容喙を勞せぬといはい、何人と雖も、其の不公平に驚かざるを得まい。

米國が、大統領モンロー以來、百年間、久しくモンロー主義を宣言し、固執し來つたことは、我輩も之れを承知して居る。併し乍ら、それは事實に於て、此の度び

容喙

ウイルソン氏が國際聯盟案を提出する日に、既に明らかに撤廢し終つたことを認めざるを得ないのであつた。何んとなれば、亞米利加は亞米利加人の亞米利加であつて、他國人の亞米利加では無い。それ故に、亞米利加のことは、亞米利加人自ら之れを處置すべく、又た斷じて他國人の容喙を許さぬといふ。是れが、モンローである以上は、其の動機の善惡に關せず、既に世界の問題の商議に自らも一議權を分有する米國が、獨り、猶ほ、米國は米國人の米國なり、それ故に斷じて世界の容喙を許さぬといふことは不公平であり、不合理でなければならぬ。然るに、何事ぞ、事實はモンロー主義を撤廢せざるのみか、百尺竿頭一步を進めて、從來は條約に非ず唯だ自己一個の宣言に止まつたモンロー主義をば、却つて、今度の國際聯盟條約の條文中に加ふるに至つたことは、實に其の自家撞着の甚しきに驚かざるを得ぬ。勿論、是れがウイルソン氏自身の素意にあらざることは、其の當初の原案に缺けて居たのが、上院の勢力に脅かされて終ひに此に至つたのだとは知るけれど、而も、此くの如き理義の貫かざる鵠的妥協案に満足する米人の不徹底極まる道義觀念を追責

せざるを得ぬ。

基督教を裏切る基督教國

我輩は、第一に、此のモンロー主義維持に驚かされた。後、更に、第二に我が政府の提案にかゝる人種的差別待遇撤廢案の否決に驚かされた。正義人道を以て結合すべき國際聯盟に於て、而も、我が與國たる英國並びに國際聯盟提案者の米國が、共に此の提案に反対なりしことに最も痛く驚かされた。今や、文明國には、皆な、其の國內に於て、ドロア、ド、オンム、即ち、個人の權利は認められて居る。然らば、其れの延長であるところの國際間に於て、又た、當然、ドロア、ド、ナシラン即ち、民族權利及びドロア、ド、ラジー、即ち、人種の權利なる者を認めなければならぬ筈である。國際聯盟の根本的動機は、當に、此の個人的道德の徹底的擴大であらうと思ひの外、此の極めて道理あり、重大なる意義と効果とを伴ふ提案の容易に否決されたことは、最も我輩の驚かざるを得ざるところのものであつた。

國際聯盟からは、遂ひに人種案を否決した。けれども、自然の與へた吾人の權利は、決して、其れが爲めに抑壓し得べきもので無い。我輩は、今の歐米の學者、特に、口に正義人道を唱へて己まぬ人々が、個人の權利に就いては頗る之れを尊重する常識あるに拘らず、事實上、國際間のことに當つては、各種の權利を壓迫し、度外視して顧みぬを遺憾とする。試みに地圖を開いて見よ、全人類が、同じく生を天地の間に受けて居り乍ら、其中に特にアングロサクソン民族のみが非常の優遇を受けて居る。凡そ、動物の常性より言へば、悉く、生活の保證を天より與へられて居る。然らば、等しく、動物の一であつて、而も、他より大いに傑出して居るもの、獨り生活の保障を持たぬといふ道理があらうぞ。天は一切の生きとし生けるもの、動植物を併せて、之れを長養せんと謀るとは、是れ基督教道德の吾人に教へる眞理である。路可傳に曰はずや「鴉を思ひ見よ、蒔かず、蒔らず、倉をも納屋をも有せず、されど、神は尙ほ此等を養ふ。況して、汝等は鳥よりも貴きこと幾何ぞや。」百合花は如何にして育つかを思へ、勉めず、蒔がざる也。我れ汝等に告げん、ソロモ

ンの榮華の極みの時だにも、其の装ひ此の花の一に及ばざりき。神は、今日、野に在りて、明日、爐に投げ入れらるゝ草をも、此くの如く粧はせ給へば、況して汝等をや」と。基督教は、此の神の意志によつて、博愛を説いたもの、博愛とは、畢竟宇宙間の各人類が共に生存を全うして行くの意に外ならぬ。

神は、基督の、「是くの如く此の小さき子の一人の亡ぶるは、天に在す汝等が父の御心に非ず」と言つた如く、精神的に、凡ての人類を亡ぼさざらんと思はるもの同時に、又た肉體的にも同様に勉むるもの、基督は、「汝等、祈る時に、異邦人の如く繰り返し言葉を言ふ勿れ、彼等は語多きを以つて聽かれんと思へり。是れ故に、彼等に做ふこと勿れ、汝等の父は求めざる先きに其の需用物を知りたまへばなり。されば、汝等、斯く祈るべし」として、「我等の日用の糧を今日も與へたまへ」と教へて居る。是れ丈け云へば、神は必ず吾人に平等に糧を與へるほどに、平等の愛を向け、吾人の生活を顧慮してある。斯かる基督教を信奉すると稱し、而も之れを以て誇りとして基督教徒と非基督教徒といふをば、直ちに、文明、非文明の同意語と見做

して、差別的待遇を欲しつゝさる歐米人が、而も、其の爲すところを見れば、全く之れに反し、不公平極まるものである。鴉は鴉、百合花は百合花、皆なそれ／＼に生存の天地がある。人にして動植物に如かざらんや。而も、鳥獸は、時に、同類相搏噬し、草木は時に伐られて薪となる。けれども、人は萬物の靈長である。されば自ら、其等の禽獸草木とは、當然差違がなくてはならぬ。

不公平なる地域の分配率

茲に、人類には、生活の保障を要する。而して、生活資料の分量は、其の有する地積に必然の關係を有するが、其の分賦率を較ぶるに、アングロサクソンの平均一平方里に三十人未滿を容れるに對して、東洋人、就中、日本人は一平方里に三百人を容れる。斯かる吾人の生活状態が極めてアングロサクソン民族に對して不公平であり、且つ甚だ危険なることは、一見、甚だ明瞭なるものである。

然らば、之れを如何にすべきであらうか。本來、自然は、即ち、基督教的用語を

藉りて言へば、神は決して、此の地球上に國境を認むべき筈が無く、國境は全く群雄割據の歴史的産物とし遺物として、今日にまで存在する人爲的區劃に外ならぬ。而も、其の人爲的區劃も、其の根本が、弱肉強食的抗爭の結果であるが故に、甚しく分賦の公平を缺いて居るのも己むを得ぬが、今ま、猶ほ、舊態、依然、各、國境を頑守し、人種の異同によつて交通移住を制限し、若しくは拒否せんと欲するが如きことを續けては、強者は、いよく跳梁し、弱者はいよく萎縮せざるを得まい。

而も、此くの如きは、決して、一視同仁なる神の御心ではなく、神の御心に背く人間の我儘である。國際聯盟にして、眞に戦争の慘劇に懲り、正義人道に本づいて永久の平和を望むとならば、此際、當然、斯かる陋習を打破する爲めに、先づ人種的差別待遇撤廢案を通過して然るべきに、之れをしも敢へせず、而して、却つて、モンロー主義の宣言を確實なる條文に書き込むといふに至つては、吾人も亦た斯かる刻下の世界の犬勢に順應し、自ら防禦する相當の覺悟と手段とが無くてはならぬ。

亞細亞の權利を叫ぶ

此くの如き立脚地からして、我輩は、今、茲に、亞細亞の權利なるものを提唱せんと欲する。即ち、上掲の如き不平等なる地域の分配を受けて居る、吾人、東洋人は、東洋人が、現在、所有すべき丈の地域を、完全に自ら統治して、其れによつて得られる丈の生活資料を十分に受けることが大切であり、又た至當であるとする。之れを約言すれば、亞細亞全洲に生息する各民族の權利といふことになる。今一つ言へば、亞細亞モンロー主義といつても宜しい。

許されし公理に従ふ也

何んとなれば、亞米利加は亞米利加人の亞米利加である、故に亞米利加人が之れを支配すると云ふならば、亞細亞は亞細亞人の亞細亞である、それ故に、亞細亞人

が之れを支配するといふことも、全く其の外延内包共に合致して、寸分も違はざるものであることを知らねばならぬ。而して、假令、それが、吾人より見れば鶴的であるにせよ、兎に角、國際聯盟條約の一項たり得る丈けに歐米人の眼に合理的であるものとするれば、其の全然、同性質なる此の亞細亞モンロー主義が、何んとて獨り不合理となるを得やう。

南北亞米利加が全然、亞米利加人の支配すべきものであると明言し得るならば、吾人も亦た亞細亞は、全然、亞細亞人の支配すべきものであると明言し得て、極めて合理である。吾人は、結果に於て、兎に角、天下晴れての公理たり得た亞米利加モンロー主義の恩恵を荷ひ、茲に亞細亞の權利を叫び、亞細亞モンロー主義の下に亞細亞の全民族は合一すべきものと信ずる。即ち、日支は固より言はず、更に安南も暹羅も、緬甸も、印度も、阿富汗も、波斯も、土耳其も、アラビヤも、鞏鞏も、西藏も、蒙古も、西比利亞も、皆な同一旗幟の下に馳せ参じて洩れぬやうに爲すべく従来の、日支、日印の親善の如きは、皆、此の大方針の鑄型の中に混一鎔化され終

る可きものである。

併し、我輩は、之れを以て、必ずしも無窮に傳へんとは云はぬ。若し、米國にして、モンロー主義を撤廢し、兼ねて國際聯盟が人種の平等待遇を認むるの日に於ては、吾人は他國の勸説をまつまでも無く、自ら進んで、此くの如き亞細亞モンロー主義による亞細亞人の團結を解散するに吝かなるもので無い。何んとなれば、吾人は、人爲的平等よりも、神の自然の愛の平等に歸することを深く喜ぶ所のものだからである。

二、英の三C政策と米の三A政策

資本經濟戰爭來る

最早や、軍事的の戰爭は終結したらしく、事實よりすれば、世界の各處に、猶ほ、現に、事態の紛糾を見つゝある次第であるが、是等は、打ち寄せた大海嘯の跡の餘波

いらるに過ぎぬもので、大勢は滔々として平和に歸しつゝある。國際聯盟も、米國に於ては國論の一致を缺き、兎や斯くとイキサツは有るが、結局は安定の地を得て、國際聯盟の無事成立を見るに至るに相違ない。けれども、其の怖るべきは過去の軍事的戦争では無くして、是れより來るべき資本的經濟的の戦争である。いよ／＼平和に世界の大葛籐が終局したとすると、今度は必ず此の平和の戦争が旺盛になるべく、而も、其の白熱的猛烈さは、遙かに軍事的戦争を凌駕するものであると信ずる。

英の宿望の三C政策

今回の大戦の結果として、世界の運命を決する底の威力十分なる二大經綸が現はれた。其の一は英國の三C政策で、他の一は米の三A政策である。大戦前には、英國の大陸政策に反抗して、横さまに印度の中腹を威嚇するに足る獨逸の三B政策なるものが有つた。即ち、伯林からベルグラードに出で、更らに其れをチグリス河畔のバグダットに連接する鐵道政策が其れであつたが、カイゼルの一蹶と共に其の帝國は滅亡し

て、國削られ兵弱められ、雄圖跡なく、空しく一場の夢物語となり終つた。而して、英國は、其の常に睥裏の梁として睨んで居た獨逸の覆滅と共に、多年の宿望なる南亞と埃及とを、其の新たに得た東亞の委任附託領地によりて聯絡し、脊髓神經が茲に初めて南北兩亞弗利加を貫通し得たので、英國が強固なる一大帝國を世界に建設するには、既に、殆んど、併呑し得る限りを併呑し盡くした程に龍大を極めたる大國のこゝとて、此上、地域を擴張せんよりは、一先づ既得の諸殖民地と母國との聯絡を完全にし、堅實にするを以て優れりとした其の政策成就の時機が至つたのである。之れを英の三C政策の成就と稱する。即ち、埃及のカイロ府と、南阿のケープタウンと、印度のカルカッタとの聯絡を企圖した其れを稱するもので、遂ひに之れを成就し得たのである。

既に、宿望を果して、全身に血液が流通し、神經の敏活を加へた今後の英國は更に、如何なる經濟的活動を東洋の市場に試みんとするであらうか。無論、其の聯絡が完全なる自國の領土を以てするもので無く、其間に委任統治の領土を交ゆるとは云ふけれ

ども、其の委任統治たるや、日本の南洋諸島に於ける委任統治の、宛も風船球を握り占めた如く、ブヨ／＼したものと違つて、中味が充實し切つて握り力がある。其の握り力の強さに於て違ふ。勿論、委任統治であるから、其處に軍事的設備を施すを得ぬけれども、其の東亞一帶の委任統治領域を取り圍む前後の地域は、皆な完全なる自國の領域であるから、有事の日に緩急相應することは容易である。日本が渺々たる滄海の彼方、而も、其の附近に、何等自國領の屬島なき處に、其處にマーシャル、カロラインの諸群島が粟散して居るのとは、てんで比較にならぬ。亞弗利加に於ける其の勢力の遂ひに南北を貫通し得たること此くの如きみに止まらず、更に、此度の大戰によつて、英國は亞細亞の方面に、土耳其、メソポタミヤ、亞刺比亞、波斯等に委任統治權を得、若しくは勢圏を擴張して、遂ひに之れを印度と聯絡せしめたので、地圖を按じて大勢を所觀するも、以て其の如何に封豕長蛇の怖るべき一大勢力を世界に振ふに至つたかを知ることが出来る。今や此の方面に於ては、明らかに英國の大陸政策即ち、三C政策が、獨逸の汎ジャーマン主義の三B政策に取つて代つたものである。

米も亦三A政策

東半球に於て、英國が、此くの如く、大更に大を加へ、非常の勢力を示し來れるに對し、西半球の新國北米合衆國が、是れも亦た此度の戦後の結果、大更に大を加へ、其の傳統的國策たりしモンロー主義に閉ち籠る如きことをなさず。モンロー主義の、標榜は唯だ他國の勢力の自己の勝手に定めたる繩張内に覬覦し來るを防いだ丈けのこととて、自國の方からは自由に西方に向つて鵬翼を張らうとしつゝある。即ち、其の西北端のアラスカからベーリング海境を超えて、カムチャツカ半島に出で、それより西ベリアを縦貫して歐羅巴に抜け出づる道を開かんとして居る。是れ謂ゆる米の三A政策、即ち、亞米利加アラスカ、亞細亞を連結せんと欲する一大政略であつて、近頃、其のカムチャツカ半島租借の噂の傳はることも必ずしも、全部、根抵なきことにもないやうに思はれる。

彼の大正七年の春、過激派の政府が露國に勢力を得て、各國の露國在留の使臣が皆

な本國に引き揚げた際にも、獨り米國の使臣のみが、決然として踏み止つたといふことも、此の三A政策の胸算を以て想察しみれば明瞭に其の消息が知れる。我輩は、當時、逸早くも、米の鐵道隊三百人が、長崎に來りて、竊に何等か西比利亞方面の風雲の變態を窺ひつゝあることを社會に警告したが、當時、當路者は皆な我輩の所説に餘り多く耳を藉さなかつたけれども、事實は如何であるか、我輩の觀察通りに其の四月頃、彼等は盡く西比利亞に渡航し、鐵道を占領して居つたものは此の鐵道隊の手ではなかつたか。歐羅巴に送る筈の鐵道隊をば轉じて、我が長崎に送つたと云ふが如き、是れ皆な其の懷抱せる一大政策、即ち、三A政策の現れと知るべきである。

此くの如く、彼等は、沈黙の間に、着々として其の雄圖を事實に現しつゝあるのである。虎視眈々、頻りに東洋に決着しつゝあつた獨逸の三B政策は挫折しをばり、對岸支那大陸の山東の一角に足場を作り、我國を脅威しつゝあつた其の勢力は幸ひにも此度の大戰によつて一掃されをはつたが、一難去つて一難來るは此世の常である、今や獨逸は衰へても、之れに代る英の三C政策と米の三A政策とが現れて來た。此の

兩政策は皆な共に今後の經濟戰爭の爲めに準備するものである。然らば、此の世界の二大勢力なる英米の間に介在し居る吾人日本人は、當に如何やうになすべきであるか、實に、吾人は、至大の覺悟を要する。今日、東西兩半球に跨る兩アングロサクソン民族は、孜孜として經濟戰の準備に是れ日も足らざる時に當つて、獨り吾人のみ安閑として無爲に濟まさるやうか。此くの如くんば日本民族の活路を、將來、抑も何れの地に求めんとするか、吾人の生活の保證を如何にして堅確ならしむるを得るか、深く我が一般國民の覺悟を要求する。

三、ワシントン系米人の爲に謀る

雜駁なる米國の民族

米國人が純一無雜の民族でなく、アメリカ、インヂアンとかニグロとか云ふ有色人種は固より言はず、同じ白色人種であつても、拉典系の佛蘭西人、伊太利人、チ

エートン系の獨逸人、埃太利人、扱ては、丁抹人、瑞典人、那威人、スラヴニツク系の露西亞人と、其他、匈牙利人も居れば、猶太人も居る。芬蘭人も居る。ケルチツク種の愛蘭人も居るといふ風に、極めて雑駁である如く、其の道德觀念なども、彼等の誇る如く、正義人道を以て終始するやうな高いレベルに一致して立つて居るものではない。勿論、其昔、一種の純淨なる理想を抱いて遂に英本國を離れ來つた彼等の祖先は、極めて高い道德觀念を持つて居たであらう。而して、ジョージワシントン、は、慥に其れを代表した立派な人物であつたらう。南北戦争の大立物となつた彼のアブラハム、リンコルンも亦たさうであつたらう。併し乍ら、さればとて、米國の傳統的政策が、皆、悉く正義人道に立脚した正純なものとのみ斷することは出来ぬ。爾く斷するは甚だ事實を無視した御心好しの沙汰である。初め、十三州を以て獨立した亞米利加合衆國が、今日四十八州の多きに至つた歴史は、何を證するか、其れが、悉く正義人道の命する所であつたか、第一に南方フロリダを如何にして西班牙より收めしか、テキサス、ニウメキシコ、北カリフォルニア等の諸州を如何にして墨士哥よ

り奪ひしかを知らば明白である。

ペルリが日本に逼つて國を開かせたことに就いて、今ま尙ほ日本人はペルリを我が開國の恩人と仰ぐけれども、其れは單に結果から見た立論に止まり、翻つてペルリ廻航の動機を窺へば何うであつたか、彼れは明かに時の大統領フィルモアの命を帯び日本征服の秘略を抱いて來たので、先づ我が琉球及び小笠原諸島中の一島父島に據り、永久に之れを占領せんと謀つたことは、彼れが幾度も時の國務卿エベレットに往復した書信に依つて明白でないか。幸ひに彼れが砲火に訴へて我が諸港灣を開かしめなかつた唯一の理由は、フィルモア大統領が位を去つて、之れに代つたピアース大統領が穩健な平和な手段を取るべく訓令し變へたからに過ぎぬ。夫れ然り、米人、決して、正義人道の結晶體では無い。勿論、多數の米人中には、道德的にワシントンの傳統を引く正義人道の國民がある。けれども、それと同時に、道德的に區分するならば、更に軍國主義的の獨逸系統に屬するものもある。我利一偏の猶太系統に屬するものもある事をも併せて知らねばならぬ。

頭隠して尻隠さず

純ワシントン系の米人は、今日、多数の米國人が、正義人道の名に隠れて、内實、唯利主義に結晶し、不正義非人道的行爲を恣にするに就いて慳慳し憂慮しつつ、あることは吾人も觀取するに憚らぬものだが、それにも拘らず、獨逸系統、猶太系統の米人が澤山にあつて、政治界と云はず、實業界と云はず、凡る方面に蔓延し、跋扈し、吾人をして、往々、愚なる米國と叫ばしめる如き言動をする。

それは、米國は、本來、基督教國であると稱しながら、其の近來爲す所は、少しも基督の教を守つて神の愛に従はず、正義人道を愛すると稱しながら、少しも正義人道を守らず其の言動する所が多く光榮ある過去の歴史と名譽とを裏切るものであるからである。基督の教旨は、人類相互の生活を安樂ならしめんと欲する謂ゆる博愛主義であつて、其の人類と云ふが中には、差別的に見た白人も黄人も黒人も無いのである。然るに。今日の多数米國人は、極めて利己的であつて、自己の飽暖を計る爲めには何

等他人の迷惑をも迷惑をも顧みぬのである。蓋し、彼等は神の愛と同時に自由を叫ぶ、然らば、彼等は敢て此くの如きを以て自由なりと考へるものであらうか。然らば、彼等は其の如き自由を以て神の愛と如何に調和せんとするか。

眞理の吾人に教ふるところを以て見れば、此くの如きは我儘であつて、自由では無い。自由を尊ぶといふことは、自己の自由を尊ぶと同時に、他人の自由をも亦た尊ぶなくてはならぬ。個人の絶對の自由と絶對の自由との間には必ず撞着衝突を來し、其處に強弱の力比べが行はれて、其の結果、弱者の自由が奪はれるかせなければ是にならぬ。されば、斯かる自由の欲求は、常に鬭争を豫想し、従つて、眞の心境の平靜を得る自由を獲得することは出来ぬ、眞の自由の獲得は其故に自由を尊重すると同時に、他人の自由をも併せて尊重し正義に照らして其の兩者の自由の間に相守つて相侵すべからざる限界を劃定した後にある。是れ丈の注意を拂はぬやうな自由は、其實、自由にあらずして一個の我儘であり、従つて神の愛とは兩立出来ぬが、是れに反して、眞の自由は、神の愛と調和する。否、神の愛に依つてのみ眞の自由は獲得され得るの

である。

然るに、米國は、之れを知らざるか、知つて之れを爲さざるか、其の何れなるにせよ、彼等が尙ほ基督教徒を以て自ら居り、自ら高うする態は、謂ゆる下世話にいふ「頭隠して尻隠さず」であつて、幼童がいろは加留多の繪に對し哄笑を禁せざるが如く、吾人も亦た米國人を見て、一笑を禁せざる次第である。其の證據には彼等の排日運動を見よ。

神と基督に背いて走る

彼等の排日運動の根本動機には、人種的僻見や利己的慾望が主となつて働いて居つて、而して、其の外面を粉飾すべく、何等かの理由を尋ね廻つて居るのである。其故に、最初には、日本人の文明が低く、風俗の賤しむべきことを以て排斥の聲を擧げたが、日本の國力日に月に加はり、其の文明の程度も先進諸國に遜色なきことが世界的に承認されて、遂ひに一等國の班に列するに至るや、最早や依然たる同一理由を繰り

返すことの不可能を悟つたものと見え、今日の彼等は、何時しか其の排日の理由を改めて來て居る。其の一例は、加州知事や加州大學總長の語るところに由つて徴すべく、即ち、彼等は皆な日本人が勤勉で貯蓄心に富み、經濟的に大なる力量を持つて居るところに恐れを抱き、此くの如くして己ますんば、ロッキー以西は、早晚、日本國民の殖民地に化せんとすと云ふやうに説いて居るのである。是れを以ても、彼等の眼が、事實を見るに忠であつて、彼等の心が神の愛によつて動くものと斷ずる如きは、甚だ誤れるものである。彼等の今日は、實に、神や基督に背いて走りつゝあるものである。若し、彼等にして、尙ほ強辯し、神や基督に背きつゝあらずと云ふならば、然らば、是れは、神や基督を解する丈けのコンモンセンスをだに喪失し終つたものとせなければならぬ。

彼等は、獨り、其の本國に於て、排日運動に熱中し居るのみならず、支那、朝鮮、及び、西比利亞までも其の煽動の手を擴げて、一向、排日の氣勢を高めんと勉めつゝあり。是れが爲めに蒙れる我國の迷惑は、如何程なるかを知らぬ。昨今の日本の不景

氣は、勿論、大戦後の世界的影響を被るものであるが、而も、其の一部分には日本の工業の不振の原因を其の米人の排日宣傳に歸することが出来る。就中、日貨の最大市場たる支那、即ち、年額三四億萬の輸出を見る支那に於て、今日、其れが十分に捌ける所以も彼等の排日の努力によることが多分に居る。此の如きは、實に、吾人、大和民族に對して、其の生命を繋ぐ日々の麵麩を奪はんとする努力である。此くの如き努力を、果して、基督の博愛主義が認容し得るとなすか。

大和民族の遺傳性を知れ

彼等米人の近事の驕慢心は、愈よ神や基督を離るゝこと遠く其の多數は、敢て日本との開戦を主張するにさへ至つて居る。彼等は、斯くも容易に戦ひを欲し、戦ひを語り、戦ひを行ふことを以て、其れが神の御旨に叶ふことと思ふか、此世を救はんとて十字架上に聖なる犠牲を止めたといふ基督の心に叶ふと思ふか。而も、其の戦ひが義戦ならば未だしもであるが、其の戦ひの動機に、人種的僻見や利己的欲望を包む不正

不義のものなるに於て、神の庇護が其の星條旗の上に降ると想ふか。是れ、吾人の彼等が愚を嘲らざるを得ざる最大の理由である。大和民族は常に名を選んで戦ふ。戦ひを決して避くるものではないが、苟くも其名正しからざる限りは、如何なる場合にも劍を抜かざらんとするものである。然り、容易に戦ひを欲せざる代りに、一たび劍を抜かば、決して、血を見ねば之れを鞘に收めざる民族である。彼等にして、鞘に手を掛けること無く飽くまで自重して、只管、理義を文書口舌の上に闡明し居る、斯かる平和なる善良なる國民に對つて、或は其の真相を見誤り、之れを卑怯視し、ますく嵩になつて威壓を加へ、其極、遂ひに彼れより劍を抜くに至らんか、其間、髪を入れざる瞬間に、吾人の寶刀の鞘は拂はれ、水も溜らぬ日本刀の明光は四射するのである。來れ、戦はん。吾人は、何時にても、挑む敵には相手と爲るを辭せぬ。日本が、何程貧乏にせよ、諸種の設備が不完全にせよ、一度び戦はゞ米國の如き敢て意とするに足らぬ。其の意とするに足らざる理由は、茲に縷述すべき限りで無い。唯だ、一言、彼等米人に告ぐべきことは、國と國とが相戦ふに當つて、其の勝敗の決が唯だ其國の大

小、人口の多寡、従つて兵力の多寡、若しくは艦數の多少富の多少と云ふが如き、物質的計算によつてのみ豫め明確なるものならば、決して、初めより相戦ふものも無かるべく、又た有史以來の歴史にも、小國が大國を亡し、弱國が強國を覆すが如きことは無かるべき筈である。然るに、其れがある。否、其れが常に然るの有様なる點に於て反省せよと云ふの一事である。

大和民族の特長は、其の義に勇むにある。即ち、今日の米國の如く、大不義、大非道を以て、我國を威壓し、遂ひに劍を抜くが如き者に對しては、成敗利鈍を眼中に措かず、猛然蹶起、精限り根限りの反抗をさするのが其の三千年來養はれ來つた強烈なる吾人の遺傳性である。吾人は、米國の挑戦に對し、此の遺傳性を以て正當防衛の道に出づることを敢て辭せぬ。米人は、自ら、ワシントン、リンコン等に因つて築かれたる歴史的名譽の地盤を崩壊し、神と基督とに背き、而して斯かる遺傳性ある我が平和の大和民族を脅威し、其の激怒に觸れんとするか。是れ吾人の飽くまで米人の愚を嗤笑せざらんとするも得ざる所以である。恐らくは、此くの如きは、決して、ワシ

ントン系純米國人の思想ではなく、偏へに、猶太系、獨逸系米國人の思想であらう。然らば、米國人が、自ら、米國を救はんとするならば、先づ、日本と戦ふに先だち其の自國內の道徳的異人種、即ち、獨逸系、猶太系の米國人と戦はねばなるまい。然らずんば、米國の眞の統一を見難く、従つて純一無雜なる米國の國民性なるものを陶鑄し出すことが出來ざるものである。而して、此の米國內部の道徳戦が行はれ、ワシントン系純米國人の精神的凱歌が奏せられて、完全なる統一が行はれたならば、茲に日本との戦ひの必要は、忽ち、春宵一刻の夢の如くに淡く消え去る可きである。

四、ポリシエビズムを防ぐの道

信玄流の城郭の固め

武田信玄は「人は城、人は石垣、人は濠、情は味方、仇は敵なり」と歌ひ、其の傾する甲州には城を持たなかつた。即ち、之れを、今日の語を以て言ひ表はせば、民本

主義で、彼れは此の民本主義によつて人心を統一し、其の人心統一の力を以て、城となし、石垣となし、濠となし、凡ての外敵に當つたのである。彼れは石垣の厚きを以て守りが堅くは無い、濠の深きを以て守りが堅くは無い。根本は人で、其人が仇を思はず、情を以て繋かれ、ば、其の守りが初めて堅いと見たので、此の狙ひは能く治國の要道を得て過たぬ、是れが抑も彼れが兵を信州に出して河中島に謙信と健闘した華やかな歴史を有するのみならず、時恰も永祿元龜の亂世に屬し、四隣に強敵を控へて居たるに拘らず、勇名を其間に馳せて後世までも英名を喧傳させるに至つた譯である。彼の有名の話になつて居る北條氏康が、人をして兵書を講せしめた時に、其の開卷第一に主將の要は勉めて英雄の心を攬るにありとあるを聽いて、最早や宜しい、我等は其意を得たりと稱して講義を止めさせたといふが、豈に獨り英雄の心とのみ言はう其の民衆合體の心を攬ることが、實に六韜三略の虎の巻であつて、孫吳、其他、如何なる兵書を繕いても、皆な人心統一の必要なるところに根柢を据えて居る。されば、活眼を此處に開いたものは、決して、守りを唯物質的の石垣、濠といふが如きものに

恃まない。例へば、彼の西陲に久しく雄を稱した島津家の如きも亦た信玄流であつた即ち、肥筑を過ぎて、足、一たび薩摩の國境の山脈を超えんか、一路坦々、其間に何等の城と見るべき防禦が無い。換言すれば、薩摩には即ち金城湯池は無い。併し乍ら其處に、自ら、人は城、人は石垣、人は濠の精神が潜在するので、島津家は其の統一された民心を以て金城湯池と恃んで居る。是れが、抑も邊隅に割據し乍ら、而も能く威を中原に及ぼして、徳川氏に畏憚され、裕然として一方の重鎮を爲した所以である。此の要領こそ、我輩は、吾人、大和民族が、凡ての現代の惡潮流に對抗して、大和島根を搖ぎなく防禦しゆき得る最も肝要なる根本の力と信するものである。

レーニン主義の大謬

人類は、社會的動物なりといふが如く、吾人は共同生活を樂むところの者である。既に、共同生活といへば其の絶對利己的なるを許すべきで無く、さればとて絶對利他といふことも亦た事實に於て人情の自然に背き、従つて行はるべきことで無いが、自

已を思ふが如く他人をも思ひ、利害相依り、緩急相救ふ、即ち、自利々他、覺行圓滿の精神を以て世に處して行かなければならぬ。既に此くの如くである以上は、到底、少數者の専横、少數者の驕傲などいふことの許さるべき道理はなく、自ら今日の謂ゆるデモクラシー、即ち、民本主義で行かねばならぬ。民本主義に立脚するに非んば決して、理想通りに人を以て、城となし、石垣と爲し、濠とすることは出来ぬ。何んの幸ぞ、吾人、日本民族は、之れをば、此くの如き冷かなる理智の解剖刀によつて、刻み疊み上げて、初めて理解した譯でなく、實に三千有餘年の長歲月の間に、歴史的に傳統的に感情的に、斯かる思想を抱懷し來つて殆んど吾人の血肉と化せしめて居るので一朝一夕に、偶然、入り來る外來の思想ぐらゐで、是れを突き崩すとは出来ぬ。されば、今、如何に厭ふべき露國のレーニン主義の如きものが宣傳を試み、精神的に襲來しようとも、斯かる正確なる思想の根柢の上に融合し、統一され居る我が國民に於ては、何等の怖るべきところは無い。

何が故に、レーニン主義を以て最も厭ふべしと云ふか、それはレーニン主義は、吾人

人類の根本性質に背反し、非社會的精神の誤れる思想を抱懷するからである。彼等は之れを然らすと云ふでもあらう。併し乍ら、彼等が、如何に口に現はして何んと言はうとも、冷靜なる第三者の批評眼を以てすれば、其の根本に於て、餘りに利己本位に立脚し、互讓の精神を喪失し盡くせる者たるの一事は争はれぬ。彼の沙翁の物せる人肉質入れ裁判の劇本は吾人に何を教へんとて書かれたか、彼の殘忍にして執拗なるシヤイロツクは憐れなる債務者アントニオの爲めに一滴の涙なく、飽くまで證文の表を翳して、是非共、約束だけの人肉を切り取らんといふ。如何に判官が和解を勧めても承知せぬ。そこで、據るなく、然らば證文の表に依つて汝に約束だけの肉を債務者より切り取るを許すと云はれた時には、シヤイロツクは、歡天喜地、扱てこそ聞きしに違はぬ名判官さまと叫びながら、やがて用意の刀を逆手に執つたが、其の時遅く此時速し、判官のボルチアは、待つた、暫く、汝に約束の肉一磅を切り取ることは許したが、其の過不及は勿論、一滴の血たりとも滴すことは相成らぬぞ、何んとなれば、血は證文の表に記して無いからと云つた。それには、流石の冷血動物シヤイロツクの手

も戦ぎ、驚倒したといふことにしてあるが、即ち、是れは猶太の權利づくめの正義の、到底、此世に行はるべくも無く、此世は基督の教への愛が根本でなければならぬことを教へたものである。如何にも此の教訓の通りで無ければならぬ。併し乍ら、歐米人は歴史的性癖か、遺傳的痼疾か、兎角基督教の愛の精神よりも、依然として猶太人の正義の精神が先きに立ち、何事も平等と毫厘の末をも猶ほ是れに依つて均分せんと欲する。而して、其の基くところを尋ねるに、絶対個人本位である。其處で、計算が面倒になり、其の極は、相争はざるを得ぬ。數字には除し切れぬ數字がある。例へば、三の一を除し、七の一を除するが如き、皆、其の類であるが、彼等の正義の觀念は、此の到底、除し得ざる物をまで何んとかして除き盡くす道もがなと執着する如き氣質のものである。

此故に、今日、勞資問題を解決せんとするに於ても、到底、圓滿なる解決を見難からんとする狀勢に居る。而して、其の最も極端にして最も亂暴なる、且つ、猶太流の正義の觀念にも嵌らざる、其れよりも劣等なる思想の根據に立つ者が、彼のレーニン

主義である。是れ、吾人の露國のポリシエビキヤを捉へて、最も厭ふべしと稱する所以である。此くの如き思想に一たび感染することあらんか、忽ち國民としての吾人の統一を破壊し終るものである。併し乍ら、能く思へば、吾人の歴史的、傳統的精神と矛盾し、背反する度の大なる丈け、それ丈け吾人には感染の憂ひの極めて少いものであることを信ずる。

過激思想はスペイン風の如し

今回、米國では、此のポリシエビキヤの一派の徒、數千人を英艦を以て國外に放逐するなど、騒いで居るが、米國としては左様の英斷を用ひねばならぬほどに、其の民心の統一に不完全のところがあり、ポリシエビズムに乗せられる丈けの缺陷があるに相違なく、それは、其の英斷そのものが自ら之れを物語つて餘りあるものだが、之れに反して、我が日本帝國に左様な必要は毛頭無い。恰も健全なる體力の持主には如何なる微菌も之れに乗する餘地が無い爲めに、いくらスペイン風が流行しても何等怖る

ところが無いやうなものである。

左様な外來思想の誘惑が耳朶に觸れた時には、吾人は唯だ三千年來鍛へて來た大日本民族の一種の神秘的な精神を、各自の心に反省し反求して、之れを愛護し發展させる丈で宜しい。而も、此の精神は博愛的のものである。吾人が、此の博愛的大慈悲の眼を以て、徐ろに今の世界の現況を見たなら何うであらう。彼の極端なる露國のポリシエビキーならずとも、曰く、サンチカリズム、曰く、ナシヨナルソーシアリズム曰く、ギルドソーシアリズムとか唱へて、紛然、雜然、いや勞働が何うの、資本が何うの、生産が何うの、分配が何うのと相争つて已まぬが、之れを正義人道の上から云ふも、文明の進歩の上から云ふも、共に甚だ憂ふべし、孰れも皆な自ら破壊の道に向つて進みつゝある有様である。之れに對して、我輩は實に、憐愍の情に堪えぬ。されば、我輩は敢て七千萬の吾人日本民族が、單に統一を以て自ら固くし、外來的世界の惡思潮を防止するに止まらず、彼等、全世界の人類を救済するの一大仁心と一大勇氣とを發して、此の大和島根より世界を人道的に指導する新文明の曙光を開かんと欲

する。而して勉むるに於ては、此の端緒を得ることは必ずしも難事でないと思ふ。

此の意味を以て考ふれば、西比利亞出兵も、甚だ重大なる意義あることだが、併し乍ら、西比利亞出兵は西比利亞出兵である。單に、それだけを以て、吾人が満足しては不可ぬ。ポリシエビズムは猶ほスペイン風の空氣傳染であると同じく、上下左右、何處からでも襲來するので、到底、一軍隊の威力を以て完全に防禦し切れるものではない。それ故、若しも西比利亞出兵だけを以て、此の不健全極まるポリシエビズムの思想が、完全に防ぎ得るなど云ふ考へを抱くものが有るならば、それこそ大なる誤りである。左様な淺はかな考へではいかぬ。然らば、之れを如何にすべきかと云ふに思想は須らく思想を以て防ぐべし。即ち、ポリシエビズムを防ぐの道は、我が一般國民が、人生觀の眞義の何處にありやを明察諦視して、我國の歴史的傳統的精神に思ひ及ぶが捷徑である。されば、必ず、それが宇内の萬邦に卓越せる所以の理を體得し、毅然として迷はざるに至るであらう。吾人をして能く此くの如きを得ば、我が大日本帝國の統一は永遠に保たれ、其の隆運は月日と共に彌榮えに榮え行くべきである。而

して、それと同時に、吾人は更に外に向つて全人類救済の一大本願を振起すべきである。我輩は、此の大本願の上に、人を城とし石垣とし濠として進まば、吾人日本民族が全世界を改造する新文明の先驅者となるべき使命の成就に於て、強き信念を有する。兎に角、斯かる崇高なる偉大なる思想を飽くまで、吾人日本民族が抱懐して進まなければならぬと信ずる。吾人の使命は重大である。

五、秩序破壊の因

現代文明は進歩か退歩か

佛蘭西のコムトは、人類の歴史的發展の順序を三階段に分ち、宗教時代、哲學時代、實證時代と説いて居り、宇宙間の諸現象をば、初めは神秘的に、次ぎには抽象的に最後には實證的、即ち、科學的に説明するに至つたと主張したのであつたが、其れに依つて、矢張社會進化の順序も、無自覺時代から個人本位時代、社會本位時代に進む。

而して、最後の社會本位時代に至つて、初めて、眞の文明が出来ること云つて居る。然らば、文明發展の極致は、是非、社會本位時代でなければならぬ譯だが、之れを今日の實際に徴するに、歐洲諸國は絶對の個人本位主義に走りて、幾多の葛藤を惹起し、就中、露國、獨國といふが如きところは、騒亂をさへ現出しつゝあるのである。此くの如きは、是れコムトの學説を逆に行きつゝあるものか、左もなくんば、其の文明は進歩せりと稱するも、其實未だ眞の文明を現出するに至らざるものか。兩者其一に居らなければならぬと信ずる。

國初よりの社會本位主義

人文進化の順序は、或ひはコムトの學説の如くに、我が日本の歴史的發展に就いても解釋することが出来るであらう。併し乍ら其の社會道德の進歩の順序に就いては、コムトの學説は、西洋の歴史を土臺にしたものであるから左うするので、我が東洋の日本の歴史を考へると、必ずしも當て嵌らぬ。何んとなれば、我が日本は、國を肇む

る最初から、其の道德は、全然、社會本位的で、我が皇室は、是れを以て其の政治道徳の骨髓となし給ふたのであつた。即ち、日本の建國の初めを以て、之れを、宗教時代、神祕時代と説き得るでもあらうが、然ればとて、全然、無自覺時代であるとも、更に、其れの次ぎと考へられた、自己本位時代であるとも見ることは出来ぬ。全然、社會本位時代であつたのである。

其の證據には、皇祖天照大神が、三種神器を皇孫瓊々杵尊に授け給ふた時に、『豊葦原瑞穂國は、我が子孫の世々君たるべき地なり、汝皇孫、往きて治めよ』の御一語に明かなるが如く、往きて萬民の爲めに其の統治を圖れ、彼等の爲めに其の安全幸福を求めよとの御召が拜察されるので、何等、自己本位的動機の仄見ゆるなく、全然、社會本位的動機の示現である。之れを今日の用語を以て換言すれば、我が皇室は初めより民本主義的であつたのである。而して、此の民本主義が、遂ひに能く此の三千年間少しの動搖なくして今日に至つた所以である。

唯だ、夫れ、皇室の下に立つて、大政を輔弼し奉る臣下には、往々にして、社會本

位主義を取り失ひ、絶對の自己本位に陥つたものがあつた。即ち、蘇我氏、藤原氏、源平二氏、北條氏、足利氏、最後の徳川氏の如き、皆自然らざるは無く、其の大政輔弼の重任に當る初めに於てのみは、皇室の大御心を體して、忠實に社會本位主義を遵奉して居るやうでも、時久しく權勢に忤れると、其れが人心の弱點か、次第次第に自己本位的に流れて、遂ひに自ら矯正するの力を失つて来る。是に於て、皇室と國民とが常に立つて、此等傳統的、精神を取り失へる中間の輔弼の臣を取り變へたものであつた。之れを譬ふれば、我が皇室は、猶ほ富嶽の東海に屹立するが如く、他の權臣の跋扈は宛も其れを繞る妖雲の如きものである。妖雲、如何に之れを掩ひ盡くすも、富嶽の存在は、是れが爲めに一毫も増損されること無く、一旦、豁然として、妖雲の消え去る時があれば、又も玲瓏八朶の面目を、さながらに露示し來るのである。

利己本位主義の露骨に行はれる時には、必ず戰亂を伴ふ。西洋の歴史は、即ち、此の歴史の連續とも云つて宜しい程だが、我國とても、一時、皇室の權威の振はなかつた時代には、時として國民に利己本位主義が行はれ、搏噬已むなき野獸に近き生活を

送つたことがあつた。即ち、足利末季の戦國時代の如きが之れを證する。而して、之れに對して、撥亂反正の功を奏したものは、誰れも知る徳川氏で、其れを以て二百五十年の泰平の治を致したが、併し乍ら、是れは眞の社會本位主義の上に寄生した社會本位主義とでも云つて可なるくらゐのものに過ぎなかつたが故に、自覺せる國民は、遂ひに泰西文明沓至の外壓を機として一齊に奮起し、之れを顛覆して復び皇室の社會本位主義の大政に返したのである。

板挟みに苦しむ中流階級

爾來、僅かに六十有餘年、然るに、何事ぞ、近來、又も我が國民には、此の尊むべき社會本位的自覺の光輝が次第に消失し、個人本位主義が之れに代らんとしつゝあるとは。此くの如きは一つは、夙に禍因を醸成し來りつゝあつた歐米の勞働運動が、此度の歐洲大戰の終熄を機として競ひ起り、其の思潮が我國にまで波及し來つて、我が國民思想を動搖せしめた點もあるけれども、一方には無思慮なる貴族とか、閥族的

政治家とか、若しくは、富豪、成金と呼ばれる徒輩が、餘りに傍若無人の專權を恣にし、豪奢に走り、虚榮に耽る。其れが民心を激發して、其の反抗心を長じ、其の破壊運動を導くが爲めでなからうか。之れを思へば、今日の物騒がしき時運を招來したのは、一は權力階級、資本階級の自己本位主義に胚胎するが、さればとて、之れに對する今日の謂ゆる勞働運動の有様を察するに、其處には勞働者の極端なる自己本位主義が現れて居る。國家の健全分子たる中流階級、即ち、一般、知識階級は、此の上下兩階級の中間に板挟みになつて、上下兩方面よりの壓迫に堪へ兼ね、今や生活難に苦んで、極めて不安を感じつゝある。而して、其極は、此の中流階級をも驅つて又た何人かの破壊運動に参加せしめんとする。此くの如くんば、如何にして國家の秩序を保ち國民の安寧幸福を期待するも得べけんや。

資本階級自衛の唯一良策

併し乍ら、我國の現状は、未だ歐米の如く甚しきに至らぬ。之れに處する對策を

今の間に講じて、早く秩序破壊の諸原因を除却するに勉めなくてはならぬ。此の如きことを、獨り謂ゆる政治家なる者の手に一任してはいけぬ。彼等は、各、黨派の私に引かれて、眞に着實中正の見地に立つを得ず、徒らに極端を株守して、辯難攻撃に日を送るの弊がある。それ故に之れを匡救するの道は、此際、全國民の自覺を進め、如何にするも此の國家の安寧、國民の幸福は、社會本位主義に非ざるべからざるを了知せしめ、名は社會主義と稱するも、其實、自己本位主義に立脚する極端なる破壊思想に擒はるゝこと無く、飽くまで相依り相扶けて、共に國運を發展し、共に生活を享樂するやうに努力せしめなくてはならぬ。斯かる思想を養ひ、同時に、此の思想に應ずる行動を取らしめなくてははいけぬ。即ち、貴族富豪等、即ち、資本階級なるもの、其富は決して獨自一己の力を以て生まれたもので無く、社會あつての富であり社會の餘惠によつて積み得た富であることを思はゞ、其富の一部を常に社會に還元し一般、庶民階級の生活を救ふの道に、彼等をして出でしめなくてはならぬ。而して、之れと同時に、一般、庶民階級も理義の命するところに従つて、穩健の見地に立ち、

勉めて此の資本階級と調和を保つるの道に出づべく、出づるが又た當然である。

然らずして、唯だ一種の政治的權力の如きものを藉りて、之れを高壓せんか、一時の功は或は期すべきも、其の反動の大浪は極めて心魂を寒うすべきものが有るに相違ない。即ち、暴を以て暴に易ふる労働者の謂ゆる暴民政治の現出に、一般國民は懊惱せなければならぬ時代を招來するであらう。是れ到底吾人の久しく忍び得ざるところのものである。それ故に、今日は上下兩階級の大なる反省自覺を要する。而して、之れを爲すは、今日の場合先づ上流階級より始めなくてはならぬ。即ち、國家としての社會政策そのものにのみ待つことゝせず、此の政策の主意に合體するやうに、凡ての社會事業に資本階級をして投資せしむると云ふことが必要である。是れは獨り一般國民の爲めとのみ言はぬ。實に階級打破運動の血祭たらんとする彼等をして、其の血祭なる奇禍より免れしむる唯一最良の方法なのである。

六、クロバトキン並に此種の思想

山川風土が人を生む

人は誰れでも自分の額を見ることは出来ぬ。其れと同じく、人が人自らを知ることの難い場合は甚だ多い。併し乍ら、鏡を以て自己の額を見得ると同じく、方法を以てすれば人が人自らを知ることとも出来る。宇宙間には、萬物に共通の原理が働くのだから、其れが人間以外の他の方面に如何やうに現はれて居るかを観察すれば、以て人間も亦た如何やうのものであるかを悟る可きである。そこで我輩が、第一に我が國人に注意したきことは、山川風土が人を生む、換言すれば、自然が人間の肉體並びに思想を生むといふことである。

昔から「處變れば品變る」とか「江南の橘、江を渡れば枳穀となる」といふ如く、同じ種でも土壤が變れば變性する。暖國の兎は、四時色が變らぬが、寒國の兎は雪

が降れば眞白くなる。黄河や揚子江には、信濃川や利根川に知られぬ大魚が住むといふやうな具合に、一切の動植物は皆な自然の大能に支配されて千態萬狀になる。されば、獨り、人間のみが、斯かる大能の支配を避けることが出来ようか。而も、其の避けることの出来ぬのは、獨り形體ばかりで無く、思想も亦た同様である。即ち、一家和合した圓滿なる家庭には自ら悠容迫らぬ温和な子女が出来、之れに反して、一家和合せずして圓滿ならぬ家庭には、何處となく拗ねくれた偏僻な感情に充ちた子女が出来、其の風體の如何が如何に其の國民の思想感情を千態萬狀に作り出すかを推想すべきである。繼母の入つた家は如何にしても繼母と繼子との間に冷冽なる感情が養はれて、互ひに敵視し行く如く、極端な専制主義に依り、壓迫の行はれる國家には、又た如何にしても深刻な、反抗的氣分が、其の國民の間に養はれて、上下相分れ、相敵視し行く。繼子は、兎角、廻り氣がして、兩親の揃つた家の子に比べると、有らざるがな處まで目が届き、年の割に二層倍も三層倍もませて見へるが、其れが羨しいとて、圓滿の家庭の小供までが、其の廻り氣を眞似、用も無い

ところへまで目を働かせて、其れで思想の發達を誇つて宜からうか。何人も、之れを左様だと答へるものは無いであらう。之れを然りとするならば、君民一致、平和な國體を持續して來て居る我が國民が、漫りに他の上下敵視平和の缺けた國體を持續して來た他國民の態度を喜び、其の思想感情を翻譯的に摸倣することの不可なることも多言せずして自ら明瞭であらう。

議論の出發點を誤る

目下、我國では、世界的思想の大動搖の際として、一般の學者思想家等の間に、兎角不純なる思想の研究が行はれつゝあるやうだが、是れは恰も繼母の居る家庭に現はれた繼子の思想に興味を持つて好奇的に研究しつゝあるやうなものでなからうか。我輩は、必ずしも研究そのものが悪いとは云はぬけれども、同じ研究をするならば、成るべく大切な時間を有用に使つて、純正なる思想の研究の方により多く力を用ひたが宜からうと思ふ。トルストイにしる、クロバトキンにしる、皆な彼の有名なる長い間の

專制君主國露西亞の所産である。露西亞に於て初めて生ずる、廢類的思想、破壊的思想、亡國的思想なのである。

成程、神の愛を根抵に説いて、罪の子たる吾人が同じ罪の子たる同胞を審判する權能なしと叫び、現在の國家組織を呪ひて極端なる無抵抗主義を宣傳したトルストイの如き思想は、理想としては美はしくもあるが、實際に於ては、實現の不可能なること云ふまでも無い。更にクロバトキンの如き思想は沙汰の限りで、之れをも理想としてのみ聽けば耳に快いかも知れぬが、彼れは敢て無政府的共產主義を叫ぶ。果して其の謂ふところの政府なくして、共產主義で此處に人類の共同生存が全うして行けると思ふか、彼れ及び彼れ一派の無政府主義者などは、皆な夢遊病者である。ユートピアンである。バクレーニンは正義、スチルネは完全なる自己、クロバトキンは更に相互扶助の感情といふやうな者を大前提として、それから、演繹し論理を以て自己の結論を導き出して居るのだが、併し乍ら、我輩を以て見れば、其の大前提が、即ち、既に、ユートピアンなのである。夢想病なのである。人心の同じからざる其面の如し、人間は

萬人萬様で其の智識も其の能力も其の徳性も參差高低、決して平等なるを得ない。然るに之れを平等なる者の如くに思ひ做し、若しくは又た終ひに平等たり得るもの、如くに豫想しなし、之れを根抵として自家立論の出發點を築き上げて居ることが大なる間違ひである。

ラスキンは、教育を以てエクラライザアでは無くしてデッサナーアだと喝破して居るが、我輩は飽くまで此語を眞理だと思ふ。即ち、此意を説明すれば、教育するものは、人を平等にするもので無くして、人を色別するものであるといふ。彼れは、即ち之れに由つて、教育は不平等に生まれた人間を平等にすることは、所詮、出来ぬものだが、其れは其れとして措いて、唯だ各自の持つて生まれた天賦の知識、能力、徳性を十分、其の發育すべき限度にまで發育させるものだといふ事を意味して居るのである。之れを眞實とすれば、如何しても、吾人、人間の不平等を教育に依つて平等にすることは出来ぬ仕事である。己に、人間の智識、能力、徳性が、不平等を免れぬとすれば、自然に其間に攘奪搏噬の禍なきを必し得やうぞ。裁判の必要も、刑獄の必要

も、警察の必要も、軍隊の必要も、乃至一切の國家的施設の必要も、皆な是れより生じて來るのである。毫釐千里を誤るといふ。彼等は、己に、毫釐の觀察の大謬を此の根本に於て敢てして居る。如何にして其の決論の純正を期待し得よう。此世は、一日も國家なく、政府なくして暮らせるもので無い。現在ばかりで無く、將來とても、永遠に同様である。之れを斷定が早きに失する、輕卒であると云ふものが有るならば、猶ほ其人は、人間が大木となり、太陽が三角になる日を豫想しても差支へないと云ふやうな無駄な思想的遊戯に耽る人と信せねばならぬ。

空想に描がれた世界

本來、クロバトキンの謂ゆるコンミュニオンとは何んであるか。彼れは國家といふことを厭ひて、特に斯ういふ語を使ふのか。如何に少數の集團なりとも、多數の者が集つて共同して一の生産に従ふとすれば、何うあつても、其處に、法律と稱せずとも、其の内容に於て、同性質なる或る種の申し合せ、即ち、規約が無ければならぬ。即ち

彼等も、怠惰なものば、其のコンミュニオンから追ひ出すといふので無いか。假令、其れが、法三章的の簡單な申合せでも、其の申合せが、多数の集團を規制して行く以上は、其れが、即ち、法律でなければならぬ。法律といふ事が厭だと云つても、其れと同性質のものであると云はなければならぬ。所詮は、用語の限定問題に歸するだけであつて、我輩を以て見れば、コンミュニオンも亦た國家の小なるものと見て差支へないと思ふ。而して、其れが當然であると思ふ。

好しや、一步を譲つて、彼等の謂ゆるコンミュニオンなる者と國家なるものと異なりといふを許すとすも、此世の共同生存を人類が全うし行くに於ては、其の幸福利便を計る上から、到底、左様な小集團なるコンミュニオンの力によりて、例へば、鐵道とか、郵便とか、電信、電話とか、運河、道路、橋梁とか言つたやうな、現在、各國家の手によつて經營され居る種類の大規模の事業を如何やうにするか、其の様な事業を爲さずとも構はぬと云ふか、すれば、彼等は、此世の文明の進歩といふことに冷癖なるもの、怠慢なるものと見做すのほか無く、到底、識者の與する能はざるところで

ある。好し、又た、此くの如き事業を爲すべく、各コンミュニオン間に何等かの契約を爲すといふか、すれば、此の契約によつて、従つて、其の遂行機關を有せなければならなくなる。つまり、組織を生じ、且つ其の組織が複雑になつて來なければならぬ。之れを、コンミュニオンの擴張が終ひに今の謂ゆる國家に復元すと云はざらんとするも得べきで無い。斯やうな不完全なる思想を眞面目に力説する彼れの心事を怪しく思ふ併し、怪しく思ふといふ丈であつて、それが一種のユートピアである。夢遊病の結果である。空想に描かれた小説的世界であるとして觀れば、何も危険と云ふべき者でもないが、しかも彼れが、此くの如き思想の實現を狂暴する手段によらんとする其派の運動をば、思想と實行とは繋ると稱して許容して居るところに非常なる危険性がある。我が國民にして賢明ならば、此點に於て、最も深く意を用ひなくてはなるまい。而して、其れには露西亞が如何にして、此くの如き思想を生み出したかに就いて、一層の考察を値する。

露國の土壤の所産のみ

毒を以て毒を制する場合がある。それゆゑに、醫者は病ひの性質に因つて患者に亞砒酸を用ひることもする。亞砒酸を要する病が現はれ、ば致し方がない。然るに亞砒酸を飲んで助つた病人があるからとて、之れを健康體のものが、一層健康を増さうとて飲んだら、今度は反對に死んで終ふ。之れを能く考へて見なければならぬ。露西亞の建國以來、最近に至るまでの政治は、實に、王公貴族と僧侶軍隊との跋扈跳梁、庶民階級を奴隸の如くに踏み躪つて來た壓制政治で、當然、亞砒酸を要求するやうになつて來た爲めに、そこで、トルストイとか、クロバトキンとかいふやうな極端なユーロビアンが飛び出すに至つたものである。決して中正純眞のものでは無いけれども、右に歪めるものを左に矯むる丈けの力あらしめんとする局面轉換の要具としては相應の意義あるものであらう。

トルストイが、一意、敬虔なる神の信者、有徳なる聖者であり、而して、伯爵の榮

位を有したものであつたことは何人も知るところで有るが、クロバトキンも亦た高貴なる公爵家に生まれて、アレキサンドル二世皇帝よりも露國正當の帝統に近い血を分けて居ると云はれ、召されて侍従ともなり、後コサツク騎兵の士官ともなれば、ザリナの知事ともなり、而して、有名なる科學の研究者で、地理學、地質學の造詣深く、其方の著述も多いのであるのだが、しかも、露國官憲の横暴日に月に甚しく、下民を凌虐して止まざるを見て、遂ひに奮然起つて、民衆の味方をするに至つた人である。遂ひに千八百七十二年瑞西に遊び、萬國民主社會黨大會に臨んで歸るや、捕はれて牢獄に繋がれたが、是れが彼れの心を極端に險惡になし、千八百七十六年に竊に脱獄して再び瑞西に走るや、明らかに無政府主義者の名乗を擧げ、爾來、益々矯激に走り、千八百八十三年の佛國リオンの暴動にも加はつて、佛國で六年の禁錮を受け、三年にして特赦を受けて倫敦に轉じ、爾來、隱見出沒、巧みに踪跡を暗ましたといふ始末、今では世界の指彈を受けて居る。悪く言はば諸國の食ひ詰め者と爲り終つたのだが、併し乍ら、彼れの末路と、其の末路の思想とは、甚だ忌むべき詰らぬものでは有るけ

れども、彼れをして此域に至らしめた者は、抑も誰れの罪であらう。

我輩は、考へて此に至れば、クロバトキン其者の思想には絶対の反對といふよりも寧ろ唾棄を欲するものとはいへ、彼れの此に至つた徑路には、一掬同情の涙なき能はざる者である。我輩は飽まで、是れを以て露西亞といふ悪い土壤の所産であると信する。彼れをして、若し、良好なる我が日本の土壤に育たしめたならば、忠實なる一地理學者、地質學者で終始したかも知れず、好しや實際政治の問題に没頭せしめたとしても、其の結論は、必ず現在とは異なる到着點に達したであらうと思ふ。即ち彼れは、上下反目疾視の露西亞の國體と、其の惡政に對して、亞砒酸の投薬を謀つたが、我國の如き民本主義と皇室中心主義とが一物の兩方面なる關係を有する、上下一和の團體に對しては、其の保健劑として亞砒酸以外の良薬を工夫し出すに努めたであらうと信する。

舶來思想に惑ふ勿れ

我輩は、我國に、彼の帝大の森戸問題の如きが起つたのであるから、勢ひクロバトキンに注意し、且つ露國のこのみを多く話すやうな事になつたが、我輩の其意は唯だ露國のみを問題にするもので無い。露國は今や過激派に政局を蹂躪されて、國內紛亂、國民塗炭の苦に陥つて居るが、更に獨逸にも、スバルタカスあれば、佛國にも、サンズカリズムあり、英國にも、米國にも、勞働運動は強烈を極め、就中、露國の過激派の宣傳が多數入り込んで居るので、共に其の驅逐に銳意して居るといふ現状である。

是れは、抑も、何人によるか、我輩は皆な我が帝國の國體と異なる國體を有し、帝國の歴史と異なる歴史を有し、従つて、帝國民の思想感情と異なる思想感情を有し、何處かに爲政者と國民との間に根本の諒解と融和とを缺ぎ、其の自由が十分に伸張されず、繼母繼子の冷かな關係が結ばれ來て居ることを立證するものでないかと思ふ。是等を凡て等しく廣く活眼を開いて明察熟考して貫ひたいと思ふ。所詮、是等は皆其の各國の土壤の所産であつて、我が帝國の土壤に移植さるべき思想的萌芽で無い。

兎角、日本人には、其の開闢以來の歴史が短く、西洋文明に痛く後れを取つたといふことから、今日と雖も、尙ほ卑屈心が消え去らず、何んでも舶來とさへ言へば、上等といふ語の別語の如くに心得て貨物は固より、思想までをも、外國から來たものとして、無批評、無鑑識に、輸入し、翻譯し、珍重しよるとかゝるが、是れは大間違ひである。

舶來として本物もあり贋物もあり、能く／＼取捨簡擇せなくてはならぬ。例へば、此度の世界大戦に於て、彼等英米は共に大いに世界に宣言して曰ふには、此度の戦ひは平和主義對軍國主義、正義人道對不義無道の戦ひであると。然り、之れを思想感情の上から見れば、アングロサクソン民族が、現在では一番穩健な平和的人間だであると云ひ得べく就中、米國の如きは、英本國の抑壓を逃れて、新天地を其處に開拓した清教徒の後裔ではあり、ワシントンを以て其れを装ひ、リンコルンを以て其れを飾つた美はしき理想を有する國民と見られて來て居る。今度ウイルソンが其の色揚げをすると言はんばかりに、巴里の平和會議に、彼れは其の牛耳を取つて、全人類環視の晴

れの舞臺に現はれた。而して、其の正義人道の觀念に基いて、國際聯盟を提案した所は如何にも立派であるが、而かも其の結果は、耳を掩うて鈴を偷むの諺を免れず、モンロー主義と國際聯盟とを巧みに連結した實際の鮮かさは、如何なる遁辭を設けやうとも、眞實は立派に英國と結んで、資本侵略主義經濟的軍國主義を示したものである。所謂ゆる仁義を假りて霸道を成すもので、正に是れ法衣の下から鎧の袖の仄見える淨海入道の姿である。既に此くの如くなるが其の國民性である。決して、平和や正義人道の理想に忠實なるもので無い。然らば、對内と對外とに、如何にして兩様の態度の使ひ分けが出来よう。是れが國內にても動もすれば相和せず、互に錙銖の利益毫末の權利を争つて、人心不安の念に驅らるゝ所以である。空疎な理窟から考へ想像を働いて見ると、何んだか共和主義が、一番、世界で、理想の進んだ國家のやうに思ふものが有るか知らぬけれども、實際の政治の運用の上からしては百弊續出して慕はしいものでも何んでも無い。

我れより世界に教へよ

此くの如く考へ來れば、吾人、日本帝國民は、三千年來一系の帝統を戴いて、其の下に眞の徹底せる民本主義の行はれ來つた此の金甌無缺の我が國體を外にして、何處に、より以上の國體を發見し得よう。又た創出し得よう。クロバトキンをして、我が帝國內に生まれしめたならば、彼れの思想も必ずや我が國體に満足し、此の根帯を離れずして、更に、各種の政治思想を働らかしたに相違ない。唯だ夫れ日本ならぬ異なる土壤に生まれて人となつた爲めに、吾人の抱く如き思想に到着し得なかつたまでである。

要するに、彼れの無政府的共產主義に向つて出發するに至つた其の動機には同情するが、其の謂ゆる未製品たる。無政府的共產主義には賛成出來ぬ彼れが今一步進んで反省し考へ直し、其の思想を圓熟せしめたならば、更に還元して國家の必須政府の必要を認め、而して上下一和の民本主義の帝國を理想とするに至つたことを疑はぬ。唯

だ、夫れ露西亞の土壤が、彼れの思想として其處に到達せしめぬことを惜しむ。斯ういふ譯であるのに、我が國民が、退歩的に在る未製品に垂涎し、其れを學んで何うするか、之れを學ぶことの曾に不可なるのみで無く、更に全人類の幸福の爲め、全世界の平和の爲めに、寧ろ積極的に新たに我が土壤に成る一大政治上、社會上の學理を究盡し、學說を樹立して、其の思想を世界に光被させなくては不可ぬ。從來、物質的方面にも、精神的方面にも、即ち、機械の上にも、學術の上にも、世界に誇るべき何等獨創の新發見も無いではないか。之れを科學的方面に徴すれば、如何にも、我國は、今日、猶ほ歐米より遙かに劣つても居らう。而して、此の方面には、餘程の努力を要するであらうが、其の精神的方面には、必ずしも左うでは無いことは、上來、絮説し來れるところに依つて、十分明瞭なはずである。されば、自信力なく、徒らに舶來思想を尊重する如き陋態を改め、自己が却つて世界に宣傳し、是れのみは日本を大宗と仰がねばならぬ如き一大政治學說を大成して、之れを世界に垂示し、宣傳するやうに希望する。而して、我が、學者、思想家は今少し其の膽を大にして、斯かる光榮ある

事業に、是れより大いに従事することを懲瀆する。

七、新マルサス主義に就て

咀ふべき新マルサス主義

我輩は、彼の青島に於ける日獨戦争の當時から、民族研究といふことに深く興味を持ち、爾來其の研究に怠らぬのであるが、概括して言へば、獨逸民族は三十そこらの壯年で、之れに對する英佛民族は六十七十の老年であつたのである。それが此度の大戰によつて、不思議に老年の英佛が春を回して俄かに若返つたやうに思ふ。然らば、日本は如何であるか、是れは青年から壯年に移る時機と信ずる。否や信ずると云ふよりも、左う信ぜざるを得ない。更に換言すれば、左う信じ得るやうに努力せなければならぬのである。然らずんば、此の國家の前途を如何せん。

全體に、壯年時迄は繁殖力多く、それから老期に近づくに従つて繁殖力が減じ

行くので、繁殖力の多い間は人間の活動に望みがあるけれども、その減じ行きて遂ひに止まるに至つては、最早や活動に望みなくなるのである。それ故に一國の元氣は其の人口の繁殖率に現はれ、其の盛衰は其れに依りてトせられるとも云へる。人間の生活機能が活潑に働き、それに由つて食物から攝取する養分が全身に供給して餘りある時に其の身體は發育し、全身に供給して過不及なきに至つて其の發育は止まり、更に生活機能が弛緩し、それに由つて食物より攝取する養分が全身に周流し、滋潤するに足らざるに及んで、終ひに其の肉體は枯渴し、朽木の如くに斃死する最後の運命が來るのだが、國家も亦た其の如く、人口の繁殖率の盛んなる國家は、國勢外に伸びて日に月に膨張し行く潛勢力をなすものだが、之れに反して其の繁殖率の止まるやうな國家は、最早や、將來發展の見込みなき影の薄いものである。ツエルダンの一役に佛國死活の運命が繫つた、獨逸は驚くべき多數の肉弾を以て、遮二無二、之れを突破せんとしたが、佛國亦た此處を先途と肉弾に酬ゆるに肉弾を以てし、辛くも之れを防ぎ止め、而して佛國を危険の渦中から救ひ得たことを以て俄かに世界に勇名を轟かし

たが、併し彼の時、何が故に刀折れ矢盡きた獨逸軍の疲勞に乗じ、輸贏を一戦に決すべく、長驅敵を逐ふの壯舉に出なかつたのか、我輩を以て觀るに、佛軍も亦之たれを知らざるに非ず、實は其の肉彈に乏しかつたが爲めであつたらう。戦ひの勝敗は肉彈對肉彈の勝敗であるが、此時に當つて、佛軍に肉彈の窮乏を憂ひたことが、爾來幾歲月に亘る長期戦に移る原因を爲したものであつた。而して、此の肉彈の窮乏は何より由來するか、それには佛國の人口の増殖率の殆んど停止に近いほどの事實が何よりも能辯に之れを物語るものである。

マルサスは、有名な人口原理論に於て、人口が幾何級數的に繁殖するに拘らず、食料は算術級數的に増加するのみだから、到底、此の無限に増殖する人口を有限の食料によつて養ひ切れるものではない。此の食料の制限あるが爲めに、その許す範圍に於てのみ現在人口が繁殖して居る。それ故人口の自然の繁殖を見んとする爲めには、其處に競争の已む可からざるを説いたが、近來其説を承けて、更に新マルサス主義なるものが起り、此の人類間に存する悲惨なる競争を回避し、生まれたるもの丈けが

平和な生活を送り得る爲めに種々の避妊法を講じ、結婚を自由ならしむると同時に、而かも、人口の繁殖を適度に制限すべきことを力説するに至つたが、併し此くの如きは、本來、人性の自然に背反するの甚しきのみならず、我輩の説く民族の研究からすれば、此くの如き新マルサス主義を採用して、自ら人口の繁殖率を低減し、若しくは固定せしむる如き民族は、是れは即ち、血氣既に衰へたる老年の民族であつて、獨り外に向つて國勢を張り得ざるのみか、老年は死の準備であり、豫兆である如く、左様の民族も遂ひに此世の歴史から消滅し去るべき運命を持つ者である。民族の運命には進歩か退歩かの二途あるのみで、イ立といふ状態は無い。それゆゑ、此世は進歩か然らずんば退歩か、之れを措いて、外に選ぶべき途は無いのである。若し、吾人にして國內の人口増加を恐れて之れを阻止せんと謀らんか、其の民族は、其の刹那からして退却の第一歩を初めたものと知らねばならぬ。苟くも、國際間の競争無くんばやむ。列強の對峙なくんば已む。其の然らざるこの事實なるに於て、斯かる退嬰策は、又たの名を自滅策と稱して然るべく、是れが我輩の絶對に新マルサス主義なる亡國の哀

調を呪咀し、一排し去る所以である。

徳川期の新マルサス主義

日本が長く鎖國を守つて居た時代であるならば、新マルサス主義も宜しかつたであらう。又た事實上已むを得なかつたであらう。何んとなれば、鎖國その事が、已に天理に背いた不自然なものであつたから、勢ひ其れに伴つて、社會の内狀も不自然の發達をせなければならぬ譯なのである。何故に鎖國が不自然かと云へば、天は空飛ぶ鳥の自由なる如く、吾人にも自由を與へ、膨張する人口の移住すべき無限の樂土を諸方に存置してあるのに、自ら城壁を設けて其外に出ないからである。已に自から城壁を固うして其外に出ぬとなれば、それこそ、限りある孤島内に無限に繁殖する民族を如何やうにして養ふか、城壁外に自ら出でざると共に人をも入れぬ。是に於て、人口の粗密相補ふべき移住の自由ならざるのみならず、物資の有無相通すべき貿易も亦た梗塞するのであるから、到底、年々夥多しき率を以て、繁殖し行く人口を養ひ得るも

ので無い。されば其の結果は、當然、マルサスの説く如く、食料の許す範囲内に其の人口の増殖を阻止せなければならぬ。而して、其れを人工的に阻止せんとする新マルサス主義が、已に事實に於て、我が徳川期頃までは盛んに行はれたものである。更に、避妊法ぐらゐの生優しい話に止らず、公然の秘密で墮胎をした。生兒の壓殺をした。或る藩では、絶対に三人以上を育てず、四人目からは必ず殺すことにして居つた。まるで、人間を見ること、大根や蕪菁を見ると異なるところなく、年の豊凶や自家の生計の程度に合わせて勝手に間引いたのである。而して有司も亦、見て見ぬ振り、即ち天下晴れての秘密であつたのであるから、三千年の歴史を誇る日本民族が、徳川期を終るまでに、其の人口が、僅々二千何百萬、三千萬にも満たぬミジメな物であつた。しかし其れでも宜かつたと云ふのは、鎖國を陋守して何等、外國文明の壓迫が無かつた爲めに、一國の存立が外から危うされる憂ひが無かつたからである。けれども、一度開國となつて以來、今日の我が國情は、其れとは全く事變り、一瀾に搖蕩されて世界の列強と肩を駢べて、生存を争ひ居る境遇に立つものである。

此時に當つて、吾人大和民族が、依然たる鎖國時代の退嬰主義を固執してよろしいであらうか。是に於て、心あるものは、我輩の語を聞くまでも無く、何人も皆な新マルサス主義の一笑罵にも値せぬつまらぬ者であることを理解し切つて居るのである。

物の起るは偶然ならず

併し乍ら、顧みて我輩の憂へる點は、新マルサス主義は主義として無價値有害のものであるとしても、此の社會の狀態が、果して新マルサス主義を斥け得るほどに完全なるものであるかと云ふことである。凡そ物の起るは偶然にして起るものではない。起るには必ず原因がある。然らば、西洋に提唱された新マルサス主義が、昨今日本に新たなる勢力を得て主張されるには、其處に何等かの其の學說の育つべき土壤が現れたからであると信ずる。我輩は軍人であり、特に此の軍人の後援事業に従事して居るものであるから、勢ひ手近な廢兵、若しくは軍人遺族の間から例を取ることになるが、先頃とある廢兵の家族を見舞つて、親しく其の生活の實狀を見、惻然として彼等の

爲めに悲しみ、慄然として國家の將來の爲めに怖れた。詩人は「一將功成つて萬骨枯る」と稱し、戰爭の悲惨を痛刺したが、枯れたる萬骨が悲しむべきか、生きて枯骨を抱きつゝある生活が更に多く悲しむべからざるか、生存者の悲惨が却つて死者の悲惨を羨しむる如きことが有りはせぬか。義勇奉公の念は、大和民族の固有性である。犠牲の精神は高潔なものである。戦死は名譽である。負傷は名譽の表彰である。戦ひに臨んでは左右を顧みるなど、叱咤され激勵されて、遮二無二直往邁進した當年の國家の功勞者は、今ま將た如何の生活狀態に居るか。成るほど、自分一人だけは、廢病院に收容されて、其日々々の生命を繋ぎ止めても居るであらう。けれども、廢兵として、人間であれば家族もある、妻があれば小供も出来る、成るほど其の家族は、附近の棟割長屋を給與されて、無代で住居して居るであらう。けれども數人の幼兒を抱く孱弱の妻は働き盛りの夫を國家に奪はれ、夫といふ名稱の人間は、猶ほ餘命を保つて眼前に在るも、唯だ氣息の通ふ土偶であつて、何等生活能力を持たぬものである。然らば、其の家族が、如何にして其日々々の露命を繋ぎ止め得るか、而かも其の給與

されたる住宅なるもの如何ん、我輩の目撃したものの如きは、一家五六人の家族が、僅々四疊半ばかりの一室に住むで、それ以外には直ちに小狭い臺所が一つ附屬し居るばかりであつた。世の中には、格別、智慧もなければ學識もなく、従つて是れと見るべき國家に對する功勞もなくして、而も坐らににして巨萬の財産を有し、疊數の九十にも百にも達する廣大な別荘生活を爲し、左團扇で世間の苦樂を餘所に聽く贅澤者も澤山あるのに、血税を拂つて國家に貢獻した陛下の赤子が、斯うした悲惨な境遇に居る其の心理状態を何んと想像するか。現に彼等は、我輩の前に悲憤の涙を絞つて、國家の自分等に對する待遇の甚だ酷薄なるを慨嘆して居つたのであつた。

又た我輩の知れる或る一人の戦死將校の夫人には、足手纏ひの五六人の子供があるので、僅少な其筋の扶助料では何うすることもならず、據らなく何時しか巨額の負債を作り、今其の爲めに首も廻らぬ苦境に陥つて居る。そこで、其の未亡人が嘆息して云ふには「切めて小供でも今少し少かつたならば」と、新マルサス主義の叫びは實に斯やうな空氣の中から振ひ起るのである。住むべき疊數に家族の數が餘る、得ら

る、食料以上に家族の數が餘る。而も、之れを如何んともすることが出来ぬとすれば其の結果、何人も考へ得る方法は、唯だ其の疊數の許すだけの家族、食料の許すだけの家族に、一家の人數を減せんとするのは當然である。従つて、生きたものを殺すことが出来ぬから生まるゝ者の數を制限せんと謀るより外に道は無い譯である。一意國家の爲めに奉公の赤誠を抽んずる將校兵卒も、一念一たび此くの如き死後の悲惨なる光景に及べば、最早や安じて子供の繁殖を自然のまゝに任すことが出来なくなる。癡兵の肉體にも人間の氣血が通ふ以上は、それに伴ふ人情も亦た伴つて起るのだが、然るに生活の壓迫を思へば無理にも自制力に訴へて、之れを阻止せねばならなくなる。即ち、新マルサス主義は其の往き着くべき當然の歸結であつて、其れ以外に此の場合選ぶべき方法は無いのであるが、而も、國家の功勞者をして此道を選ばしむる國家若くは社會は實に何んたる冷酷なるものであらうぞ。其の國民をして、人間と生まれて人情を全うし、其の家族を満足に養ひ得しめぬと云ふが如き國家は、社會は決して完全なる組織を持つたものとは云へぬ。新マルサス主義を禁ずるは宜しい。之れを禁じ

て而も此くの如き國民の慘狀を等閑視し、偶ま新マルサス主義の憂ふる如き墮胎者若しくは生兒壓殺等の國法の破壊者の現るゝに隨つて、之れに加ふるに刑罰を以てするが如きは、是れ國民を陷穽に投じて、更に下すに巨石を以てするが如き者である。斷じて仁者の爲すべきことでは無い。

八、質問辭を歐米に學べ

東西兩洋人の特種性

元來、東洋と西洋との文明の分岐し行く方向を見るに、西洋は理論的である、科學的である、従つて研究が形而下的に進む。東洋は精神的である、空想的である、従つて研究が形而上的に進むのである。それ故、物質的方面は西洋が發達して居るのに對して、靈性的方面は寧ろ東洋の方がより多く發達して居ると思ふ。けれども、人間其のものは靈のみの者で無くて、同時に物質的のものである。其の故に、形而上的觀照と

共に形而下的研究が無ければならず、靈性的觀照とともに物質的研究が無ければならぬ。是れ吾人の此世に存在する以上は、其肉の維持の爲めに科學の無かるべからざる所以である。

(71) 然るに、東洋人の性癖は、兎角冥想して空理を追うに走り科學の研究を怠つた。之れに反して、西洋人は専ら力を科學の研究に注ぎ、それが諸種の機械の發明を促し、遂ひに産業革命を齎すに至つたので、其の結果、國民の富が急速に増加した。各國共に人口は時代を追うて繁殖する。人口の繁殖は必ず其の生活に必須なる物資の増加を伴はなければならぬ。物資の増加は即ち富の増加であるが、此の富の増加は必然に諸機械の發達に伴ひ、諸機械の發達は、又た必然に科學の進歩の結果に待つ。されば科學的研究が、吾人の生活に取つての最大要物であることは自明の眞理であり、従つて科學的研究の盛んなる國のみが、獨り國運を無限に發達せしめ行く理由を發見すべきである。原人時代の如く、簡單なる器械を用ひて野に獵り河に漁し、若しくは野生の植物でも食つて生活し得た時代には、左まで科學といふべき程のものの智識を

も要せなかつたか知らぬけれども、段々人口が稠密になつて來ると、左ういふやうな原人的生活を陋守して居る日には、食物が不足を告げて來る。其他之れに伴ふ衣、住の必需品も同じく缺乏を告げて來る。

是に於て、何等か之れを補ふの工夫なかる可からざる所以であるが、此の工夫を吾人に與ふる力は、何んとしても科學で無ければならぬ。肥料が足らなければ、之れを空中の窒素に取ることを教へるものは科學の力である。燃料を假らずに光力を電氣に得ることを教へるものは科學の力である。更に、其の電氣を水の壓力から變性せしむることを教へるものも科學の力である。此くの如きは科學的智識の幼稚なる、若しくは殆んど缺かせる原人時代に於ては、到底夢想だに爲し得ざるところであるが、此種の幾多の發明が、吾人の有らゆる方面に連續的に現れて來た結果、それが、吾人の生活資料を豊富ならしめた効果は驚く可く大なる者である。此の世界が、人類の生存競争場裡であることは何人も口にし、能く知るところであるが、しかも其の優勝劣敗の分るところは富の有無にある。而して、此の富の生産の要因たるものが、實に科學

的智識に存することを思は、やがて此の科學的研究の進歩せる西洋が、生存競争場裡の優勝者であり、此の科學的研究の遲滯せる東洋が、生存競争場裡の劣敗者である運命も、豫じめ明瞭なるべき道理と思ふ。

我輩は、必ずしも、靈性的觀照が科學的研究よりも人生に價値なしとは言はぬ。人間が、極端なる功利主義にのみ走つて、物質的満足のみ欲求し、それが爲めには、義理も人情も、土芥の如くに棄て、顧みぬといふやうになつては、此世は人間の世ながら、直ちに畜生道に墜ちたものと思ふ。併しながら、何んと云つても此靈を包むものは、吾人の肉體である。此の肉體を亡せば靈の宿るところが無い。それ故、車の兩輪を要し、鳥の双翼を要するが如く、靈的活動にも肉の存續が必要である。従つて、此の肉の存續が力を缺く國民は、遂ひに亡び終らざるを得ぬ。それ故に、之れを靈的に見れば、亡ぶもの必ずしも、其の人格が劣等とはせぬけれども、唯だ夫れ、生存競争には堪えざる者なのである。之れを思へば、此の世界の激烈なる競争場裡を切り抜けゆく口は、何うしても、東洋の從來の如き進み方を一變しなくてはならぬ。

何故に？の有無に存す

此の東西兩洋の進み方の分岐點は、何處にあるかと調査して見ると、「何故？」にと
 いふ一語の精神の有無に存する。例へば林檎の實も枝を離るれば地に落つることは、
 吾人の日常の經驗に於て目撃するところ、何等怪しむに足らぬとして居る。併し乍
 ら枝を離れた林檎は、何故に右に飛ばぬか、左に飛ばぬか、天に上らぬか、而して
 なせ獨り必ず地に落つるか。深く考へて見れば不思議な譯である。而も此の不思議を
 事實上、初めて考へ得たものは十七世紀に生まれた英國のニュートンであつた。彼れ
 は、普通人の尋常事として見通して來た是れだけの事實に對して「何故に？」といふ
 質問を起し、その答を得るまで考へつゝけた。而して其の答は有名なる地球引力説で
 あつたのである。湯が盛んに沸き立てば、鐵瓶の蓋のカチ／＼音楽を奏で初めるのは、
 何人も日常見慣れて居る事だが、而も人類のこの世に生じて以來、何人も「何故に
 ？」と叫んだものは無かつたのだが、十八世紀に生まれた蘇格蘭のワットといふ少年

は、獨り此の「何故に？」といふ疑問を抱いて、爐邊に時を忘れながら、いろ／＼の
 實驗をした。蒸氣の盛んに起る鐵瓶の口を態々匙で塞いで見て跳び立つばかりに揆ね
 上る蓋に汽力の如何んを試みた。而して、此の「何故に？」の答へが、一大蒸氣力の發
 明となつて、汽車や汽船を走らすに至つた。浮藻と共に濱邊に流れ寄るさま／＼の食
 器の類は海岸の漁村に住む者の珍しと見ぬところであらうが、十五世紀に生まれた伊
 太利のコロムブスは前に大陸を見ぬ渺茫無限の大西洋岸に見馴れぬ食器の往々流れ寄
 るを見て「何故に？」といふ不審を胸中に抱いた。其の答へを得るまで、いろ／＼に
 沈思黙想した。而して其の答は遂ひに實行に移り、亞米利加大陸の發見となつて現は
 れた。智識は懷疑に出發するといふが、實に、「何故に？」といふ懷疑から文明は萌
 芽して今日に至つて居るので、二十世紀の西洋文明は、換言すれば「何故に？」の准
 積といつて宜しい。而して、此の「何故に？」の疑問の詞は、實に西洋人の性格の特
 徴である。「何故に？」は論理的であり、分析的であり、従つて研究的である。而して
 突進して已まざる意氣を有する點から言へば積極的である。是れに反して、東洋人の

性格の特徴は「故に」である。初め観照的に或る事物を見得ると、それに對して「何故に？」を叫ばずして、直ちに「故に」を叫ぶ。「何故に？」の歸納的なるのに對して「故に」といふは演繹的である。従つて総合的であり敘述的であり、信仰的である。而して、斷定して、其の淵源を究むるの意を有せざるの點から言へば消極的である。假令ば、孔子の用語の如きを見ても、唯だ、「故に」の多きを發見して、「何故に？」の多きを知ることが出來ぬ。「故に」は説明的なるが故に、自ら老婆的である。「何故に？」は研究的なるが故に自ら少壯的である。老婆的は知足的安分的であり、少壯的は精神的不退轉的である。勿論、東洋とても、理中理を尋ねて終ひに唯心に究め至らずんば己まの禪宗の如きにも「何故に？」の修行がある。即ち、禪家の語録に散在する什麼とか什麼生とかいふ、例へば、狗子有佛性什麼生といふの類がそれである。理を究むるには、此の什麼生、若しくは、什麼でなくてはならぬ。けれども、此方の研究的態度は、單に、其れに止まり、更に、物質的、科學的方面に突進し、擴充するに至らなかつたから、是れが東洋の衰亡の因を爲し、曾て印度、支那の古代文明がはるかに歐

米を凌いで居たに拘らず、今は復かに歐米の後塵を拜するに至つた所以である。

大に質問癖を養へ

日本人も同じ東洋人の特性を享有し居る如く、此の「何故に？」といふ質問癖を缺いて居るが、是れは各自に注意して改め行かなくてはならぬ。今度の平和會議に於て我國の外交が失敗に終つたと云はれて居るが、然らば、そは「何故に？」といふ問ひを當然、必要とする場合である。即ち、我が外交の失敗は、其の使臣の人物、能力に因ることとも左ることながら、さらに、それが我國の實力に如何ほどの關係があるのか我が政治組織に何等かの缺陷が無いのか、或は我が國民一般の思想の程度が如何であるかそれ等に何かの深因が無いか。一々、分析的にそれらに對して「何故に？」を連發し研究したならば、何か其れに對して有益なる答案を得るに相違ないと信ずる。又た米國では、海軍の大擴張を行ひ、更に、此の秋、東洋に百八十隻の大艦隊が現れ來るといふに對して、吾人は之れに「何故に？」の質問を發し、米國は何を目的として此く

の如き大艦隊を新たに建設し、又た何んの必要あつて、東洋に廻航し來るかに考へ至る必要がある。更に溯つて、パナマ運河の開鑿に對しても「何故に？」を連發して考へ考へする必要があらう。而して、此の「何故に？」の中から分析的研究の結果として發見し得る答案には、必ずや、吾人の大に戒心し、善處すべき何者かを考へ附くに相違ない。今や國際聯盟成立し、世界の永久平和を冀圖するの聲は盛んにあるけれども、しかも注目すれば、之れを裏切る如き幾多の現象が方々に現はれて來る。吾人、日本國民たるものは、斯かる際にこそ、愈よ益々緩怠なく一々、「何故に？」の質問癖を盛んにして、其の真相を究め盡くさすんば己まざるの覺悟がなくてはならぬ。

九、三十年後の食料問題

最近五ケ年の米の産額

最近五ケ年間に於ける我が國內地の米の産額は、平均五千四百三十七萬石であつて、

十年前に比すれば、約一千萬石の増收と云ふことである。而して、此の國民の主食物たる米の自給自足的企圖に基く、農商務省の三十年計畫案なるものに據ると、大正二十六年に於ける本邦内地の推定人口七千萬人に對して、所要の米は約七千萬石であるから、將來の農事政策にして宜しきを得ば、大體に於て我が國民の需要する米は、不足を生じない見込みであると云つて居る論者もある。又た或る農學者の如きは、最近十年間に於ける米の生産増加は、約五割であるのに、人口の増加は、其れ以下であると云ふことを論據として、今後、益々、米の生産増加を計り得る餘地ありとなし、マルサスの人口論を否定して、我が國に於ける米の生産増加は、人口の増加に因る米の消費増加よりも大なるかの如く論じて居る。果して、然りとせば、國家の幸慶之れに過ぎぬのであるが、現實に於て米價の非常なる騰貴を目撃し、殊に米騒動といふが如き——假令、複雑なる原因を有するにせよ、之れが爲めに一大暴動さへ惹き起したるを思へば、遺憾ながら、是等論者の言に聽従して我が食料問題の前途を樂觀するとは出来ぬ。

人口の増加率が幾何級数的であるに對して、食物の増加率は算術級数的であると云つてマルサスの人口論には、多少の缺陷があるにしても、生産は常に報酬漸減の大原則に司配せらるるのみならず、有限の土地を以て、無限に増加する人口の需要を充し得る生産を望むは、到底、不可能であると云はねばならぬ。然らば、即ち、マルサスの述べたるが如く、其の割合が幾何級数であるか、將た、算術級数であるかは暫く措き、人口の増加に對して、食物の増加が伴はぬことは、否定すべからざる事實である。

三十年後を豫想して

農商務省の調査に係る三十年後に於ける内地の地目變換田及び開墾田の見込み面積が、七千四萬五千九百三十八町歩からあつて、歐洲各國の耕地が四十乃至五十プロセントであるのに、我が國は尙ほ十八プロセントに過ぎぬと云ふために、我が農業發展の前途を樂觀する論者の説は、必ずしも理由なきに非ずと思惟せられざるにあらざるも、農業の過渡期、即ち、改良の整理に、其餘地の極めて多大であつた際に於て、

五割の増収があつたことや、或は十年前に比較して、約、一千万石の増収であつたと云ふことを以て、今後に於ける我が國の米の生産額増加を樂觀するのは、頗る危険ではあるまいか。固より、我輩は、此の問題に對して、全然、門外漢であるけれども、米價調節の聲、朝野にかしましく、玄米食奨励の建議案さへ議會に提出せらるゝに至りたる現狀を考ふるも、樂觀説の危険なるべきは、聊かも疑ひの餘地が無いと思ふ。現に農商務省當局の談に依ると、前述の如く最近に於ける内地産米額の五ヶ年平均は、約五千四百三十七萬石であるが、此の内、輸出が五十九萬石（外國へ九十二萬石臺灣、朝鮮へ七萬石）で、輸入は三百四十四萬石（外國より百四十萬石、朝鮮より百二十萬石、臺灣より八十四萬石）であつて、結局二百八十五萬石の輸入、即ち、生産不足を生ずる計算であるが、前年の豊凶其他の關係に因り、内地に於ける米の産額は、其の需要に對して、概ね一ヶ年二百萬石乃至二百五十萬石の不足であることである。然らば、則ち、我が國の農業の現狀が、縱令、耕地整理や農事改良の餘地尙ほ多しとするも、謂ゆる自給自足の見地よりして、我が食料問題の前途を悲觀せぬ譯に

は行かぬのである。

殊に、我が國民は、年々、約、六七十萬人の増殖を示して居るから、今より三十年後に至らば、少なくとも一億萬人を算するものと見なければならぬ。従つて米の不足も四五百萬石以上となり、今日すでに、一揆暴動を起すまでに困難を極めて居る生活の不安は、更に一層の窮乏を加ふべきは必至の勢ひであるべきである。是れ實に僅々三十年後を目安として、而も非常なる凶歉であるとか、或は大戦争と云ふが如きことを除外せし、太平無事の三十年後に於ける概見である。若し、夫れ、國家永遠の計圖に立脚して、此の問題の前途を豫想せんか、寒心の至りに堪へぬと云ふも過言でない。

世界的米騒動の勃發も

遠く歴史を遡ることは暫く措き、近く徳川幕府三百年間に於ける我が人口は、二千四百九十萬人から二千七百二十萬人の間を、一高一低して居たが、開國と共に一方に於ては衛生や醫學の長足なる進歩があり、他方に於ては墮胎を嚴重に取締る等、行政

上の改善に依り、開國當時、漸く三千萬人未滿のものが、爾來六十年の間に、殆んど六千萬人に増加した。而して、此の人口の増加は、國力の強大を期すべき最大要素である。と云ふことは、敢て説明を要しないのであつて、若しも人口にして減少せんか、如何に廣大なる土地があつても、國際競争に處して、到底、優勝の地歩を占むることは出来ぬ。而して、六十年間に三千萬人の多きを増したといふのは、我が國力の著しく強大を加へたものであるから、國家の爲めに誠に喜ぶべく祝すべき現象であつて、今後も倍々其の繁殖を望むべきは、云はずもがななことであるから、而も之れに相應する食物の需給にして圓滿ならざらむか、忽ち國民の生活をして一大危地に陥らしめ、國力強大の要素として慶すべき人口の増加は、却つて、禍亂發生の原因となるに至るのであらう。

前年の米騒動は、是れが鎮定に、一時、軍隊を出動せしめたとは云へ、畢竟、群衆の、騒動に過ぎなかつた。併し乍ら、今後、若し、此の食料問題にして、能く安固なる解決を遂ぐるにあらすんば、終ひに世界的米騒動の暴發を避け得ないと思ふ。而して、

其の時に及んで、能く一切の障礙を除去して、世界に於ける我が日本民族の生存を確保し得るものは、依然として強大なる力の發動に待つの外はない。我輩は必ずしも、ダーウキンの自然淘汰説を、理性あり徳性ある人類の競争に、其まゝ適用せむとする者では無いが、生存競争の己む可からざる以上は、優勝劣敗、適者生存の眞理を認めねばならぬと思ふ。

経済的競争の悲惨

今後に於ける列強の経済的競争は、戦前よりも、更に、一層猛烈となるべきは、十指の一齊に指示するところのものである。而して世人は此の経済戦なるものが、銃剣戟を以てする戦闘に比して、より以上に残酷を極むるものであると云ふことに氣附かないのは何故であらうか。

假りに、一櫛の肉に對して、兩犬相争ふ場合を想像しよ。甲が乙を咬み殺して其肉を獨占するのと、乙が巧みに騙取して甲を餓死せしむるのと、孰れが残酷にして

孰れが道德的なるや。請ふ、須らく、客觀的批判にとめずして、主觀的に考察せよ。肉破れ骨碎けて死に至るは、觀る者をして轉た凄愴の感に堪へざらしむるけれども、其れ自身が感ずる苦痛の長時間にして、且つ大なることに於ては、饑餓に因りて斃るゝものに及ばざること數等である。武器を以てする戦争を前者に、経済戦を後者に擬するは、或は妥當ならずとの議論あらむも、要するに二者の異るところは、暴力を以てすると否らざるとに過ぎざれば、比喻必ずしも適切を缺ぐとは思はれない。

武器を以てする戦争は、或る學者の云ふが如く、本能を還元して野獸性を發露するものであるから、之れを非文明と云ふことは出來ようけれども、経済戦によつて他を壓迫し、對手を窮地に排擠するを、人道的と云ふことの出來ぬのは勿論、其の惡辛悲惨を極むるは、彼れに比して寧ろ此の方が深刻である。元來戦争なるものは、今次の大戦が詮ずるところ民族の生活問題に起因するやうに、國際的生存競争、即ち、兩者間の経済的競争に基くものであつて、此の競争に敗者たるの痛苦は、流血の悲惨を敢てするも、尙ほ且つ忍ぶ可からざるものなればこそ、古往今來、未だ戦争の跡を絶

たの所以なれと思ふ。然り矣、兵は國の大事、死生の地、存亡の道、添く察せざる可からざるは云ふまでも無く、其の慘禍の極めて大なるを承知しつゝも、經濟的壓迫の更に悲惨なるには換へられないので、遂ひに乾坤一擲の雄を争ふに至るものである。

魚目燕石も甚しい哉

外國電報によれば、正義人道の最も高唱せられ、平和と自由とを以て建國の精神として居る米國が、一方に於ては著々軍備の擴張を實行して居るばかりで無く、下院議員バツヂエツト氏の言明を見るに、世界の恒久平和の爲めに國際聯盟問題を提げて、新記録を作つてまでも遠く歐洲に赴き、其の成立に斡旋甚だ努めて居るウキルソン大統領が、歐洲より電報を以て其の擴張を主張した結果によると云ふに至つては、聊か意外の感なきにあらざるも、要するに上述の卑見に對する最も眞摯なる裏書きである。茲に一段の興味を感ずるは、某佛人の譬喩である。曰く、

『鶏が狐に向つて、仲善くしようでは無いかと云ふ、是れが國際聯盟である。蚌

が虎に向つて、お互に爪と牙を除かうでは無いかと云ふ。是れが軍備制限である』と。我輩は必らずしも、無條件に同感を表するものではないが、其の大體に於いて、穿ち得て妙を極めて居ると思ふ。然るに、我が國民の一部には、徒らに平和の聲に致されて、『治に居て亂を忘れず』の金言を忘却し、今や重大の時局に際會するにも拘らず、驕奢懦弱に流れむとするは、何んたる淺ましき心なるぞ。斯くの如くにして若し覺醒するにあらざれば、他の多くの亞細亞の國民の如く、遂ひに悲惨なる亡國の運命に陥るを免れないであらう。我輩は、猥りに不祥の言を弄して、悲歌慷慨するものではないが、自己の立脚地を忘れて、事の是非を甄別せず、徒らに歐米人の精粕を之れ啜り、以て世界の氣勢に順應するものと爲し、得々として時勢を解する先覺の士を以て任ずるが如きは、魚目燕石も亦た甚しいと思ふのである。

皮想なる平和思想

曾て、一匹の野猪が、一生懸命に其の牙を磨いて居た時、巧慧なる野狐が之れを見

て、深く怪しみ「見渡すところ、何處にも敵らしいものは無いのに、何故、其のやうに牙を磨き戦闘の準備をするのであるかと」半ば揶揄の色を堪へて、さも小慧しく尋ねた。ところが、之れに對する野猪の答へが面白い。いや、敵が現はれてから準備したのでは間に合はぬ。加之、敵一たび出現せば、之れに對應すべき他の處置を要するのであるから其の段になつて牙を磨くやうな餘裕はない」と。是れ實に人の普ねく知る伊蘇普物語中に載るところであるが、二千年前の寓話が今日尙ほ吾人をして、倦驚鞭影に驚く底の感あらしむるは、畢竟、吾人の精神が徒らに安逸を欲し、緊張を缺ぐが爲めにあらずして何ぞ。既に述ぶるが如く、内には人口の増加に對して米の産額之れに伴はず、外には列強の經濟的競争益々激甚ならむとするの現状に處して、吾人の當に努むべきところは、農業に、商業に、或は、教育に、其の施設固より二三にして足らぬけれども、敵影を認めざるに先だち、其の牙を磨いで準備をした野猪の如く、國防の充實をして遺算ならしむるは、刻下の最大急務であると思ふ。

殊に、平和思想の極めて盛んである現在に於て、之れを高唱するの必要を切に感ず

るのである。時正に、陽春三月、東風習々として遊意轉た勃々たり、試みに半日の晴を趁うて、杖を郊外に曳かんか、鳥は樹を繞つて歌ひ、蝶は花を尋ねて舞ふ、觸目立地、眞に是れ平和の樂天地である。然れども、更に、仔細に觀察すれば、彼の嗜々和鳴する禽鳥は、樹間をあさつて幾百千の小蟲を捕へ、啄殺飽くを知らず。彼の翩々亂舞する蛺蝶は、花際を徘徊して花蕊を蹂躪し、嫩芽を掠奪するに忙しいのであつて、生存競争の爲め相殺し相殺さるゝ激烈なる戦闘が、彼等によつて行はれつゝあるのは、春風影裏殺氣漲るとでも云はむか、吾人の以て平和の樂天地と思つたのは、全く皮相の見であつたことを發見するであらう。今日、正義人道の高唱せられ、世界平和の絶叫せらるるのを見て、最早や戦争なるものは無いものと速断し、多年、愉快した天國が到來したかの如く思惟するのは、恰も春光長閑なる野に、蝶舞ひ鳥歌ふを見て、萬物和樂、些の争ひもなく、些の衝突も無いと思ふに異ならぬのであつて、彼の小慧小知なる野狐の亞流と云ふべく、其の雷に皮相の短見なるのみならず、敵國外寇なしとするの思想國民を風靡せば、三千年來養ひ來れる義勇奉公の精神も遂ひに銷磨する

に至り、勝ち得るところのものは亡國の二字に非ずして何物ぞ。

誰か無關心なるを得ん

百年後に於ける國家の利益得失を達觀痛論するも、吾人と眞に憂歡を分つものは甚だ罕れであらう。併し乍ら明日に切迫する……しかも直接自己の死活に關する問題に對して、無關心なるものは、天下一人も之れあるまい。東洋の平和や、世界の經濟的競争に對する吾人の憂慮に共鳴しないものでも、三十年後に於ける我が食料問題の困難なることに就いて鈍感なるものは絶無であらうと思ふ。然るに、此の食料問題——世界的米騒動の解決に重大の關係を有する、國防問題を高閣に束ねて閑却せんとするは餘りに思慮なきの至りである。

既に、食料の自給自足にして期し難しとせば、我が國民は、勢ひ、平和的膨脹をするより外に道が無い。此の場合に於て、若しも依然として人種的宗教的癖見に執して我が日本民族の平和的發展を遮るものあらば如何ん、暴力を以てするにせよ、否らざ

るにせよ、吾人を待つに差別的待遇を以てせば、劍を抜いて起つ己むを得ないことは、何人と雖も異存なき所であると信ずる。然らば即ち獨逸が屈伏したからといつて、吾人は、決して晏然逸居を希ふべき場合ではあるまい。一日も速かに堅實なる國防の確立を圖らねばならぬ。而して、國防の確立は、一に國民皆兵の精神を徹底するにある。國民皆兵の精神を徹底すること其れ自體は、又た經濟的競争に優勝を期する所以である。

一〇、八方塞りの日本

日本の全盛期去るか

我輩が、日露戰役當時、英國の某有力者から受け取つた電報に、今が日本帝國の權威發展の最大限の時機でないかとあつたのを見て、非常に不愉快に感じた。それは日本が、將來、更に幾多の艱難を経べく、其度びに日露戰爭以上の權威發展の可能なる

べきことを確信して居たからである。けれども自己の欲目を去り、第三者として冷靜に日本を觀察したなら如何であらうと、更に一考するに及んで、我輩とても矢張日本に幾多の缺點あることを知つたのであるが、而かも將來寸時も早く其の缺點を消滅させて、十分、世界の列強と角逐し得るやうにし度いと希望したものであつた。然るに其の後十有餘年を経た今日に至りて、其の電報を憶ひ出して見るに、實に其の豫言の驚くべく的中して居ることを遺憾に思はざるを得ぬ。

文明を、内外の両面、即ち、物質と精神とに分つて見るならば、日本の外面的、即ち、物質的文明は頗る進歩した如くに見えるけれども、内面的即ち精神的方面には多大の遺憾なき能はずである。七千萬の大和民族間のオルガニゼーションの力なるものが、殆んど滅絶し居ると云つても宜しいほどである。若し、外國の新聞等に某國の大臣、其他の政府の當路者が收賄したとか著しく其れに類した不正事件があり、私利を營んだと云ふやうな電報の載つて居るのを見ると、其の操行の野卑陋劣にして、精神的に甚だ低級なることを痛感し、而して日本には左様なことの無いのを信じて居たもので

あつたが、其の日本の有様を見るに、其の道徳が時と共に頽廢し、政治社會の腐敗は言ふに忍びざるほどで、當路者の利己主義、且つ、官權亂用の惡弊が、歐米以上に進める如くに感ぜられることを憤慨に堪へぬ。上のなすところ下の之れに倣ふは水を低きに導くが如きものであつて、今や、社會は、滔々として渾濁の淵に急がんとしつゝ、ある。實業界に於いても、粗製濫造が盛んに行はれる。それ故、折角、戦時中に發展し得た南洋其地の市場も、戦後に於ては、追々と他國の製品に切り崩され、追ひ拂はれつつある。痛嘆すべきの事なりと雖も、元と我が商業道徳の腐敗より來れる自然の天罰だから是非も無い。

又た中學生、大學生といふ如きもの、目的を聽くに、志天下國家にあるものは、寥々として曉天の星より稀れに、學問の目的が、自己を完成するにあるとか、而して公共の利益の爲めに社會的に奉仕せなければならぬとか云ふ如き、殊勝の考へを抱いて居るものは、殆んど無いと云つても可なるほどである。それ故、見よ、彼等が學業を卒へて社會に放たれた後の方向を、實業界が景氣好ければ、争うて口を求めて、三菱や

三井の門に走る。而かも、不景氣となれば、そろ／＼遁げ出して、或は官吏となり、或は教員となる。一旦、官吏で出身し、教員で出身したものと雖も、此四五年の如く實業界が一般に好況であつた際には、皆な官職を抛ち、教鞭を棄て、實業界に入る。又た自己の一生の社會奉仕の道を那邊に確定す可きか等を考へぬ。それ故、此頃のやうに、又た不景氣風でも吹き出して來ると、又た怖氣ついて實業界から足を洗ひ、元の官吏なり教員なりに逆戻りして、恬として耻ぢぬのである。何んとなれば、彼等の眼中、私利以外に何物も無いからである。昔は、斯うまで無かつたが、今は社會のオルガニゼーションが斯くの如くにして、次第に亂れて來た。従つて、其れが、外交に反映し、我國の權威は、國外に對して、漸次、衰頽しゆく一方である。其の著しい例は、之れを支那の排日、米國の排日感情の激進、尼港の奇禍、併合後の朝鮮の統治の不完全、其の民心の動搖等に徴することが出来る。

世界の趨勢に覺めよ

第一に、日本の將來に於て、最も顧慮せなければならぬのは米國である。英國もあるが、英國は日英同盟があるから、先づ暫く問題外に措くとして、大和民族の生活の保障を確實にする上には、其の前面にある米國が競争者である。それ故に、吾人は、此の米國を友人として對手として立たなければならぬ。米人自身から考へても、また同様にあらう。何んとなれば、今日、歐洲方面に於ては、總ての經濟的分野が略ぼ定まつたので、その定まらぬのは獨り太平洋沿岸、即ち、我が東洋があるだけだからである。米國としては、それに對して、自己の有利なる種々の術策を弄せざるべからざる理由がある。そこで、甚しきに至つては、支那人や朝鮮人をまで使喚して、日本人排斥の運動などをするが、餘り行きすぎて正義人道の域を脱出するに至つては大いに責めざる可からざるものだけでも、彼等が東洋に多大の注意を拂ひ、我國を競争の對手とする其の心情に至つては、彼此地を變へ、假りに吾人が米人であると云ふ立場に立つて考へるなら、左まで無理も無いであらう。

元來、生活上の競争は、動物の通有性であり、而して、人類も動物である以上は、

此の競争を獨り免るる譯に行くまい。其點に至ると、徹底したる微妙なる觀察をして居るものは米人である。一方、世界主義の旗幟の下に、外交政策の手を無限に國外に、伸すと思へば、一方モンロードクトリンなどを振り舞はして、自己の繩張だけは嚴重に侵されまいと用心して居る。兩頭の蛇的政略を縦横無碍に使ひ廻す手際は誠に鮮かなものである。左ういふ點になると、日本人は實に馬鹿正直も極度に達する。けれども生活は現實である、人口は憂うべき率を以て年々に増加して來るのである。是非とも吾人は根抵に於て此の生活の保障を世界の競争場裡に立つて得なければならぬ。然るに、世界の全景を見よ、プロ、ジャバンの空氣は何處に漂うて居るか、見渡すところ、日本は八方塞り窮地に立つて居ることを自覺せざるを得ぬ。

上下共に眞面目なれ

日清日露の兩戦役に於ては、日本人が自己の當然の權利を主張して、兎に角、之れを獲得するの結果を得、而して、之れに伴つて、次第に蕃殖しつつあつた其の人口に

對し、生活の保障を得るの道が開けた。即ち、其の増加人口に正比例する生活の保障とまでは言ひ得ぬけれども、兎に角、其前よりも生活の安定を得て來たのである。けれども、今回の世界戦争の結果はどうか、英米兩國こそ經濟的に世界に於ける最も廣濶なる領土を分有するに至つたのに對し、我國は、僅かに南洋の一小群島にして、而も、何等、天然の富だになき猫額大の土地を委任統治として分たれたに過ぎぬ。其の結果より見れば、日本の陸海軍は、實際、犬骨を折つたに過ぎぬ。加之、己に併合したる朝鮮までが動搖し、脣齒輔車の關係にある支那も亦た排日運動に其手を休めぬ。更に、西比利亞邊にも排日の感情が漲りつつある。而して、遙かに、太平洋の彼方の米國には、排日運動が依然たるどころか、近來、益々火の手を擧げて烈しくなりつつある。此くの如くにして、吾人は、抑も何處の地に、吾人の生活を保障し得べきか。神は地上の動物を悉く生育して、何れにも其の天壽を全うせしめんと謀り、空飛ぶ鳥も野を走る獸も、皆な生活の保障を得て居る。然るに、獨り、我が大和民族のみ、此の大なる地球面上に生活の保障が與へられぬとは、情ない限りでないか。今日は、

實に、容易ならぬ時代である。日本の危機である。然らば、今日こそは、實に、神武以來、初めて爲すの一大決心を爲さねばならぬ大切の時機である。我が七千萬國民が今後五十年なり七十年なり、乃至百年なりの生活の保障が、少くも鞏固に爲り得るだけにするには、如何やうにす可きかに就いて、一大決心を爲さねばならぬ時機になつたのである。

然るに、紳士と謂はるるもの又は局に當る者から初め私利を營み、國家全體の安寧、國民全體の幸福を第二位に置いて考へると云ふが如きことで何うするか。上の爲すところ下これに倣ふことの早さは、置郵して命を傳ふるよりも急である。善德を見て之れに倣ふと同じく、惡德を見ても亦た之れに倣ふのである。否、惡德の方が却つて一層敏速なのである。それ故、在上者の德は、最も、明々、日月の如くならざる可からざるものである。假初にも、其の人格の上に疑惑の雲の懸るやうの人物ではならぬのである。然るに、今の當局者の心がけは果して何うであるか。我輩は一國風教の上から見て、慄然として怖れざるを得ぬ、當局者は、一個の仕事師では無い。従つて、德

が缺けてはならぬ。若し、其德に瑕が現はれたならば、一日も其位に安んずるを許されざるものである。我輩は、此點に就いて、甚だ、現代に遺憾が多い。願くば、上は大臣より下は屬僚に至るまで、而して、一般國民を擧つて此際特に眞面目に國家の前途について憂慮して貰ひたいのである、重ねて云ふ、今日は八方塞りの時代である。而して、此の時代を切り抜けるには、何んとしても、國民全體が利己心を制して、社會本位にならなければならぬ。

一一、日本に青年無し

撥亂反正の大活動は

いかにして行はれるべきか
吾等が力をつくさねばならぬ
四島 剗するべきなり

伯樂一たび冀北の野を過ぎて馬群終ひに空し、馬なきに非ず、良馬なき也。との語は事古りたれども、其の語の教ふる眞理は永久に新しい。其の眞理を移して語れば、日本に青年なし、即ち、青年なきに非ず、青年と稱するに足る青年なき也といふこと

伯樂一たび冀北の野を過ぎて馬群終ひに空し、馬なきに非ず、良馬なき也。との語は事古りたれども、其の語の教ふる眞理は永久に新しい。其の眞理を移して語れば、日本に青年なし、即ち、青年なきに非ず、青年と稱するに足る青年なき也といふこと

伯樂一たび冀北の野を過ぎて馬群終ひに空し、馬なきに非ず、良馬なき也。との語は事古りたれども、其の語の教ふる眞理は永久に新しい。其の眞理を移して語れば、日本に青年なし、即ち、青年なきに非ず、青年と稱するに足る青年なき也といふこと

になるのである。何を以て之れを言ふか。弓は満を引くの時に於いて放つべく、人は青年英發の氣に滿つるの時を以て用ふべきに、之れを用ひず過ぎて居るからである。古來、國家興亡の機、國民の休戚、之れに因つて定まると云ふの時に當つて、挺身難局に當り、能く撥亂反正の偉功を奏するものは、多く青年であることは、東西古今の歴史の證明するところである。

今を去ること百五十一年前、北米合衆國が英本國の印紙税の不當の誅求を動機として、志士が諸方より倔起した際には、ベンジャミン・フランクリンの五十八を最高とし、之れを次いでサミュエル・アダムスの四十二などが比較的年の多い方で、ジョン・アダムスは未だ二十五、バトリック・ヘンリーは二十八、トーマス・ジェツフアソンは二十一といふ血氣盛りの青年であつた。而して、此等を率ゐたジョージ・ワシントンには三十七で最も分別盛りといふ年頃であつたが、此のワシントンが佛國移民の專横に憤慨し、五千の壯丁を募つて抗戦した時は、僅かに十九歳の美少年に過ぎなかつた。其の獨立軍の總督に推され、英本國の攻撃軍に對して、決死の奮闘をした年が漸く四

十二、愈よ獨立の成功した年が五十一、更に合衆國の憲法が制定され、推されて大統領となつた時が五十八、未だ大いに老いたりとする事は出来ぬ。日本の今日の政界ならば、頗る若い者扱ひにされる年頃に過ぎぬ。前述のトーマス・ジェツフアソンは、彼の有名な十三州獨立の宣言文の起草者だが、其の宣言文の起草された年は、彼の三十三の時であつた。彼の米國の天地を驚動せしめた獨立の大業が、如何に此等青年の活動に負うところ多かつたかは此れを以ても知ることが出来る。

又た今を去ること百二三十年前、全歐洲を震撼する佛國大革命に活動した人物も亦た皆な青年であつた。即ち、有名なマラーは五十を以て、ダントンは三十五を以て、ロベスピールは三十六を以て、各々暗殺されて居るが、彼等が初めてルキ十六世の暴政に反抗し、扼腕して立つた頃は、皆な二十前後、三十左右と云ふところであつたので、其の渦中より大きく現れて、遂ひに佛國の動亂を鎮壓し、推されて帝冠を戴いた彼のナポレオン一世も、其のツローンの一戦で英名を轟し、出世の振出しを初めた年が僅かに二十四歳、其の修身總統となつた時が三十三、いよいよ大皇帝の榮位に即い

た時が三十四にしかならなかつた。佛國の革命は、此くの如く、皆な佛國青年の努力に依つて成されたものであつた。

次ぎには、獨逸帝國の勃興を見よ。初めはナポレオン一世の馬蹄に蹂躪されて國運殆んど危からんとし、美貌の王后自ら出でてナポレオンに會見を求め、媚態を盡くして英雄の霸心を緩和し、哀訴効を奏して歸り、僅かに普魯西の命脈を存するを得たとさへ云はれて居るが、此の積弱の勢ひを轉回して、遂ひに千百七十年の一役に、佛國をして巴里城下の盟を成さしむるに至つた其の遠因は何處にあるか、哲人にして熱烈な愛國者フイヒテが、千八百七年にナポレオンの闖入軍の軍馬の嘶ぎ鐵蹄の響きを聞き乍ら、伯林市中に彼の有名な「獨逸國民に告ぐ」の言々句々愛國の結晶たる大獅子吼を試み、繼いで伯林大學を創立し、自ら其の教授となつて青年を薰陶した。是れが獨逸國民性を涵養し、熱烈なる愛國心を涵養した根本であると云はれて居る。フイヒテの此の大講演は、其の四十四の年、伯林大學を起したのは四十七の年であつたから、そは必ずしも青年的活動とも云へぬか知らぬが、彼れによつて養成された此の大學生

を初め、其他の學生等が中堅となつて、如何に新興獨逸に貢献したかは、後日、モルトケの佛軍を粉壘して凱旋するや、自ら其の功に居らず、是れは一に教育の力なりと云つて、功を教育に譲つた一言に因つても明證される。モルトケ將軍は、當時、可成の老年であつたが、首功者のビスマルクは、年齢猶ほ五十五で、而して彼れが初めて宰相の印綬を帯びた時は、四十五であつた。以て、彼等の活動の年齢が、我國の現在に比して、幾何の相違あるかを大凡そ想像しむよ。實に、獨逸も、亦、青年の努力に依つて新興の勢力を示したものであつた。

其他、有名な伊太利の、マルコ・ポロも二十一で東洋に廻航して居るし、葡萄牙のヴァスコ・ダ・ガマも二十八で東洋探檢の途に上り、二十九で印度に到着して居る。コロムブスの米國發見の途に上つたのは、其の四十八の年で、稍や後れて居るけれども、其前に葡萄牙王ファン二世に説いて容れられず、カスブラ女王イサベラに説いて又た納れられず、轉じて、英吉利、若しくは、和蘭を説かんと焦心して居る中、遂ひにイサベラより保護金を受くるを得たので、其間に空しく歳月を徒消したからである。

凡て、此くの如く、斯やうな探險事業といふ如きことも、皆な意力體力共に充ち満ちた青壯時でなければならぬことは言ふまでも無く、而して實に其等の成功が、他日歐洲諸國が、至る所に殖民地を有し、覇權を全世界に振ふに至つた深因であることを知らねばならぬ。

獨り外國の事例を引くまでも無く、近く我國の明治維新の大業も、勿論、先帝陛下の稜威を荷ふことではあるけれども、其の皇謨を贊襄し奉つた大西郷、木戸、大久保初め、其の先驅を爲した藤田東湖でも、梅田雲濱でも、吉田松蔭でも、若しくは、橋本佐内でも、皆な二十前後から盛んに國事に奔走し初めたもので、それ等の献身的努力が、遂ひに結晶して、王政復古の大業を成就し、次いで日清、日露の兩大役にも捷ち、今日の國運を見るの礎石を据ゑたのであつた。彼等の學問をなすや、全く報國盡忠の精神が核心を爲して居るので、決して自己一身の利害より割り出したもので無く、國家の前に一身を犠牲に供するといふ決心が徹底的に固まつて居たのであつた。

青年と老人と壯老者

人の此世に在る、相依り相頼つて、互に、共同生活の安全と幸福とを増進するに勉めなければならぬもの、此の理想の爲めに國家的生活が創められたもので、苟くも、此の道理に通曉したならば、吾人國民は一日たりとも我利一邊の生活をする事は出来ず、それと同時に、吾人の共同生活といふことに不斷の注意を向け、國家の爲めには献身的奉公をすると云ふことが其の覺悟で無ければならぬ筈である。而して、其の最も純なる理想を抱き易いものは青年であるが故に、此の青年が扼腕して時局の救済に蹶起する時には、其れによつて千妖萬怪悉く掃蕩され、政弊が常に刷新されて行くのである。

昔の教育は、物質的には今日より後れて居たには相違ないけれども、精神的には遙かに今日より優り、學問と云へば必らず其れに政治思想が含まれる、即ち、當時の必讀書たる四書十卷は、大學より初めて孟子に終まるでが悉く一面より見れば政治思

想の教科書とも云へる。政治は、即ち、天下國家のことに關する、其故に維新當時の我國の青年の腦裡には、皆な一身一家のことよりも、天下國家の憂ひが先きに立つた。抑是れが能く、挺身時局の艱難を救ふべく奮ひ起つた所以である。

老年として別人でなく、等しく青年の延長に過ぎぬけれども、如何せん弦の弛んだ弓の如く血氣己に衰へて直前邁進の勇氣なく、動もすれば、引つ込み思案になる。特に、其れのみでなく、孔子も血氣正に衰ふる之れを戒むる財にありといはれし如く、兎角、財物の慾に眼先きが暗んで、眼界が狭くなり、一身の私に急にして、天下國家を忘れ易くもなる。例へば、瀦水の濁るが如く、其頭の中が錯雜して、復た青年の如く純淨なる理想のみを盛るに堪へぬ。是れ國家の廓清が常に多く青年の手に待つ所以である。否、然う云ふことの出来るものが青年であつて、左う云ふことの出来ぬものは、如何に顔を紅血が彩り、皮膚を豊肉が充たして居つても、其ものは精神的に己に青年でなく、老年である。詳に語らば其れは壯老者である。

墮落せる青年と現代

此の標準を以て現代を見たら、果して、現代に青年があるであらうか。今日の謂ゆる青年なるもの、思想を通觀するに、唯だ我利主義、享樂主義、利那主義と云ふが如きものが、彼等の脈管の多くを傳はつて居るので、學校時代に在つても、其の腦裡に夢みるところの者は唯だ黄金である。宏壯な邸宅である。別荘である。自動車である。而して、待合である。更に、妻妾の觀心を得ることである。天下國家の觀念の如きは樂にしたいほどの持ち合はせも無いもの、方が多い。偶ま、左やうな者を持ち合はせて口にするやうな者があれば、當世に迂濶なりとして嘲笑の的にならうとする。そこで、彼等は、學校に入るにも、先づ、卒業後の需用の多寡を考へ、比較的収入の多かりさうなものを選ぶ。それ以外に殆んど何等の心頭を煩はすもの無きが如く、其の標準の下には自己の天分の向ふところや、趣味の存するところのものを一切犠牲にして顧みまいとする。左う云ふ心がけが、勉めて富豪の聲になり度いなど云ふ運動をする

基にもなる。而して、偶ま、入學當時と卒業後とで世態に幾變遷ある爲めに、思ふ豈が外れて需用が思はしくないやうな事があると、其處に忽ち一種の悲喜劇が起る、其の悲喜劇には、何等、天下國家的觀念の働かぬことは云ふまでも無い。

彼等をして此くの如くならしむる所以の者を尋ねれば、成程、當世に迂濶なりといふ如く、其の當世が悪摸範を垂れて居るからである。古來、我が國民は、人類最高の諸道德の織り込まれた大和魂を以て誇として居たものだが、星移り物換り、今日の日本國民の墮落は、世界至る處に是れほど醜劣なものはないと極論される程になつた。而して、其の例證としては、東京市其他、今また新たに起つた満鐵事件など、枚舉に遑なく、其れには、官公吏、政黨員、政商、請負人などが犯罪の中心を爲して居るのである。それ丈けを見ても、現代社會の趨勢が縮圖されて現れて居る如く、久しく國民に理想視された政黨政治も、斯くまで政黨が墮落しては、甚だ馨しきもので無い何派の政黨を問はず、野にあれば咆哮して政府に反對することを能事とするが、朝に立てば忽ち血眼になつて利益の分配に狂奔する。是に於いて、或る人は今日の政黨者

流の言論を評して、是々非々主義では無く、是非是非主義、否、進んでは、是非々是非主義ともいふが、強ち無理も無い。

實に、今日の帝國議會は、斯ういふ人々の集りて、單に詭辯百出揚足取りの稽古場と化し了り、而して責任の衝に立つ大臣までも多くの場合、自己の責任に關する重要な問題にも知らぬ顔の半兵衛をキメ込み、雲烟過視する風がある。上下擧つて嚴肅なる道德的自省心の缺如せる現代は、遂ひに如何やうにならうとするのか、射利が當代の惡風潮を爲し、醫者にも仁術が流行らず、一向、藥價診察料を高くして、病人の膏血を絞らうとして居れば、官吏も、教員も、公職の貴さと風化の如何を顧みずに、増給、然らざれば、サボタージュといふやうな態度に出る。神官も僧侶も牧師も、各、皆、此くの如く、奇聲を絞つて教化めかしい事を語つても、其眼は賽錢箱、布施、寄捨金などの上にのみ閃いて居る。而して、智識の上にも、道德の上にも、是等一切の風俗を超越して高邁なるべき學者は如何かと云ふに、是れ將た遺憾ながら、徒らに賣名をこととし、虛名の下に私利を營まんが爲めに、勉めて奇論を吐いて、好奇的人心に投

じようとするの事のみ謀り、何等、其の精神に、着實に此の國家の前途を憂ふるが如き心がけが無い。斯ういふ腐敗した空氣が全社會を充して居るから、そこで一般青年の志も自ら其の感化を受けて野卑になり、腦裡唯だ自己あるを知つて、其れ以外に郷黨あるを知らず、社會あるを知らず、國家あるを知らざるに至るのである。

漫然たる國家否定の妄説

今日の青年は、眼中、國家あるを知らざるのみならず、國家を語れば直きに其れは帝國主義者だ、軍國主義者だと云つて嘲り去り、無自覺な保守的思想の如くに見做して終ふが、其れは、如何にも淺蕪な輕薄な不徹底な考へといはねばならぬ彼等の信するところに依れば、人間が單に喧嘩の爲めに國家を形成し居る者のやうに考へるらしいが、國家の主要目的は、内部の統一を完全にし、國民共同の幸福安全を謀ることが主であつて、侵略は其の目的で無い。吾人にして、共同生活を好まず、幸福安全を願はずと云ふならば、初めて、國家を否定し得やうが、其の然らずして、依然、共同生

活を好み、幸福安全を願ふと云ふならば、其れと國家否定といふことは、明かに兩立すべからざる矛盾の觀念である。青年の頭腦は、最も合理的に働くべき等の者だが、然らば、此の矛盾を何んと見る、帝國主義、軍國主義は、侵略を意味するに於て、初めて、呪ふべきものだが、併し、其れは、國家の必然の所産で無く、誤れるの甚しき者、否、自己の脚底に自己の墓穴を掘りつつあるものである。

我が國民は、猶太人、黑人等が、國家を背景に持たず、個人的にのみ働き居るが爲めに、如何に悲惨なる社會生活を爲しつゝあるかを知らざるか。自己が他を侵略せずとも、他からの侵略に備ふる必要がある、而して國家が其の任務を負うて呉れるが、其の國家の力が背景に缺ければ、吾人の生活の不安さは、想像の外にある。此の意味に於て、吾人は又た力の強大なる國家を欲するのである。此の眞理は或は内地に居る者には、左程、痛感すべき機會が無いであらうが、一たび、足を彼の無政府状態なる西比利亞に投じて見よ、我輩は、邦人の通信と、衰亡に瀕せる支那在留民との通信とを對照し見て、今更ながら、國民の背後に光る國家の威信の尊嚴さと、難有さ

とを感ずるものである。米の飯を常食として居る吾人は、米の飯の御馳走なることを解せざると同じやうな心理が働いて、左程に、平素、感じて居らぬやうだが、併し乍ら、吾人が、外には他國他民族の侮りを受けず、内には個人の權利を擁護されて、諸種の生産に従ひ、一家團欒して、日夜、安穩なる生活を送り得るものは、皆な是れ國家の賜である。之れをしも否定するならば、其れは自ら自己の生命を呪詛するもの、聲である。思慮ある國民は、而して、就中、青年は、此點に就いて、十分潛思黙考した上にも反省又た反省すべきである。

今日、我國は、世界の五大國の一に列し、國家の威信は、大いに外に加はつたと云ふけれども、其れは、外形であつて、熟ら實質を考ふるに、外交も、内政も、軍事も、實業も、其他何れの方面を見るも、いづれも全然行き詰りの状態である。斯く言へばとて、我輩の此の露骨な語は、決して、現内閣諸公に對する痛撃でも無く、従つて、其の責任を問はんとする者でも無い。立憲政治の今日にあつては、内閣は國民の地盤に立つものと、少くも其の制度の上より理解せなければならぬ。従つて、現代政治は

國民精神の反映であると思ふべきであらぬ。故に、其の政治の上に責任を問ふべき者があるならば、先づ、第一に、其の責任は、之れを國民に問はなければならぬ。而して、其の國民の中に、最も用ふべきは青年であり、而して歴史的に回顧するも、常に撥亂反正の快手腕を揮ふものは青年であつたことを思へば、吾人は茲に先登第一に其の責任を、我が全國の青年に問はんと欲する。然るに、此の責任を問はるべき青年の状態は如何、眞に上來説き來つたる如き状態である。實に、無氣力なサブレンツツブの結晶である。是れ、我輩の、敢て日本に青年なしと喝破し、長嘆し大息する所以である。而して、其れは決して過言では無い事を確信する。若し、一人なりとも、我輩の此の矯激の言に憤慨するものがあらうか。宜しく、立つて大いに青年らしき行動を執り、地の一角から、青年的氣概を發揚して貰ひたい、之れは、我輩の欲するところ、其時に至つて、此の矯激の喝破を取り消すとも未だ遅しとせざるものである。

二、山野の跋渉を國技となせ

宇宙間の大活氣の根本

凡そ、天地間に存在する萬物は、一として靜止して居るものは無い。總て皆な是れ新陳代謝をなしつゝあるものである。佛教に云ふ無常といふ言葉は、此の宇宙活動の狀を云つたものに外ならない。此の釋尊の活動的精神を、彼等僧侶等が誤つて、お布施を取らんが爲めに愚夫愚婦を欺き、唯だ未來の生活のみを説いて、現在の實際には觸れないやうにした。だから、無常といふ言葉そのものが、消極的、悲觀的のものとなつて、遂ひに『無常を告ぐる鐘の音』といつた風に、無常を無情と通はせて、同じ様に用ゐられるやうになつた。しかし此等は僧侶の誤りであつて、無常は其んな消極的なものでは無く、宇宙の大精神、宇宙間の大活氣の根本なのである。

即ち、無常とは、常に變化して行く事、新陳代謝を意味する。さうして、此の無常

は、宇宙萬物の根本でなければならぬ。何故かといふに若し此の世界に、無常、即ち、春夏秋冬の推移なくば、萬物は成育する事が出来るであらうか。春が有常であれば、云ひ換へれば、年中春であつたならば、夏や秋は來ないであらう。従つて、又た總ての果實といふものは成熟しない譯ではないか。無常なるが故に、春が來り、夏が次ぎ、秋になつて、春咲いた花が果實を結んで茲に收穫が得られるのである。

青年はエネルギーの根本

而して、我が青年は又たエネルギーの根本である。即ち、天の變化は天のエネルギーの根本であるから、常に萬物は新陳代謝し、春は花咲き、夏は葉が茂るのである。青年は、例へば、新陳代謝の最も烈しい花咲く春の如く、青年期は萬物が發達する第一活動機である。無常てう言葉は此等に最も能く現はされなければならない。無常は全で凝滞しないことを云ふのである。水停滞すれば苔を生じ、三尺流るれば清水を生ずといふことは、常に活動すれば結果を現すことを云つたものである。又た古い諺

に『今日怠りて明日ありと思ふこと勿れ』と云はれる如く、世界の萬事萬物は、時々刻々に移り行き、其處に又た進歩が生まれるのである。即ち進歩は無常の中に生まれるものである。閥族乃至少數政治等は澁滞あるが故に生ずるもので、常に移り行き、進歩したならば消滅すべき筈である。要は唯だ無常に進歩して行くことである。

青年は、宜しく、古き惡風を捨て、改進に向はなければならぬ。例へば、農業に従事する者は、米の作り方、將さに行はれんとする種苗、插苗法の改良、施肥の方法等を初めとして、養蠶、茶作、果樹乃至草鞋の作り方等の副業に至るまで、總て常に新方法を以て改善に向はなければならぬ。實業に従ふ者は、從來に缺けてゐた我國の實業道德を向上せしめることは肝要なことである。是等全般に亘つて、無常の改良進歩を謀つて行くところに、其の市町村の改進は綜合されて現はれて行くので、憲法精神の正當に行はれ行くのも、無常に進み行く青年等の進歩によつて望まれ得られるのである。四時の中に春が發育の第一期である如く、青年は人生に於ける社會教育上の第一期である。されば常に澁滞せず遲疑せず無常に奮勵して、春の種を蒔いて行か

ねばならぬ。そこに、青年が完全に成育し、實を結ぶことが出来る。總ての行政、憲政、自治は青年によりて蒔かれ、青年の手に依つて刈られるのである。

國家の眞の確實な統一は

青年は斯くの如き重大な意味を持つて居るものであるから、青年が、個々別々になる時は、國家も又た個々とならざるを得ない。國家の眞の確實な統一は、青年の統一に俟たなければならぬ。孔子は『家整へて國本立つ』と云はれたが、此の意味に於て今日では『青年團整へて初めて國本樹立つ』といふことが出来る。茲に一言注意すべきことは、余の謂ゆる青年團なるものは、内務省の云ふやうな狭い範圍のものに拘束はしないことである。假りに青年團と云はうと、校友會と云はうと、其の名稱には捉はれない。唯だ市町村の青年が統一されて國家の根本となるものを指すのである。故に、要するに、國家の基礎は青年に在りと云ふのである。そこで、青年團に望むことは、青年團の模範をとるのに何も、獨逸では不可い、英米だから好いと云ふ風で

は不可い。要は其れ等の一國にのみ拘泥する必要が無い。明治大帝が長くも五ヶ條の御誓文に宣はせ給ふた如くに、常に知識を廣く世界に需め、萬機公論に決すべしといふ精神は、世界に卓絶した日本的デモクラシーである。青年は、宜しく此の立脚地に在つて、世界を知らなければならぬ。たとひ、如何なる山間僻地の片山里に住む青年でも必ず目を世界に著け、世界的知識から自己の立脚地を定め、各自の職業を營まねばならない。廣く世界の大勢より日本の前途を考へ、自らの職分につれて其處に生ずる無常のエネルギーを湧出させ、恰も、地球に對する無常の太陽の大活氣と共にして、自らが宇宙の大活氣となるならば、此等の青年が相集つて我國の一大エネルギーを形成するであらう。斯くエネルギーの中心となつて、無常に發展して行くことが青年の天職、即ち理想的の青年團である。

其の實驗的方面については、孰れ又た改めて述べようと思ふが、體育、心育上に於て、日本は日本特有の方法を持つてゐる。ところが一時日本青年團は、獨逸に範をつたことがある。之れは獨逸が秀で、居たからで、長所があらば、何國からとつても

可い。米國は多く宗教的に統一されて居るが、全米を通じては野球が國技である。英國は蹴球である。之れに對して、日本では、劍、柔、相撲、特に固有の山水を利用して、山野の跋涉、水泳等を以て、大いに心身を鍛ふべきであり、之れを以て青年の統一を圖るべきだ。

一三、一滴の血も値あらしめよ

後手を打つ日本の外交

日本の外交は、砲烟が消えてから初まり、英米等の外交は、未だ砲聲が響かぬ前から初まる。我輩の實驗したところによるも、曾て青島戦役に我輩が王哥庄峠の麓に居た時のことであつたが、英のパージスト少將及び其の幕僚等が、我軍の後から上陸して我輩の處へ來り、青島に向ふ進路の交渉をした。それは、王哥庄峠を超え、柳樹臺を経て、青島に進む線を選定して、其れを英軍の進路と爲さんと欲したものであつ

たが、後に歐洲戦争で陣没した參謀長某及び、其の以下の幕僚が、未だ一語も發せざるに先だち、意外にも、其れに同行した軍人ならざる領事館からして其のやうな申込みをやつた。併し、此の進路は我輩の進路と決めたもので、他に譲ることの出来ぬものであつたから、我輩は彼れに説いて『此頃の大降雨で道路が破壊し、車輛の通過が困難だから、其れを棄て、他の道路を選んだが宜からう』と云つたが領事は其れを承知しない。『私は今迄、青島在勤中、獨軍と一所に此の王哥庄には度び／＼野外演習に來て居り、車輛の此の道路を通じ得ることは夙に實驗して居る。それ故、是非に』と云ふ、即ち、是れに依つて、文官なる領事が、外交官として奉職し居る間にも、軍事は勿論、實業其他に亘る一切の材料をまでも能く注意し、實驗して他日有事の日に供するの準備を爲して居たのであるといふことを悟つた。我輩は、實に、此の一外交官がバナージスト將軍を差し措いて、外交的伎倆に訴へ、我が進路を奪はんとしたことに敬服して己まざるものである。

又た青島開城の後に、第一番に最も便利なる獨の砲兵々營に入つたものは英軍であ

つたが、而も、斯く敏捷に此地を選定したものは誰れかと云ふに、矢張、其の領事であつた。是等は些事のやうではあるけれども、凡て外交官なるものが其の軍隊を利用するに抜目の無い一事は之れを以て證すべく、吾人も亦た宜しく學ぶべきであると信ずる。

巧みなるかな英の外交

今回、歐洲戦争初まつて以來、英米の取つた處置は、常に軍隊を使用したか、其の結果を如何に結ばしめんとするか、軍隊の流した血を如何にして本國の發展の肥料と爲さうとするかと云ふことに就いては、實に周到なる深遠なる計畫を立て、希望を含ましめて處置して行く。例へば、千九百十四年に、佛國白國の方に最も大なる救援を要する時代にも、世人が見て沒交渉と爲す如き南亞の獨領に向つては最大の力を盡くした。又た土耳其方面では、ダーダネルスの攻撃の如きに、比較的多數の軍隊を送つて居つた。是れは、實に、英國の外交が、始終劍の先きに活躍して、然る後に、何物

かを把握せんとする着眼に因るもの、換言すれば常に外交に因て自國に有利なるべく巧みに局を結ばんが爲めに、先づ軍隊の血を流さしめるのである。即ち、英國の一兵卒の血と雖も、無駄に流されることは無く、其れは必ず大英國發展の肥料になつて行く。現に、南亞のケープタウンより埃及のカイロに通ずる縦貫鐵道、及び、蘇士の海路と連繫して亞富汗より印度のカルカッタに通ずる鐵道も、兼ねての希望通りに、已に着手することになつて居る。米國の如きも此度大戰に參與するまでには、砲聲の前に巧みな外交をやり、已にアラスカ、ペーリング、西比利亞を聯繫する鐵道計畫の如きは、宣戰布告前に於て、其の外交的準備が盡く成り立つて居つた。

米國の外交も亦た然り

英米の外交と軍隊との關係を形容して見るならば、外交を腹巻とし、軍隊を衣服とする、即ち、主觀的に先づ外交の準備を爲して、凡ての利權獲得を企て、それから客觀的に軍隊を外に利用するのである。それ故、或る場合には、大いに世界の耳目を眩

耀する如き正義人道を唱へて進むやうであつても、其の腹の中には、千萬無量の慾望が隠蔽されて居るので、其の慾望を援助しつゝ、正義人道が唱へられるといふ事もあるのである。

其の近い例を擧げるならば、初めに日米各々七千の兵を出して、チエツクスコープツクを助くる約束を爲したのであつたが、其のチエツク、スロープツクが尙ほ三四萬西比利亞に残存するに拘らず、米軍は任意に撤兵して終つた。是等は少し露骨であるけれども怪しむに足らぬ。利害の點から考察するならば、單に、チエツク、スロープツクを救ふ爲めに、米人の血を流す必要はない。即ち、米國の一兵をも其の爲めに殺す必要は無いのである。何んとなれば、其れが、何等、米國發展の肥料とならず外交上に何等の收穫が無いからである。それを自覺するに及んで、初めの約束を反古にするも顧みるところ無く、さつさと兵を引き上げたのである。其處に固有の米國主義を見るべく、米國主義としては當然のことである。

又た、其の撤兵宣言の時機の如きを見るに、實に巧妙に外交の機微を握つて居る。

即ち、過激派の勢力が盛んになり、此上、猶ほ迂濶すると、内政干渉の誘で排斥されるに至るといふ呼吸を察したものだから、扱てこそ、其の排米運動の起きぬ中にと、最初のチエツク、スローブツク救援の聲明の如きは忘れたるが如くに、直ちに撤兵の宣言を爲したのである。茲に、米國の外交の機略を窺ひ知るべきである。

我が外交は機略を缺く

然るに、我が日本はどうであるか、米兵撤退の後に獨り残つて、何等か利せんとする所でも有るかの如くに見られて恨まれるといふ大なる不利を招き、甚しきに至つては、遂ひに彼れより撤兵を要求されるにまで及んだ。何んたるへまな遣り方であらうか、斯やうな巧妙な外交手段に至つては、日本は、到底、英米に及ばぬ、及ばぬからとて斷念する譯には行かぬ。少くも、英米に對抗し得る丈けの外交上の技倆を振ふやうに勉めなくてはならぬ。例へば、西比利亚に於ける當面の問題の處置に就いて見よ。恐らくは我軍の戦病死者を通計したならば、數千人にも達して居るであらう。此の忠

勇なる我が軍隊の血、我が國民の鮮血を、唯だ無意味に流させて、其れで相濟むと思つて居るか。血を流すならば、それだけ、是れが國家の名譽なり威嚴なりに又た國民の幸福なり安全なりに、貢獻する所がなくてはならぬ筈である。然るに、今日の狀態では、嘗に、吾人、全國民の幸福安全に資することの見る可からざるのみならず、却つて逆に我が國家の名譽をも傷け、威嚴をも損せんとするが如きのハメに臨んで居る。日本の軍隊は正義の軍である。人道の軍である。然るに、其の結果は、此の正義人道が、何等、他國民の腦裡に深く徹底し、印象されるに至らずして、却つて、何等かの禍心あるが如くに解せられて已まんとするは詰らぬことでないか。茲に於て我輩は我が震ケ關の外交手腕に遺憾がある。此際、我が同胞の血の價を國家の名譽、威嚴、國民の幸福、安全と結合せしむるやうに、何等かの機略が有つて可なるべきである。時には、レーニンあたりが、或は、絶えず露國に起りつゝある或る黨派が、對手の誰れたるを問はぬ。何等か其れらに對して、換言すれば、露國民に對して自己を説明する如き、十分拔目なき方法が試みられさうなものである。

今日まで我國に於て、英米に學ぶ所があるならば、十分、我が軍隊の流した血を價あらしむる方法もあつたであらうと思ふけれども、残念ながら我が國の外交は、常に他より先手を打たれて、義勇公に奉じた我が帝國軍人の血を、空しく異域の地に流さしめるに終るのである。此くの如きは、固より我が外交當局者の、直接に責めを負ふべきものたるは言ふを待たぬけれども、其れと同時に、獨り、一般の政治家有識者とのみ言はず、國民全體に、今、少し、外交的智識を長じ、思慮を廻らすに至らんことを切望する。

一四、盛んに經綸を行ふ可し

此の心的準備を以て

明治神宮は、唯大和民族だけが拜す可き神では無い。世界が眞に平和を愛するやうに成つたならば、歐米人と雖も、亦必ず明治大帝の御遺徳を敬慕し奉つて、參拜すべ

き筈である。明治大帝は、其の五ヶ條の御誓文に於て、『舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし』と仰せられて居る。此の御聖教は、獨り日本人のみの守るべきもので無く、實に世界各国國民の共に眷々服膺すべき大切のもので、此の叡慮にさへ従へば、此世に何等人種的若しくは、宗教的偏見などのある可きでない。現に此の間東京市で歐米人の多數に依つて開催された第八回世界日曜學校大會に於いて、人種的差別撤廢の決議を見たるも、何等か明治大帝の御仁徳のインスピレーションが、彼等の間に反應したのでは無いかと考へる次第である。

明治神宮成るの今日を機として、聖徳の奉頌に伴ふ實を擧げるを要する。其の爲めには、上下一致、其の大帝の御誓文に基いて、一切の活動の立脚地を定むるを要する。特に、今日は島國根性では駄目である。そこで、個人として修養を怠る可からざると同時に、大和民族として、又た日本國民としての、國際的修養を爲すことが、最も必要なる時勢に進んで來て居る。彼の同盟國の間柄なる日英關係は固より、更に日米關係、日支關係の如きも、此の御誓文の御趣旨に則り、上下心を一にして、盛んに經綸

を行ふに於ては、何事か成らざるものがあらう。若し其れが成らざる如きことが有るならば、是れ吾人、日本國民の誠心誠意が、未だ先帝の御英靈に觸るゝまでに充實し發揮し得ないからであると信ずる。明治大帝は、

世の中の人におくれを取りぬべし

進まん時に進まざりせば

と仰せられ、畏くも、我が六千萬國民の向上心に鞭ち、勇氣を附けさせ給ふて居る。今や明治大帝は、神去りまして、御姿を此世に留めさせては、在らせられぬけれども、此の吾人國民の前途を憂へさせられる大御心は、其儘此世に留まつて、永く吾人の行動を御守護遊ばすと同時に、御照鑑遊ばされるのである。それ故今日明治神宮が成り立つた。だから御目出度いと云つて、唯だ物見遊山かななどに出かけるやうな心持ち、で漫然宏壯雄大なる神宮に向ひ、参拜した丈けでは駄目である。先づ第一に、此の神宮に参拜するものゝ心的準備からして、定めて懸らなくてはならぬ。夫の天照大神が皇孫瓊々岐命に、神器を御授けになる時に、「此鏡を以て吾が神靈となし、猶ほ吾れを

祀るが如く祀れ」と仰せられて、御遺訓を垂れ賜うて居るが、其の御遺訓に現はれた御精神に従ひ奉りて、吾人も明治神宮を拜するに先ち、先づ吾人の心裡に此の寶鏡を懸けなければならぬ。而して、其處に畏くも、明治大帝の御高德が宿らせられて居るのである。此の心的準備を以て明治神宮を拜し奉ると同時に、此心を以て吾人日本國民の一切の觀念の根元とせなければならぬ。換言すれば、明治神宮淨地即是道場也とするのでなくてはならぬ。

英明の先帝と輔佐の功臣

元來明治維新の大業は、上に明治大帝の如き、不世出の聖天子が在し、其下に幾多の、誠心誠意、國家人民の爲めに献身的に報効した忠臣義人があつて翼賛し奉つた結果である。其の人物の一二を手近いところから、擧げて例證するならば、故伊藤公の如き、又た故福澤諭吉先生の如き、現存者に於ては山縣公、大隈侯の如きが其れで、就中此の公侯は、今尚ほ矍鑠衰へざるの意氣を以て、國家の爲めに不斷に奉公の赤

誠を示して居られる。山縣公は、此間、斯ういふ歌を詠まれた。

君の爲め世の爲めつくす誠のみ

老いたる身にも猶ほ残りけり

又た小田原の檣ヶ岡の別邸にて詠まれたものに、次ぎの如き一首がある。

今日よりは老の務とすめらぎの

神に朝夕仕へまつらん

此等の歌にも、其の精神の發露が分明である。故伊藤公の如きも、亦た是れ全身忠義の二字で凝結つて居つた人で、「日本は、金匱無缺の皇室を中心として政治を施すゝるのみ、然らざれば、到底、國民の一致を保ち、國運の伸張を圖る能はざるなり」とも語られ居るところに、其の確乎たる信念の所在を知る可きである。公は、此の信念に基づく熱誠からして、其の經世的技倆を振ふに當り、嘗に人力を盡くされたのみで無く、更に神明にも祈願を籠め、其の加護を求められたのである。即ち何か大事といふと、直ちに伊勢大廟に參拜して居られる。其の明瞭に記憶され居るものを擧げれば、

明治初年に、皇太子殿下の御健康を祈る爲めに、一度參拜されて居る。又た明治三十五年十一月、政友會總裁と爲り、初めて政黨的活動を爲さんとするに際して參拜されて居る。それから、同三十七年二月十四日、即ち日露開戦の第四日目に、大禮服を着け、戦勝と豊年とを祈る爲めに參拜された。其時山田より時の總理桂公に贈られた詩は斯うである。

臣是忠狂世勿疑、奉君孜々豈知疲、

虚心惟願神盟鑒、披瀝丹青不自欺、

次ぎには同四十年九月に、時の皇太子殿下、即ち今の今上陛下の御渡韓を奏請して歸らるゝ時にも參拜して居られる。是れも公が、殿下の御無恙を祈られしものであることは自ら明かであらう。其の次ぎには同四十二年露國に赴く前に、最後の參拜をして居られる。其時の作に次ぎの如きものがある。

凝思積慮動成烟、憂國忠君是我天、

誰道人生無百歲、精神一貫即千年、

此詩は、公の心事を傳へ得て餘りあるものがある。今日我が國民は、此の伊藤公の至誠に對して、果して如何の感があるか。

偉大なる福澤翁の力

伊藤公の、終始朝を離れざると反對に、福澤翁は、終始野に止まつた人であるが、しかし乍ら其の赤誠、國家民人に盡くすの一段に至つては、翁の一生の功績は、故伊藤公を初め、其他現在の山縣公、大隈侯にも譲らざるものがある。翁は其の主唱して已まなかつた民権論の中に、今日盛んに叫ばれて居るデモクラシーの眞義を含ませて語り、日本國民をば世界的大勢に順應せしめて、新しい文化に導かれた大偉人、大卓見者、大豫言者である。而して、其の教化運動のベースとして、慶應義塾を創め、其の基礎をば、形而上形而下の兩方面より形成したところの人である。翁は『學問のすゝめ』『西洋事情』等の著書を公にして、我國の文化の上に、新風潮を導き入れた人であるが、併し漫然たる翻譯的輸入を勉めた人で無く、能く其れを消化して、採長補短

の實績を擧げることと勉められ、當時でも亦た、今日デモクラシーの眞意を誤用して一種の弊害を作らんとする者あるが如く、自由思想といふことに誤解を抱き、誤用せんとする者ある傾向を戒めては、『自由とのみ唱へて分限を知らざれば、我儘放蕩に陥ること多し、分限を守るを要す。分限とは天の道理に基き、人情に従ひ、他人の妨げをなさずして、我が一身の自由を達することなり。自由と我儘の界は、他人の妨げを爲すと爲さざるとの間にあり』とも云はれて居る。又たデモクラシーの要旨を示しては、『天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず、四海同胞なり、互に其の幸福を祈るべし。理の爲めには亞弗利加の黒奴にも恐れ入り、道の爲めには英吉利、亞米利加の軍艦にも恐れず、國の恥辱とありては、日本國中の一人も残らず、命を捨て、國の威光を落とさざるこそ、一國の自由獨立と申す可きなり』と云はれ、更に皇室中心主義に對しては、今日の誤れるデモクラシーの説の入り來るべきを豫言し、尊王論を著して、『日本國民の生存上、日本國の存立上、即ち日本國の組織上、尊王の要素あり』と極言し、『皇室中心主義は日本人の固有性に出づ、若し日本にして、皇室の尊嚴神聖

を缺損すること有らば、日本の社會は、恰もアークライトの消えたる如く暗黒となる」と断定され、尙ほ日本は「家族制であり、皇室は本家本元であるから、別に名字が無い。日本の天皇と稱へ奉るのみ」と稱し、歐米列國に卓越した我が國體を、民族生存上必要の根本的機關なりとし、之れを科學的に組織的に示して居られる。特に立憲政治の運用上には、多大の注意を拂ひ、次ぎの如き訓戒を垂れて居られる。

朋黨何唯蜀洛倫、甲非乙是漫相論、閩墻兄弟三千萬、幾個真心禦侮人、

今日政黨政治が、國民の間に信用を失ひつゝある所以のものは、謂ゆる此の結句の幾個か真心禦侮の人で、眞に國家民人の爲めに、其の利害を代表して動く者ありやが疑はしく、政黨員の眼中、唯だ自己所屬の政黨の利害あるのみを爲すところにある。翁の此詩に對して、果して、幾何人か、能く正面して立つことが出来るか。

翁の功勞の顯著なることは、今我輩が絮説するを要せぬ。即ち明治三十三年五月九日に、田中宮内大臣より、「夙に泰西の學を講じ、校舍を開きて駿才を育し、新著を頒ちて世益に資する三十餘年、其効績尠からず、因つて思召を以て金五萬圓を賜ふ」と

いふ聖旨を傳へられた事が、何よりも之れを實證する。翁は伯爵に叙せらるゝの内議のあつたのを拜辭し奉つたのだが、此の恩賜金は難有く拜受して、之れを直ちに慶應義塾に寄附された。即ち今日、校運の隆盛を誇りつゝある慶應大學は、此翁の靈的存在を無窮にするものである。之れを要するに、福澤翁は凡て西洋の學問を日本化し、日本人としての立脚地に本づきて、獨創的の意見を吐かれたものである。此くの如きは、今日の我が博士學者などいふ人々の最も大いに學ばねばならぬことと信ずる。翁の頭腦は、恰も非常な高熱度を有する熔鑛爐の如く、如何なる泰西の思想も盡く其中に熔化し去られるのである。即ち、カントの哲學であらうが、マルクスの唯物的經濟論であらうが、乃至、クロボトキンの共產主義であらうが、皆一たび、其の腦中に收まれば、渾然熔化され、其中から精粗淳漓が選り分けられ、其精なるもの、淳なるものゝみ、日本化されて現れて來るに相違ないのである。實に自主的大和民族の特性を學問上に發揮するを勉めたものが、此の福澤翁である。假令歐米の學徒であると、しても其れが爲めに決して歐米の奴隸にはならぬと云ふ、飽くまで日本男兒的本領

を學者として見識の上に徹底的に發揮されたのが福澤翁である。

凜乎たる翁の氣節

福澤翁は、尙ほ政治上にも、大いに力を致され、明治十一年、十四年といふまでの間は、特に政府の最高顧問たるの資格を以て諮問に答へられもした。其の政治的關係で最も有名な出来事は、明治十二年冬、獨逸皇族フリードリヒ親王の來遊の時に、親王が吹田の御獵場で、犯則的行爲をなした外交事件についてある。即ちフリードリヒ親王が微行して、禁獵區域で獵したから、巡査が之れを咎めたところが、之れを憤つて、獨逸公使が、我が外務省に突つ込んで來た。時の外務卿井上馨は、非常に狼狽し、其の巡査並びに他の關係ある官吏をまで免職して獨逸公使に謝罪した。是れが福澤翁を非常に憤激させた。そこで、一書を裁して、井上外務卿に寄せられたのが左の書東である。

(前略)此度、吹田の一條、誠に言語道斷、皇孫は明かに我が國法を犯したるに相

違なし、微行したる皇族を其の皇族と認めざるは固よりあるべき事にして、警吏、巡査、毫も罪すべきなし。然るに、彼の請求は、自ら不犯日本國法の稱をとり、次いで我が地方官及び警官の『バルドル』を促す無法無狀と云ふべし。尙ほ甚しきは、吹田の戸長を呼ぶことは何事ぞ、戸長は吹田人民の名代にして、吹田の人民は我が天皇陛下の臣民なり、日本皇帝の臣民が、謂れもなき外國の皇族に平身低頭するとは、取りも直さず亡國の慘状といふも可なり。昔年、英國人が印度地方の酋長輩を嚇したる筆法に異ならず、我が國權を損する舊幕府以來、未だ之れより甚しきもの無し。最初、彼れより無法の請求をなしたる時に當り、何故に左の如く答へざるや。

吹田銃獵の一條、平人の所業ならば、固より國法に背く者也。然りと雖も、獨逸皇孫は、特別の事にして、敢て答むべきに非ず。唯だ恨むらくは皇孫微行し給ひ、且つ通辯の者をも召し連れられざる爲めに、警察官吏、皇孫たるを認むる由なかりしを如何せん。大阪府廳來臨の時も亦た然り、我が日東の人民、素朴なりと雖

も、皇孫を知つて誰れか之れに無禮を加ふる者あらんや。其罪誰れ知らざるにあらのみ。(下略)

斯くの如く答へて何んと申すべきや、尙ほ其の立腹を慰むるに足らずして、之れを在日本の公使に訴へ、又た本國の政府に報じ、政府怫然として怒り、再三再四、掛け合ひの後、遂ひに我が日本海に軍艦を差し向け、戦争に及ぶべきや随分御相手に可罷成、されども軍艦までには、餘程縁の遠きことならん。否、右の事實を皇孫より其の父祖に報じたらば、却つて叱られる事ならんのみ。又た、或は方今條約改正のこともあり、兎角に彼れの氣配を損せざる方、然るべしとの答へもなきに非ずと雖も、畢竟、無益の空論と云ふべし。彼れの好意を買はんとして、我れより會釋すれば、唯だ徒らに、彼れの傲慢を増長せしむるに足るべきのみ。條約改正のことは、今度の一舉に、今後の不都合を増すも減すること無きや明かなり。抑も、皇孫は渡日以来、亞國の「グラント」と其の接待振りの異なるを憤り、到底和す可からざるものなり、今にして考ふれば、舊府知事楠本などが「グラン

ト」の接待とて、漫りに騒ぎ立てたるは、間接に困難を醸したる輕舉と云ふべきのみ。其れは扱て置き、到底和す可からざる者に對して、其の厚意を買はんとするは策の拙なるものならずや。唯だ程よく取り扱ひ、勉めて速かに送り返すの策あるのみ。右は事の既往に屬するものにして、今より追ふべからず。今日の謀を爲すに、大阪府の知事と外務の宮本と、此の二人の職を免じ、今度の一條につき警察吏を罪し、吹田の人民を過らせたるは、全く此の二人の不取計に出でたるものとして、其罪を表し、右警察吏の免じたるものを前職に復し、吹田の人民にも其旨を諭したらば、之れに因りて、日本政府と日本國は無疵のものたるべく候。或は事を一重にするには、一時外務卿が免職も可ならんと思へ共、若し眞の免職になりては、目下大切なる條約改正の事あり(以下略)

此の書面は、小林林之助氏の所藏に係るものである。以て如何に此翁が理義を明晰にし、國家の體面に關しては、凜乎として假借する所なき氣骨を持たれたかを見るべきである。而して、之れと同時に、慶應義塾の學生も、亦た憤起し、國論を喚起すべ

く、大々的示威演說會を開いた。此翁の遺書に對して、犬養毅氏が跋を書いて居られる。

(前略)塾中諸子皆切齒、急開ニ演說會、痛ニ擊當局、予當時甚卑ニ演說、以爲ニ口舌末技、而及レ聞ニ此事變、慷慨不能レ已、馳到ニ演說館、援下引大岡越州捕ニ紀侯世子ニ事、以攻ニ當局、予之演說者以レ是爲レ始、

是れで見ると、當時の學生の意氣や推して知るべく、而して、其れまで演說を以て口舌の末技として、罵つて居た犬養氏が、今日、演壇の勇將となるの素因が、不思議にも其時に、初めて作られたのである。犬養氏は、此跋を大正八年夏に書いて與へられたのだが、當年の意氣、今尚ほ有りや否や、特に犬養氏が此跋を外交調査會の一委員として、書かれた者なるか否かを問はんと欲する。それは兎に角、以上述べたところによる丈けでも、明かに此の福澤翁が野にありし、明治の大元老の一人であつたと云つても差支へなく、特に世が次第にデモクラチックになりつゝある現代に於て、先覺者としての翁の功績、實に没すべからざる偉大なものである。

彼れも人なり我も人なり

要するに、吾人は、幸ひに大和民族として、此の日本帝國に生まれ、又た幸ひに大正の聖代に逢つた以上は、其の報恩の爲めに、益明治大帝の五ヶ條の御誓文を奉じ、吾人の前に偉功を立てた、右先輩諸士の忠誠に倣つて、國家に報効を謀らなくてはならぬ。特に青年諸君に對して其の奮起を望むのである。彼れも人なり我れも人なり他人の爲したる偉績の跡に、何とて追隨し得ざることがあらう、諸君は進んで、自ら頼山陽たるべし、梅田雲濱たるべし、大西郷たるべし、山口縣東荷村の百姓伊介たるべし、又た萩藩の一介の野武士山縣狂介たるべし、佐賀藩の暴れ者大隈八太郎たるべし、若しくは中津藩の貧乏侍 福澤諭吉たるべし。

明治大帝の功業は、偉は偉なり、大は大なりと雖も、之れを大帝の憂心忡々としてみらせられた深き叙慮の底を汲み奉つて考へるならば、大帝は列強對峙の中に在する現在の我が國勢を見て、決して、御安心なさるまいと思ふ。吾人の爲すべきことは、

先輩の明治維新以來今日までに爲し來れるものよりも多くして且つ大なるものである。諸君は須らく眼を全世界に放ち、皇室中心主義に立脚して、内治に、外交に、此の先帝の五ヶ條の御精神を充實し、發揮せしめねばならぬ。之れ先帝が上下心を一にして盛んに經綸を行ふべしと仰せられた御趣意に合體するものと恐察する。而して、是れが、又た、やがて、明治大帝の聖德奉頌に伴ふ必然實行すべき吾人の任務であると信ずる。是れ僭越なからず、敢て御誓文中の字面を拜借し、茲に特に此の論題を掲げた所以である。

一五、物質を超越せよ

日本の國體と歐米の國體

日本の國體は、之れを外形の上より言ふも、之れを内容の上より言ふも、此の宇宙

間に磅礴する大活氣と一致して居る。即ち地球が二十四時間で自轉し、三百六十五日で公轉するのも大活氣なれば、花紅柳綠、凡ての植物の生々繁茂するも、鳥の飛び魚の躍る凡ての動物の激々快駛するのも大活氣であるが、我が日本帝國の綿々不窮の進運は直ちに此の宇宙の大活氣と一致するものである。外形に現れたるところより言へば、神武天皇以來三千年間、萬世一系の皇室を奉戴する國家であり、内容に含まれたるところより言へば、神武天皇以來三千年間、デモクラシーの精神の充滿したる國家である。

之れを綜合して言ひ表はせば、日本の國體は、有機體であつて、無限に發展し行く生命を有するものである。即ち、草木の根あるが如く、生々化々して已まざる無限の活力を包容するものである。皇室が我が帝國を維持する中心の大黒柱であつて、源平藤橘の四家四姓、現在約六千萬と稱する全國民は皆な其れより分岐して居るもので、是れが相合拱して一家を爲すが如く、此の總和が我が大日本帝國である。天子は父母、臣民は子孫、本末の關係こそあれ、元と同一血族であつて、差別の中に無差別がある。

即ち尊卑等を異にすと雖も、我が皇室と臣民とは、決して外國に見る如き、征服者と被征服者との關係では無く、従つて其間に常に温き一脈の血液が通ひ居り、皇室が臣民を本として慈愛を垂れ給へば、臣民は皇室を中心として忠誠を勵み奉るので、此かる國體の中にこそ、日本國民が、過去現在未來に亘つて、世界中永久に類例なき最大の幸福を享受し得る素質があるのである。

見よ、如何に希臘、羅馬の古文明を誇つても、其の國家は既に幾千年の昔に消滅して、徒らに空名を歴史上に留め居るばかりで無いか、其他の歐洲諸國に於ても、又た支那、印度、其他の東洋諸國に於ても、何處に行つても、有史以來、運綿として曾て其の祀を絶たざること、我國の如き皇室があるか。一時は曇花の一現の如く、燦然花を着くる國家はあるけれども、根なき挿花の如く、或る期間の後には、脆くも凋落し終る。皆な是れ宇宙の大活氣と、其の生命を同じくする能はざる、假現的、暫有的の國家である。一時之れを其の燦然たる時に見れば、如何にも永久不滅の生命あるが如くに見えもしようけれども、土に托する根を持たぬ悲しさには、明日には凋零し、明

年には發芽せざるものである。何んとなれば、歐米其他の諸國には、眞實の意義に協へる國家は無くして、唯だ州あるのみである。米國の如きも、今は國勢隆々として、昇天の意氣あるが如くであるけれども、吾人の眼よりして見れば、猶ほ百尺竿頭に、一步を進むるを要するが如くに感ずる。即ちユーナイテッド、ステーツと謂ふが如く、結合された州であつて、未だ吾人の謂ゆる眞實の國家を爲さぬ。約一億有餘萬の國民中、獨逸系が一千萬、伊太利系が四五百萬、其他、佛蘭西系、埃匈國系が幾千といふが如く、雜然たる各種異民族の集合であつて、未だ之れを完全に統一する。脊梁骨が通つて居らぬものである。

自餘の諸國も皆な其の如くである。さればこそ現に露西亞の如きも、眼前にポリシユビキズムの跋扈を見、其の思想の爲めに攪亂されて、萬民生を安んぜざる有様を呈して居るのである。獨逸の如きも外に武を驕して帝國の崩壊を見るや、忽ち内にスバルタカスの蜂起に逢つて、國民は歸嚮するところに迷ひ、塗炭の苦を見たのである。彼等は齊しく共產主義を叫ぶ。此の共產主義は一寸聞いたところでは、或は便利の如

く思はれるか知れぬけれども、之れを實現するに於いて、果して一般國民の満足し得る幸福と安全とを、此の世に齎すことが出来るであらうか。論より證據、露國の現状は、共產主義の爲政者の爲めに、其の國民の大多數が、最も悲惨なる運命に哀號叫喚しつゝあるのである。而も其の由來するところを究極すれば、露國には眞に其の生命たるべき我が日本の國體の如きものゝ曾て存在せなかつたことが一大原因を爲して居る。物の價値は比較によつて知られる。假に我が國體と露國の國體とを比較して見よ、そこに如何に我が國體の尊嚴なるかを發見することが出来る。吾人は自ら此の尊嚴を發見すると共に又た普く之れを一般國民に痛感せしめなくてはならぬ。

西比利亞出征軍の効力

我が在西比利亞軍の出征當初の目的は、チエツク、スローヴァツクを助くるに在つた。けれども、日本としては、チエツク、スローヴァツクが無くとも、我が國家の存在上、西比利亞に兵を出さざるべからざる必至の理由があつたのである。何んとなれば、

昔は國を維持するに、外敵をば其の國境で防禦すれば足り、國境線と國防線と經濟線との分ちが無かつたけれども、今では此の三線に大なる差違を生じて來たので、従つて日本が正當に國家を維持するには、日本の國境に於て防禦するは不利である。即ち、外敵に當るには、西比利亞ならば、ウラル、少くともバイカル邊の線で無ければならず、印度洋ならば、シンガポール邊、南洋ならば、少くも赤道の南北十度内外の線を以て、防禦するの計畫を立てなくてはならぬ。此點より考察すれば、日本が已に對獨宣戰を決行した上からは、當然、陸には西比利亞方面に出兵を煩はさざる可からざる運命に迫られて居たのである。

我が忠勇なる將卒諸君は、此くの如き使命を奉じて、身を萬里の異域に勞し、或は死し、或は傷き、或は病に臥し、櫛風沐雨、日夜、奉公の赤誠を抽んでられたが、其の爲めに西比利亞の秩序と安寧とは維持され、我が國家の威嚴と信用とは、日に月に彼の國民の承認を得て信頼を受けつゝある。是れ皆な一に諸君の力である。我が軍隊は他國の軍隊と雜居して、共に西比利亞に在るに拘らず、諸君の正義人道に基き、四

海同胞の慈仁を示して、彼等善良なる露國民に接せらるゝの結果は、彼等露國民をして、我が信誼を感謝して我れに親昵し來らしめて居る。是れが、將來、日露兩國の結合に非常の力を與ふべく、此の力が、他日我が國防の上に、至大の助けを爲すべきは、今日諸君の想像以上のものがあらうと確信する。更に況んや、諸君の誠實に、廉潔に、一意職務に盡くされる状態は、普く衆目に映じ、日本軍隊の聲價は、益世界に重きを爲すに於てをやである。實に、快心の至りに堪へぬ。是れは、明治天皇の御詠に、

目に見えぬ神の心に通ふこそ

人の心の誠なりけれ

とある其の御精神を無意識の間に、諸君が實行して居らるゝに因るもので、此心の誠が先づ露人を感孚し、次ぎに世界の全人類を感孚したものである。諸君の功勞や實に偉とす可きである。

世界は益々弱肉強食

今やヴェルサイユ會議によりて、世界の永久平和の端緒を開き初めた觀があるけれども、其實、將來の世界が如何なる混亂に陥り行くかは、容易に豫想が出来ぬ。表面は孰れの國を見るも、皆な平和を口に絶たぬけれども、其實は永久平和の見究めがつかぬ如く、各國共に密かに爪牙を磨くべく苦心慘愴である。例へば、英國の印度に於ける、埃及に於ける、或ひは近く愛蘭に於けるが如き、孰れも困難な事情、困難な問題が存在するが如く、それが爲めに一日も胸を寛うし得ぬ狀があるが、嘗に其れのみならず、英國は更に米國と共に北支那に於て或る種の行動を營んで居る。又た新たにメソポタミヤ、パレスティン等を白國の委任統治權内に收め、西比利亞を其の勢力圏内に置く如き、若しくは米國の墨哥其に對する、西比利亞に於ける、其他アルメニア及びコンスタンチノールを自國の委任統治權の下に收めんとするが如き、其他佛伊の獨塊に對する領土の割取に銳意し、佛のアルサス、ローレーン二州

よりザール流域を、伊のアドリアチック海上の諸島よりヌエーメまでを、共に自國の領土に歸せしむることに成功したる如き、其他前者のシリア及びアマナを、後者のアダリアを、共に自國の委任統治權内に收め得んとする如き、一面平和の期待盛んなるが如くにも見ゆれど、一面互ひに自ら安んぜざる所ありてか、若しくは、窃かに禍心を養ふところありてか、其の孰れなるかは、固より互に胸中の秘とする所で、容易に判断し難いところだけれども、兎に角、其の外形より揣摩し得る限りに於ては、各國ともに此の歐洲大戰を最後として、未來永劫に武を偃せんといふが如き覺悟あらざるは明瞭である。否、それどころで無く、寧ろ弱肉強食といふ誠に人道上忌むべき一種の金言が、却つて益其の權威を示現しつゝある。此種の情報に就いては、吾人内地に居る者よりも、在西比利亞の諸君の方が、遙かに能く通曉し居られ、日々夜々、來るべき世界の氣勢を直感し居られることと思ふ。されば諸君は、益々國利民福の爲めに奮闘され、我が帝國、我が日本民族の存在を堅實ならしむることに努力あらんことを希望する。

遠大なる精神的慰安を

以上、我輩は、諸君に對して幾多の希望を列舉したが、此等の希望の實現に對して、更に、一事の諸君に語るべきものがある。元來、人間は物心の二つより成り立つて居るから、精神のみを重んじて、物質を輕んずるも可なりとは言はぬ。物質は精神の托するところ、精神は物質を動かすところ、兩者相待つて渾一體と爲し、此の社會に活動し得るのだから、其の孰れかの一方を偏執して、他の一方を賤視するといふことは誤りである。それ故、人間は、物質的にも満足させなければならぬことは固より論を待たぬけれども、今日の日本の國情に照らし、此の國家を安全に維持せんと欲する上から考慮するに、物質の満足を先きにするよりも、精神的の満足を先きにするこの方が、更に必要であり又急務であるやうに思ふ。成程物質の満足は必要である。けれども必要は物質の満足以盡くるもので無く、更に其の奥に何者か無ければならぬ。詳説するならば、物質の満足は、何者の爲めに必要であるかを、自ら我心に問うて見

なければならぬ。而して其の何者かを探り得たならば、其處に吾人は更に物質を超越したる、嚴肅なる、崇高なる、精神的の一大使命を感得するに相違ない。此の精神的の一大使命を感得して、後の努力を爲すに非ずんば、其の努力は眞實の努力とならぬ。諸君は此點に於て深省一番し、宗教的に自ら開山と爲つた如き、唯我獨尊の偉大なる思想を抱き、此の小なる一身が、直ちに天下の大に關する、我が一舉手一投足が皆な以て天下を救ふものであるとの、一大自覺、一大信念に立つて貫きたい。

彼の維新前後に活躍した我が幾多の志士仁人なる者の心的態度は、實に此くの如くに偉大に、此くの如くに堅確に、此くの如くに忠實に、此くの如くに熱烈なものであつた。

例へば、梅田雲濱の如き、彼れは辭世の詩に於て、此くの如く歌つて居る。

妻臥病床、兒泣飢、挺身直欲拂洋夷、今朝死別兼生別、唯有皇天后土知、と。茲に味ふべきは、結句の「唯だ皇天后土の知る有り」の一句である。毀譽褒貶は人間の事で、時の勢によりて動搖して定まらぬ。勝てば官軍、負ければ賊軍といふが

如く、世評はそれ自體に於て堅實性を缺くものだ。大丈夫の世に處する、此くの如きものに拘泥し、屈托して何事か爲し得るか、須らく其れ等を一蹴し去り、磊々落落、別に天地間の公道に基いて、我が所信を遂行すべきである。而して、此の所信は、獨り皇天后土の知るところのものであらねばならぬ。と云ふ此の意氣感情が、明確に其の一句に看取されるでないか。更に小塚原に誡首された吉田松蔭は何んと言つたか、彼れの辭世の歌には、

斯くすれば斯くなるものと知り乍ら

止むにやまれぬ大和魂

と咏んで居るで無いか。茲に味ふべきは、其の「止むにやまれぬ大和魂」の一句である。智仁勇の三道德に根蒂して、渾成された此の大和魂の命するところ、水渉るべし、火蹈む可し、又た身の苦樂、時の利不利を顧るの暇が無い。知らずして危険の地に陥るではなく、斯くすれば斯くなるものといふ、我が身の定まる運命は、之れを掌に見る如く、チャンと明瞭であるが、而かも其の爲めに遁げも隠れもすることが出来ぬ

と云ふの意が、此の三十一文字の表に、隠るゝところなく示されて居る。又大西郷と相擁して、薩摩灣に入水した僧月照は、何を書き残して置いたであらうか。

曇りなき心の月の薩摩灣
沖の波間に今ぞ入りぬる

と歌つたでは無いか。「曇りなき心の月」の一句に、深く留意し見よ。身は刑辟に觸れて、京洛に身を置く能はず、木の葉の囁きにも、心を驚かす落人の身となつて、九州の邊隅までも遁げ延びたが、而も、心頭に玲瓏たる眞如の明月を懸けて居るので、俯仰天地に耻ぢぬといふ確信を物語つて居る。而して自己の一死を以て波間に明滅する月影の如くに、至つて手輕に心得て居る。彼れの辭世の歌に更に次ぎの一首がある。

大君の爲めには何か惜しからん
薩摩の瀬戸に身は沈むとも

彼れ月照が「曇りなき心の月」と歌つて居る、其の心が何に向ひ居つたかは此歌に因つて更に明晰である。即ち彼れは、「大君の爲めには何か惜しからん」と言つて居る。

彼れは一身一家の我れを忘れて、偏へに我が皇室の御爲めに、謀つたものであつたことは、是れによつて明瞭である。其處で、笑つて一死を決し、月夜に舟を浮べて、薩摩の瀬戸に身を沈めることが出来たのである。

而かも、此の赤誠此の意氣は豈に獨り僅かに茲に數へたる二三子に止まらんや。其他高杉晋作にせよ、久阪玄瑞にせよ、坂本龍馬にせよ、頼三樹三郎にせよ、武田耕雲齋にせよ、若しくは佐久間象山にせよ、雲井龍雄にせよ、更に溯つて、藤田東湖にせよ、高野長英にせよ、渡邊華山にせよ、降つては木戸孝允にせよ、大久保利通にせよ、大西郷にせよ、江藤新平にせよ、誤つて、時には賊名を負ふ者はあつても、其の志の向ふところは、皆な一に忠君愛國の止むに止まれぬ心的態度よりして活動した人達である。諸君は徐ろに是等故人の國家に貢献した其の心迹を尋ねて大覺一番し、自ら歴史中の第一人者たるべく發憤興起して、日夜義勇奉公の道を講せられんことを希望する。五尺の小軀が、兎角、吾人の桎梏となりて、精神活動の障礙となるが、之れを綺麗に超越し、物質以外に解脱し見よ、天空海淵、まるで今までは打つ

て變つた趣きの異なる天地が眼前に展開されて、無限の法悦、無限の愉快が漲り來るを禁ずることが出來ぬであらう。

一六、大正十年は總勘定期

卅年一世と十年一期

民族の發展し、國家の發展し往くには、自ら順序あり時期のあること、猶ほ蟲々として伸び行く竹に節あるが如き觀がある。此世の進化は決して一直線に進むもので無く、何事にも律動的に進んで行く、自らが其の進化の潮流の中に交つて走つて居る間は氣附かすに居るが、一たび氣附いて、過ぎにし跡を振り返り見る時は、其れの律動的であつたことに必ず氣附く、そして大概三十年を一期として、變化の大波が打つものゝやうに見られる。それ故、支那では、三十年を一世といふ。「世」は即ち會意文字であつて、卅の下に一字を劃することが、之れを明瞭に物語つて居る。此點は西洋も亦

た一致するところであつて、ゼネレーション (Generation) を一代とするが、此のゼネレーションは即ち三十年である。東西洋共に三十年を一期として、此世の變化の一里塚に見立てるところは、甚だ興味ある如くに見えるが、併し其れは同一事實の觀察に根蒂することであると思へば無理はない。否、當然左うあるべきことである。

矢は滿を引くの時に於て放つべく、人は壯年の時を以て用ふ可し、人生五十の東洋の通り相場は甚だ短きに過ぐるとして、假りに之れを六十若しくは七十とするも、其の全體が人間の活動期では無く、少時と老時との後先を切り取つて見ると、其の眞實の活動期間は、平均三十年ぐらゐに過ぎぬ。之れを一家に見るも、之れを一國に見るも、少年が成長して壯年となり、父に代つて家長となり家政に當る時代、又た其れが社會に立つて先輩に代り、社會的活動をなす時代、此等を通觀すると、大抵三十年が先づ平均を得た年數である。是れが偶然にも、東西洋共に三十年を一期とするに至つたものに相違ない。然らば知るべし、一家は家長に率ゐられ、一國は國君に率ゐらるゝすれば、それは率ゐらるゝ國なり家なりが、又大凡そ三十年を一期として轉進する

の運命に在ることを。

併し乍ら、波は波を載せて走る、大波の表面に又た小波が立つと同じ道理に、此の時代變化の大波の中には、又た時代變化の小波が立つのである。其の小波は、我等が、此の明治維新以來、今日までの小歴史の上に徴すると、大凡そ十年一期のやうである。其處に、然らざる可からざる自然の定數があるやうに思はれる。更に譬ふれば、商店、會社といふが如きところで、一年二期に總勘定をし、帳簿を整理しては、新計畫新方針を立て、更に一躍進する如く、我が日本の國家も、亦た大凡そ、十年を勘定期として、其際に過去の總勘定をなしつゝ、進み往くやうに見える。商店、會社にして、其の勘定期に何時でも損勘定のみ立つか、若しくは然らざるも増資計畫も立たずに、新しく事業を擴張し行く工夫もなく過ぐるやうな事であつては、沈滞するか亡びるか、に決つて居る。國家も亦た其の如く、其の勘定期に於て、格別な成績を示さず、それによつて何等一躍進の方法もつかぬやうであるならば、其の國家の運命は衰頹か滅亡かに定まつて居る。

明治維新より現在まで

日本は、明治元年から維新事業を開始し、其間に幾多の小波瀾小曲折を経た後、遂ひに明治十年に至つて西南役の勃發になつたが、之れを一勘定として維新の大業は、大凡そ緒に就き、國家統一の基礎は確立した。それから後の十年は、欽定憲法の準備時代と稱して可なるべく、十年戦争の終局後には、當時の不平家も最早や武力を以て國事を争ふの非を自覺し、故板垣伯等並びに其他の同志は、其力を偏へに民選議員の建設運動に集中した。それが、強烈なる輿論となつて、遂ひに明治二十二年に至り、憲法發布を見たのである。即ち憲法發布は二十二年であるけれども、其の準備の熟したの、已に明治二十年頃に於てするもの、之れを第二期の總勘定と見ることに於て、何人にも大した異存はあるまい。それから以後の十年は、誰れも承知の通り、我が日本帝國が初めて大陸に發展するの一大氣運を招來したものであつた。即ち十年の西南役の禍因は、征韓論に胚胎し、而して、當時の韓國は常に支那の制肘を受けて、我國

に累すること甚だ大なるものあつたが爲めに、爾來、我が國民は一意此の禍因を肅清すべく、支那の暴慢を抑制するに努めて來た。其の結果が遂ひに二十七八年の日清戦役となつたもので、恰も其の總勘定が明治三十年頃になされ、臺灣も我が範圍に歸し、東洋に日本ありといふ實力を世界に承認されるに至つたのである。即ち、是れが第三回の總勘定であつた。

其次の十年には、如何やうなことが有つたか、實は日清戦役を経て、日本の名は普く世界に承認されるに至つたとは云ふけれども、併し乍ら日本と支那とは、等しく東洋の黄色人種仲間であり、非基督教徒仲間である。即ち、仲間同士の喧嘩に因つて日本が偶ま優勝者であることを認められたに止り、未だ其れを以て西洋の白色人種、基督教徒の國々との優劣如何は知るべからず。否、白色人種、基督教徒と力を角しては、到底及ぶべくもあらぬとの見縊つた感情を持たれて居たことは事實であつた。さればこそ、支那を屈した後の日本には、更に露西亞といふ一勁敵が現れ、是れが北邊より威壓して已まぬ。そこで此の外壓力を一掃するといふことが、其後の我が國民

の日夜忘るゝ能はざる志であつたが、それが遂ひに明治三十七八年の日露戦争となつて勃發し、而も、積年の志を遂げて勝利は我軍に歸した。其の總勘定が恰も明治四十年に附けられて居るので、露國に代つて滿洲に於ける、其の權利を我國に收め、且つ朝鮮に對する我が保護權を確立し、やがて其れが、後日日韓併合の素地を爲した。日本は此くの如くして其の總勘定の度毎に、一階は一階より高く、我が國運を發展し、我が國威を發揚し、今や白人の昏夢を覺まして、日本が單に黄色人種、非基督教徒の優勝者たるのみならず、又た直ちに、白色人種、基督教徒と角逐して、背後に落つるものならざることを實證した。即ち日本は、此の日露戦争以來、頓に國際間に於ける威信を加へ、爾來世界の八大強國の一として、列強の中に枚擧されるに至つた。換言すれば、今ぞ至人類環視の世界の檜舞臺に登つたのである。然らば、之れを一歩とした其後の十年の我が活躍は、更に大いに刮目して見らるべき筈であつたが、不幸にも此間に於て、明治大帝は神去りまし、御自身に其の第五回の總勘定を遊ばすことが出來ずに終つたことは、遺憾限りなき次第である。

併し乍ら、英明なる今上陛下を戴き奉る、多幸なる我が國民である。今上陛下は先帝陛下より遺され給うた御大業を御繼續遊ばされ、我等國民を鼓舞作興して、共に其の第五回の總勘定を爲さんと勉めさせられて居るのである。而して、今や恰も、其の時機に遭遇したのである。即ち日本は、此度びの大戦に参加して、共に戦勝の光榮に浴し、戦前の八大國中、獨、露、埃、匈國の三國が落伍して、世界は五大強國となつたが依然として其の五大強國の一に列し、世界の樞機に與る優秀なる位地を占めて居る。されば外交上にも、貿易上にも、大和民族が世界的に發展し行く上に、是れ程の好機は無い筈である。

一時を糊塗する勿れ

大正十年は、即ち、大正の御代に於ける第一回の總勘定の年であるが、果して、我が國民の、是れ迄、上下一致、眞面目に協力し、發展されて來た從來の總勘定を繼續し、今迄の如くに進み得るか如何かは、實に、我が國民が、既往に顧み、現在に謀り、將

來に察して、覺悟を定むべき大切な年であるのだ。大正の御代の十年としての第一の總勘定の材料は、ヴェルサイユ會議の結果、對米問題の結果、對支問題の結果等を如何やうにつけるかと云ふ點等、多々あるが、就中、吾人國民の考ふべきところは、今回の大戦争の結果として、日本が如何なる損益勘定を其の總勘定の上に現はすかに就き、最大の注意を拂ふべきだと信ずる。此の大戦の結果、列強就中、英米二國に其の實勢力上、一大發展を爲したことは、新しき世界地圖を展げて、仔細に觀察するならば、一目の下に明瞭なることである。然るに、此等に比較して、日本は果して、如何やうな發展をなしたか。南洋のカロリン、マーシャルと云ふが如き處、我が海軍が鮮血を流して、獨軍を掃蕩した處は、今、果して如何やうになつて居るか。更に具體的に問はんと欲することは、此度びの戦争で、日本軍が力争して取つた、此等カロリン、マーシャル群島や山東は、今果して、元帳の勘定口座のクレヂトルに記帳すべきかと云ふ點である。山東問題にも、色々支那側からケチを附けられて、我が當局にも何んだか躊躇孤疑の態あり、カロリン群島にしても其れが盡く我が收入とは爲り得ず

して、其のヤップ島の如きは、米國の抗議あり、日本の委任統治權より其れを除去せんとして居るといふ有様である。

是等は、其の吾人の眼前に横はる最も彰明較著なるものなるが故に、特筆するに止まり、吾人の不安を抱くところの外交問題は一二にして足らぬ。不安の眼を以て見れば、殆んど不安ならざるは無しといふほどに、諸方面の我が外交政策は行き詰り、其の總勘定が損勘定になるべく顧慮さるゝものが甚だ多い。一言にして云へば甚だ心許ない。此んな有様では、我が日本帝國が、果して、此の大正十年度以後、從來の發展率を以て發展し行けるか何うか、頗る憂慮に堪へぬ。然らば、我が帝國としては、官民共に力を盡くして、此の總勘定を我國の將來に取つて有利ならしむべく附けて行かなくてはならぬと信ずる。我輩は、世人をして、諒解し易からしむるやうに譬喩を、商店、會社に取つて總勘定と云つたが、或は其れによつて、何んとなく、我輩の考ふところが、偏に物質的慾望に傾くと解せられるかも知らぬけれども、其れは決して左うではないのである。併し乍ら、徐ろに、世界平和の將來を顧慮し見よ。而し

て、其の前提として、我が東洋方面の平和の將來を熟慮しよ。東洋諸國中、眞乎に完全なる獨立國として世界的に其の實力の認められて居る國は、我が日本帝國を除いて外には無いのである。然らば、日本は何うしても、此の東洋平和の維持上、重大なる使命と責任とを自覺すべきと同時に、自ら守るに必要な丈けの場所は、其の當然の權利の許す限りに於て之れを獲得し置かなければならぬのである。

それも、列強が、戰敗國の獨逸から一毫の利をも奪取せず、其の殖民地にも手を着けぬと云ふならば未だしもあれ、中部亞非利加から南洋に亘つて、其の殖民地といふ殖民地、其の策源地といふ策源地は盡く列強の手中に收め、凡てを委任統治の名の下に分割し終つたでないか、日本の得るところのもの、如きは、實に彈丸黒子の殆んど云ふに足らざる小天地である。直接の物質的利益から云はゞ、皆無と云つても可なるほど、唯だ其の地理的關係に於て僅かに便なりとするほどのものであるに、其れをも嫉視して日本に許さざらんとするが如きは、眞に公正を愛し、平等を貴ぶもの、心的態度とは見る可からざるものである。眞に世界が永久平和を欲するならば、

一切の禍心を抛棄せなければならぬ。然るに、未だ以て吾人の眼には其の禍心の抛棄を認めることが出来ぬ。其故に、今日、尙ほ我が國民に強ゆるに人種的差別待遇を以てし、又大戦の局を收むるに當ても我が日本の得べき當然の權利をも拒否せんと欲するのである。若し吾人にして之れを忍べば、列強の吾人に迫る差別的待遇、不正、不平等の處置と云ふが如きことは、今後、ますます續出して其煩に堪へざらんとするに相違ない。吾人帝國國民は、此點を十分に顧慮し、一時を糊塗して、我が國家の發展の將來に障害多からしむる如きこと無きやう、即ち、前からの譬喩を繼續して言へば、大正十年度の總勘定には、決して損勘定の立たぬやうにと注意せなければならぬ。

一七、尼港殉難を記念せよ

政争を超越せる大問題

尼港の悲惨なる出来事は人類あつて以來の稀有なる且つ最大なる虐殺の一である。

此の出来事に就いては、歐米各國共に、人道に對する博愛主義の上から、必ずや無限の同情を寄せらるゝことゝ信ずる。特に、同胞たる吾人日本民族に於ては、日々到着する報告によつて此の出来事を知る毎に、己れ自らが肌身を裂かれたる思ひをする。同時に、勃如として、義憤が起る。旺盛なる復讐心も亦た起つて来る。然り、此の如き同胞は、決して少しとは云はぬが、併し之れを全體から見ると、何う云ふものか、遺憾ながら、今日の日本國民は、歐米人よりも、其の同情の念が足らぬかを疑ふ。即ち、日本民族が以前よりも薄情になつたのでは無いかと思はれる現象がある。

是等は、彼の西比利亞出兵なる問題が、多く政黨政派の關係から起つたものゝ有ることなどが、其の幾分の原因をなして居るやうにも察せられる。けれども、今や、同胞の此くの如き一大虐殺を見ては、最早や政黨政派を超越して、政友會もなければ、憲政會もなく、國民黨もない。共に之れに對して、何等か我が同胞七百の英靈に對して、其の復讐を企むる丈けのことをすることは、之れを我が武士道の上から言ふも、

將た之れを人類の博愛主義の上から言ふも當然のことである。是れが爲めに兵力を要するならば、幾師團の兵を出すも宜しい。又た、それに金が要るならば、國民は進んで其の爲めに出資すべく、特に資産家は何億でも義捐するが宜しい。苟くも、日本民族は、此の七百の同胞の悲惨極まる殉難に對して、最絶頂の義憤を發揮せなければならぬ。若し、此際、此くの如き義憤を發揮すること無くして終るが如き意地氣なき國民であるならば、最早や我が日本民族は精神的に滅亡したものである。

無氣力の國民に友邦なし

果して此くの如くんば、嘗に、彼等、バルチザン、若しくは、過激派からして輕蔑されるのみで無く、更に、支那人、若しくは、我が化内の民たる朝鮮人からも輕蔑を受ければ、従つて、名は世界の五大強國の一に數へられて居るとしても、一般に歐米人の嘲笑を受け、最早や日本民族は頼み甲斐なきものとされるであらう。然らば正に明年七月を以て期限の満了する日英同盟の繼續の上にも必ずや多大の影響なくんばあ

らすと思ふ。

人間が、自ら奮起して、至大なる勢力を發揮すれば、其の勢力に依頼心を持つて、世人が之れに接近し來るは人情の自然である。それ故、或る場合には、脱線的に過度な勇猛な振舞をなし、過度な勢力を發揮しても構はぬ。それが爲めに、多少の過ちがあるとしても、謂ゆる過ちを見て此に仁を知るの原則に従ひ、世人は嘗に之れを寛恕するのみで無く、却つて之れに對する信頼の度が増加するものである。此くの如きは、吾人が、日常、市井に於て見聞するところに依つても明瞭な話である。頭を打たれても唯々諾々として婦女子の態を學ぶが如き男があるならば、傍觀者は其の打つ者を責むる前に却つて其の打たれたもの、腑甲斐なきを嘆じ、將來の利害關係を測ると、却つて打つたもの、方が有利になる場合が多いのである。個人に於けるも國家に於けるも此の道理に二つは無い。

ダンヌチオ氏の志を知れ

伊太利の愛國詩人、即ち、ヒューメ占領の義勇軍を率ゐたことを以て有名なる彼のダヌンチオ氏が、其の壯烈無比なる遠征飛行を試むるに當りて、我が東洋君子國の稱ある日本を、特に、其の目標とした所以は、何處にあるか。必ずや、建國以來、三千年の久しき、曾て、一度びも外侮を受けたこと無く、其の傳統的愛國心の燃えて烈火の如く外に發するや、之れを遮る山河なく壘壁なく、向ふところ皆な無人の曠野たる慨ある、其の意氣其の精神に滿腔の敬意を傾倒したものであることを疑はぬ。

斯くして、萬里相隔つる、羅典、日本の兩民族が、空間の交通によつて、直ちに相握手せんと欲したものに相違ない。即ち、ダヌンチオ氏は、明らかに日本民族の男性的なところに其の憧憬の目標を定めたことには一點の疑ひが無い。されば、ヒューメ事件が突發して、自己は暫くヒューメを離るゝ能はざるに至ても、一度び企てたる日本飛行は之れを中止することなく、遂ひにフ氏マ氏の二飛行士官をして、我國に到着すべく出發せしむるに至つた所以である。此のダヌンチオ氏によつて高價に購はれたる日本民族の名譽を忘却してはならぬ。日本人は、曾て、文永、弘安の兩役に於て

海を壓して殺到せる雲霞の如き元冠を、唾手一番して追ひ捲くつたのではないか。今度は、それにも優る一大義憤を起して、ムザ／＼此の狂暴なるバルチザンの毒手に斃れた忠魂義魄を慰安するの道を講せなければならぬ。是れにして、若し、能はずんば、我が日本民族の男性は今日限り維持し得ざるものである。

五月二十五日を紀念せよ

此の義憤を永續的に存在せしめ行くには先づ此の慘劇の演ぜられた五月廿五日を紀念すべく、一大紀念碑を日比谷公園に建て、七百の英靈を弔し、同時に、是れによつて、西比利亞の一部、少くともバイカル以東を占領して、此處に根強く日本の國威を樹立するの計に出なければならぬ。それには、伊太利のダヌンチオ氏が義勇軍を組織して、伊太利國の將來の發展上、必須の要鎮たるヒューメを占領し終れる絶好模範に倣ひ、我が日本民族中にも、亦た自ら進んで義勇軍を編成し、直ちに尼港附近一帯の地域を占領して、バルチザン及び過激派の如き人面獸心の徒を撃攘し、十分、同地方

の紀綱維持に任ずるくらゐの快舉あることが當然である。是れが最も七百の忠魂義魄を弔慰する所以、而して、ダヌンチオ氏等の期待に背かざる國民たるを得る所以の道と信ずる。然らずんば我が七百の英靈は依る所を失つて宙宇に迷ひ、尼港の天地は、長しへに、鬼哭嗷々、天陰れば則ち聞ゆるものあらんとするであらう。

復讐よりも英靈弔慰の道

我輩は、初めに復讐と云つた。併し乍ら、茲に云ふ復讐の意は、從來、傳統的に用ひ來られ居る其れとは、幾分、内容を異にする。人、故なくして辱めらるれば、則ち、之れに報いんことを思ふは、血氣ある者の常情であつて、之れを稱して復讐心といふ。例へば、淺野匠頭長矩が、吉良上野介義央に殿中に於いて辱めらるゝや、彼れは怒り心頭より發して、忽ち、佩刀の鞘を拂ひ、一撃を吉良の額上に加へた如きが其れである。而も、其れに因りて罪を獲、身死し家亡ぶるや、遂ひに四十七士の義憤と爲り、吉良邸の夜襲に義央の首級を擧げ、之れを長矩の墓前に供するの一幕とな

つた如きが最も人口に膾炙せらるゝ其の好例である。長矩の死するや、其の胸中、悶々の情は、必ずや、敵手の首級を見て甘心せんと欲したに相違ない。其れ故に、其の四十七人の遺臣が、義央の首級を擧げて、之れを長矩の墓前に供した一事は、以つて十分、其の遺靈を弔慰するに足りたことを疑はぬ。併し乍ら、其の復讐の方法にして常に、此くの如きものと決定したならば、謂ゆる目を以て目を償ひ、齒を以て齒を償ふといふ陋態に陥り、今日、人類に許されたる最高道德の標準にはならぬ。其れ故、我輩の茲に語る復讐は、復讐と云はんよりも、英靈弔慰の道と云つた方が、寧ろ、安當性を有する。

我が七百名殉難者の志

此度、尼港殉難者の七百の同胞は、必ずや其死に際して、露西亞帝國の解體以來、西比利亞の紀綱地に委し、而して之れに對する我が國威の張らざる爲めに、此の奇禍を招くに至つたことを慨嘆したに相違ない。然らば、之れに對する弔慰の道は單に我

が同胞に奇禍を加へたる彼等バルチザンに報ゆるに、等しく肩に五寸釘を打ち込むとか、双脚を各々一頭の馬に引かせて股裂きにするとか、妊婦の腹を裂くとか、幼児を軍刀の鋒尖に貫くとかいふが如き獸行を敢てすることには非ずして、西比利亞の紀綱を更張し、我が國威を確立し、是れに依つて大日本帝國が永久に外侮を受くること無く、國利民福の發展を阻礙せられざらしむるの基礎を築くにあらざる可からざることである。而して、是れが又た世界永久の平和の上に貢献すること大なるべく、換言すれば、我が七百の同胞の鮮血をして、千秋萬古、世界の永久平和の史上に赫奕たる光輝を放たしむるの一事にある。起てよ國民！吾人は、此の公明正大なる一大理想に本づく一大義憤を、今日、此際、大に西比利亞の野に向て發揮するの覺悟を有せなくてはならぬ。

一八、貧者の一燈

民族其者のエネルギー

民族の或は盛んに或は衰へ行く原因は種々あるけれども、其の最大原因は、民族そのもの、エネルギーの強弱にあるもので、社會組織の基礎といつても、それが資産階級といふが如き、限られたる階級の物質的力に頼るよりも、それ等を含んで廣濶なる一般國民の個人の精神の力に頼ることの方が大部分を占めて居る。之を信仰的方面に用ひられる諺を引いて云ふならば、謂ゆる長者の萬燈よりも貧者の一燈である。富者の捧ぐる萬燈には、假令、其光煌々として、アークライトを欺くが如き者があつても、其れには幽かなる精神的熱度が含まれて居るが、或は何等の其れも含まれて居らぬ場合が多い。それに反して、貧者の捧ぐる一燈であると、光輝は一燈だけで、如何に幽けきものなりとするも、それには天地を焦盡する底の精神的大熱度が含まれて居る。現今、我が大和民族には、富者の萬燈に屬する人が多いか、それとも貧者の一燈に屬する人の方が多いかは、我輩の頗る大なる疑問を抱いて來たところであつた。或は、有體に言へば、近來、大和民族のエネルギーは薄らぎ、唯物主義のみ横流して社會を支配し、謂ゆる成金風のみ吹き荒んで、其のオルガニゼーションの根底に龜裂

を生じたのちや無いかとまで疑ふに至つたのである。

然るに、先日、西本願寺で、尼港殉難者の大追悼會を爲したる際、其處に集つた幾千人の心底より湧き出でた同情が満堂に溢れて、殉難記念碑の建設を満場一致で可決した。而して、其後、日本全国各地から、續々義捐金が集まり來るを見るに、其中には或は兵卒諸君が僅かばかりの日給の中から積み立てた金や、或は工夫諸君の粒々辛苦の汗の結晶であるところの貴き金の頗る多いのに感嘆した。此くの如き現象を猶ほ認むるを得るに於ては、我輩が曩き疑つたやうな、大和民族のオルガニゼーションに龜裂を生じた譯では無い。まだ、我が大和民族の基礎は、富者の萬燈よりも貧者の一燈の堅確なる信仰の上に立つものであることを知つて、坐ろに我が意を強うした。非常に愉快に思つた。勿論、資産階級の方にも多くの義捐者がある。而して、其れにも、十分、精神の籠つて居ることを認める。而して、我輩は其れを尊敬して已まぬ。けれども、我輩の之れを尊敬する所以は唯だ義捐金表に現れた其の金額に因るもので無く、其れに表はれた崇高なる同情の精神にあるのである。即ち、我輩は貧者の一燈

的精神を特に喜ぶものであると同時に、此度び尼港殉難記念碑費に捧げられたる富者の萬燈の中にも、亦た、此の貧者の一燈的精神が、十分に籠つて居ることを直覺したからである。換言すれば、我輩の尊敬は、物質よりも、寧ろ、其れを通じて現はれた中核の精神であることを知らねばならぬ。

國辱紀念は何故非か

併し乍ら、唯だ甚だ遺憾に思ふことは、世には稀に此の記念碑建設の企てに對して水を注すやなう反對意見を吐く人のあることである。左様の人は、多く智識階級に屬する人か、又は資産階級に屬する人の中に發見する。此くの如きは感情を以て理性を没却する弊の強き人か、或は財布の口を締めて多少なりとも義捐することを惜しむ底の人か、當面を瞞過する口實に過ぎぬと信ずる。彼等の語るところの理由に曰く、吾人の國辱と信ずる尼港事件の如きものを永久に紀念する必要はない。加之、他日、露國との國交を回復する時に、斯かる紀念碑があつては其の親善の妨害になると、先

づ其の主張の要點は、大凡そ此の二種の外に出ない。併し乍ら、國辱を紀念することを忌む人は日清戰爭當時の臥薪嘗膽のことを忘れた人である。又、若し、其人が、假りに佛國民であるならば、巴里のブラスド・コンコルドに在る黒衣を纏ひ花輪の捧げられた、ストラスブルクの女神像、即ち、國辱紀念像に對して、無感覺な、非國民性の人であるに相違ない。

日露親善の妨害とや

又た此様な殉難紀念碑が國交回復の時に、日露親善の妨害になるといふ説も、人類の博愛といふことを解せず、其の精神が如何やうに働くべきかを知らざる人の語である。假りに之を二段に分けて説くとする。即ち、若し國交回復の後と雖も、露國民が若し尼港事件の如き非人道的行爲を悔いず、バルチザンの暴戾を續けるならば、左る行爲若しくは思想は人類を禍するものとして非難し、時には懲戒せなければなるまい。若し又た露國民にして眞に博愛的文明の域に進み斯くして、我國と親交を結ぶに

至つたとすれば、我が同胞の尼港殉難の歴史を回顧して抱く感じよりも、一層、痛切に彼れは他民族に對して氣の毒な殘虐な罪を犯したといふ慚悔心に迫られ、同時に如何にも之れを自國民の非人道的な行爲の紀念像と見て、忸怩措く能はざるもの有るべく、従つて、其れだけ多く七百の殉難者の遺靈に對して深甚の同情を寄せるに相違ない。露國が或る理想的文明の域に進んだ場合に、兩國民相一致して同情を捧げ得る、又た斯くせざる可からざるを目的とする此の紀念碑である。世の幾多の殉難紀念碑なるものは多く斯かる同情の念よりするもので、假令ば幾多の水難紀念碑その他の罹災紀念碑の類が其れで、此點に於て必ずしも日清役當時の臥薪嘗膽や佛國の黒衣像の如きものと類を同じくしない。左れば、單純なる殉難紀念としても、此碑なるものは、今日、建設し置くを以て至當の處置なりと斷ずる。下らぬ取越苦勞をして國交回復後に於ける露國の思惑を云爲する如きは、殆んど氣の知れぬ話である。

要するに、此の紀念碑建設の主旨は、已み難き博愛の精神から出て居る。それ故に他日、全世界の國民が博愛主義に進んだ時分には、互に之れを見て同情を惹起すべき

準備たらしむ可き事業なのである。恐らくは、一部少數の徒は措き、一般國民は我輩等が此の微意を觀取するに誤らざるもの有るべく、左ればこそ斯かる多大の同情を此の企てに對して集め得たる所以で、我輩は此の點に於て、全國の義捐者諸君に對し、深甚の感謝の意を表し、尙ほ益々此の事業の完成の爲めに自己の義捐と同時に勸誘の勞を賜はらんことを切望する。國民のエネルギーも機會の試金石に遇はすんば之れを立證することが出來ぬ。我輩は此際、謂ゆる貧者の一燈の熱誠を籠めたる全國の義捐に於て、其のエネルギーの強烈なるを立證し、我が帝國の將來の爲めに祝福せんと欲するものである。

一九、迂愚なる日本の學者

學者は机上の空論に

東洋文明と、西洋文明と、此くの如く二つの方面をとつて發達して來た其の分岐點

は何處にあるかと云ふに、學問の性質が、大體、西洋は實際生活を基礎として居り、如何に高遠な、幽玄な、若しくは雄大な理窟を説いても、其の出發點は實際の經驗から歸納し得たところに定めてある。それゆゑに、語つて虚ならず、行つて驗がある。之に反して、東洋では、實際生活に觸るゝよりも、寧ろ超越的理論を喜ぶ風があり、或る一前提を、直觀的、若しくは、悪く云へば、架空的に定めて、其れより演繹し來り、層々に疊み上げて、幾多の議論を派生するといふ風である。之れを精神的であると云はゞ、耳障りが宜しいかは知らぬけれども、其の弊は、空想に流れ、現實を離れるにある。今日、日本の學者は、此の東洋流の學問を棄て、皆な範を西洋に取つて學んで居るから、左やうの宿弊は最早や一場の昔物語と化し去つたやうに想へるが、併し如何に西洋流の實際的經驗を土臺とした科學的研究に没頭するとは云へ、三ツ兒の魂百までといふ俚諺の教訓に洩れぬ譯か、西洋の學者の飽くまで實際生活を重んじ、一歩一歩、それを顧み、生きた問題であれば、直ちに其れに觸れ行く傾きあるに反し、我國の學者は、矢張、超越的に、唯だ眞理を尋ぬるに没頭し、兎角、書齋に閉

ち籠つて、街頭を顧みざらんとする風がある。即ち、歩々に、實際生活を遠ざかり、何等か生きた問題があつても其れは自己分内のことにあらずと云ふの觀をなして、成る可く、其れに觸れざらんとしつゝあるかに見える。其の本づくところを極むれば、我國に在つては、特に、其れが、徳川の政略から養はれて來たやうに思ふ。即ち、徳川時代は、民をして由らしむ可く、知らしむ可からずと云ふ非民本的政治を踏襲して來たものだから、學者をして、亦た成る可く行政上の問題には觸れしめないやうにして來て居る。此に於て、知行合一を叫ぶ實行本位の陽明學よりも、先知後行といふ知ると行ふとの間に距離を認め、知ることを以て學者の専務とする朱子學を採用して官學とし、其他を異端邪説として抑壓するの態度を取り、而して朱子學派の學者は皆な謙讓を主として、實際生活問題には手を觸れざるを、寧ろ其の徳として來たのである。此の官學に對して、私學派中に、王陽明の學徒も現れ、熊澤養山、大鹽中齋、又は、山鹿素行といふ如き實行主義の學者も、多少輩出して來たけれども、其の勢力は極めて微々たるものあり、一般學者は依然として東洋流の弊を積み、徒らに語を尋ね

辭を追ふ、佛教の用語の謂ゆる解行を事とするに終る。

それが、矢張一般武士にも薰染し、武士すら其の心がけが實際を遠ざかり、劍術さへ次第に柳生流の御座敷藝的に、見る目には快感を與へて實戦に迂濶なるものと爲り終ると同様に、其の道德的教訓も亦次第に足が離れ行く觀があつた。例せば、武士は食はねど高楊枝といふが如きが其れで、一見甚だ立派に感せられるが如きも、其實偽善的で空腹に高楊枝で立派な戦争の出来るもので無い。此くの如き教訓を以て、武士的生活と實際の人間的生活とを引き離さしめんとする等は、大なる誤りである。武士と雖も人間である、人間である以上は、矢張、普通の衣食住のことは考へなければならぬ。勿論、非常の場合には非常の場合で、孤壘に嬰守し、糧道絶たれて日を送るといふやうな時に、其れが爲めに心頭の累を爲して、胼胝なき舉動を敵前に演ずると云ふ如きことは擯斥す可く、左る場合には、腹は減つてもひもじう無い流に、悠々高楊枝を使つて見せる心がけも必要なことで、精神を以て肉體を率ゐ、肉體を勵まして其の最大限度の能率を發揮せしむるといふことは當然である。是れが即ち軍人に飽く

まで堅忍不拔の精神を養ふべしと云ふ所以である。併し乍ら、此の如きは、唯だ非常な場合の事で、平常の場合の事では無い。平常、理詰の戦争をする場合には、矢張、腹が減つては戦争が出来ぬといふ方が偽らざる眞實である。故に、兵を講ずるものは先づ糧道を考へねばならぬ。然るに、斯かる偽善的空疎の議論が極めて實際的なるべき武士の間にまで持て囃されるに至ては、沙汰の限りと云はねばならぬ。机上の空論は此くの如くして、因習的に今日に傳はり、現在の學者の頭腦の上にも、依然として悪い印象を刻銘して居る。

活學者たる本分を

歐米の學者は、カントでも、ヘーゲルでも、近くは社會主義の大宗と仰がれるマルクスの如きでも、皆な抽象的な、架空な、實際問題を遠ざかつた研究をして居るものには無く、其れとは全然反對に、極めて實際問題に密接して議論を進めて居るので、其の一見したところ頗る高遠幽玄又は雄大に失するが如く見ゆるものでも、其の議論の歸

着するところは、必ず實際問題に落し込んで来る。其の志尙するところは實行にあり學、當世に用なくんば、學の功をなさずと見て居るのである。さればこそ、學者が、即ち、實行家である。實際政治家である。實際外交家である。米國大統領ウイルソンの事は今更めかしく言はずも哉、更に我國に來任せる米國大使、更に英國大使、獨國大使等を見よ。何れも堂々たる夫れれ、専門を有する立派な學者でないか。然るに、日本の大使は、博士を以て遣外使臣たり居るものが何處に居るか。試みに見よ、日米問題の紛糾するに當つて、米國に於てはハアヴァート大學名譽總長エリオット博士の徒が、堂々、議論を試み、排日論を主張して居る。其れに對して、我國の學者が、眞に歐米の學者の如く、常に實際問題を顧慮するの赤誠あるものならば、堂々立つて一矢を酬ゆべきである。勿論、我國にも遣外使臣がある。職責上、直接、其の接衝の任に當り居るものだから、無論、抗辯すべきには抗辯もして居らうけれども、其れが單純なる官界育ちの鰻上り者流であつては、到底、満足なことは不可ぬ。何んとしても、之れを、學理上、道義上、更に特に法理上に渡つて、徹に入り細を穿ち、論理的に分